

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
慶應元年十二月

〔扉に、表紙の文字の外に「元國事執筆史料」
(紙数九四枚)の記載あり〕

目録

舊邦秘録桂右衛門ヨリ島津求馬伊集院左中へ書翰
 國泰寺ニ於テ穴戸等札問之次第土岐新兵衛報告
 道島家記抄
 西郷吉之助ヨリ養田傳兵衛へ書翰京都ノ動靜報告
 全上十二月六日江戸邸引私云々
 在英国出水泉蔵ヨリ中原猶介へ書翰
 在廣島土持佐平太探訪報告十二月九日

小倉滞在土岐新兵衛探訪報告十二月九日

黒田嘉右衛門ヨリ養田傳兵衛へ書翰大坂ヨリ十二月九日

十二月十六日一橋中納言ヨリ御礼

伊達遠江守ヨリ桂右衛門へ書翰

道島家記抄

本藩歳入調

〔御船奉行届書船頭水手切米払増減〕

道島家記抄鹿児島事情

薩藩長州ニ密使ヲ派遣シテ連衡ヲ謀ル

当時各藩評判

乙丑十二月頃京攝事情

横濱来書中異人ノ説話

風悔情事申渡

夢マボロシ記

石腦油ノ効用

七三三 桂右衛門ヨリ島津求馬伊集院左中へ書翰

(長崎及ヒ京攝ノ事情)

一筆致啓上候、余寒殊之外強、難堪御座候処、

御両殿様其外様益御機嫌能被遊御座奉恐悦候、次ニ各

様御揃御安寧御精務、珍重奉存候、於爰許御邸中至極ノ静謐ニテ、当分ハ病疾等モ無之、仕合ニ御座候、扱拙者ニモ不相替元氣、毎勤罷在申候間、乍憚御放念可被下候、長崎表着船以來、折角差急キ出帆ノ賦御座候処、粗夷情承候趣モ有之候付、何分難差置、然ル折柄ガラバニモ横濱ヨリ帰崎ノ様子承候間、此方へ得卜承届候ハ、巨細情実モ相分リ、新説モ可有之申談、御國へ嫌疑ノ廉モ致説得候ハ、旁々可然、右之趣共程能断判ニ及候処、彼ノ方ニテモ大ニ安心相成仕合ニ御座候、右始末巨細言上ノ道、野村宗七罷帰候様申付置候間、最早疾ニ御聞通罷成候半、就テハミニストル御國へ鳥渡乗込度トノ事許、チト當時柄嫌疑モ有之、如何敷存候共、右ノ形行申上越候ハ、御賢慮モ可被為在、不容易訳合ニ御座候得共、漸ク夷情モ安シ置候上、又々破断ニ相成候テハ、込リ入儀ニ御座候間、程能キ御所置被為在度、シカシ折能岩下氏出府ニ付、彼ノ方ニテ断判相成候ハ、其儀ニモ不及相済可申哉ト申談置、右式無抛儀弾取、甚出帆モ及遅引、如何之至御座候得共、難捨置次第ニ御座候間、宜敷御汲取可被下候、彼ノ地去十二日出帆ノ処、冬ノ海ニハ海上モ珍

敷平和ニテ、十六日八ツ過大坂川口ニ着船、一日致滞留、長崎表御払前及過分拾万兩丈御借金相成度、伊地知御付人ヨリ頻ニ歎願ノ事候間、留守居へ申残、当分ニテハ随分御請モ出来可申トノ見込故、正月三ヶ日相立申込候ハ、可然申出候付、其通達置候、右ノ次第ハ伊地知歸府之節、御聞取可被下候、十九日爰許到着仕候、扱被仰付候御趣意、早速打寄演舌イタシ候処、一統異論無之、恐入承知仕候間、此段御安心ノタメ、乍荒増申上候間、

御聴ニ相達候儀共、宜敷御頼申上候、江戸表話人数御引払ノ一条ハ、彼表事実貫徹不致候上、央ヨリマチノニ相成、其節關係ノ者ノ内罷下候得ハ、決テ御掛念ノ廉モ薄ク、御安心ニモ可相成候処、其篇ノ処行届兼、当方ニテ委敷承候得ハ、時機相当之様ニモ相聞得申候、此節上村休介罷下り候由、委細御届申上候半ト奉存候、当分過激ノ論モ成程一応ハ世上ノ議論ニ依テ、庄中ノ談ハ為有之筈ト被相考、壮士暴生ノ枝葉ニ涉り候テハ、能キ事ノ様唱成シ候儀カト被察申候、右様ノ儀ハ折角念ヲ入御深慮ノ趣、一統万々恐入拜伏ニ御座候間、頓ト安心イタシ候、当地ノ形勢未タ能ク相分兼候得共、

得ト承候得ハ、決テ掛念ノ訳モ無之、相隔居候得ハ、
 何か一物異論モ有之ソウニ被思候儀ニ御座候、御人数
 引取之儀、当分ニテハ日々変態イタシ、全ク見留モ付
 兼、当御邸只断然ト手ヲ引相守居候処ヨリ、各藩薩ノ
 動靜ヲ伺ト言様ニテ、長州御征討ニ付テモ、小藩タリ
 共少シモ不相応、大ニ策ヲ失シ、頻ニ一・會ヨリ無謀
 策ニ落サレ候トノ幕情ニテ、夫故一向幕府ノ奸策モ、
 一円不被相行、布テ内乱ニ相及、既ニ一橋ヲ落付策モ
 良相立候様子、此末必ス混雜ヲ引起シ可申案中ニ御座
 候、過日柴田藤五郎ヨリ申出候趣モ有之、一橋へ小松
 家御召相成、又會津ヨリ頻ニ相会度杯、様々手ヲ廻
 シ、小松家ニハ先日取合相成候処、至極相喜ヒ、合掌
 シテ相謝候位カタ〜思ヒ合候得共、奸策ニモ無之、
 幕ハ勿論一・會辺ニ於テモ策ナフシテ、実ニ尽力ヲ願
 ヒ候形ニ相見得、御而殿様御上京テモ有之候得ハ、
 三代以前之旧制ニ復、大坂川口迄御出迎テモ相成、御
 信義ヲ御尽シノ治論相成居トノ説ニ御座候由、其外小
 藩等ハ追々依頼之筋ニ御座候、右ノ件々ハ、外々ヨリ
 モ申上候半ト存候間、致省略候、夫故御人数ノ儀ハ、
 今暫時ハ見合置度、一統ノ吟味ニ御座候、此段宜敷御

取成置可被下候、肥後モ国論相変、是迄当地話ノ留主
 居植田休兵衛ト申者、此度追下サレ、是迄之周旋甚不
 宜、只會藩之論ヲ信ジ候トテ、大ニ議論相立候様子ニ
 御座候、此度柳川藩便舟相願、右ノ者共ヨリ承候得ハ、
 十時攝津肥後へ使節ニ相立、君侯ト丈之助公子トノ間、
(維也、柳河藩士)
 此比何トナク情義隔絶ノ形ニ相見、御和熟相成度、植
 田ヲ御呼下シニ、二ヶ条申込相成候処、疾ク二ヶ条共
 相決居候付、少モ掛念ニ及間敷、返答為有之由相断ニ
 付、則承合候処、両三日跡打下サレ候由、カタ〜面
 白キ形勢ニ推移、能キ仕組ヲ見可申ト笑談イタシ候、
 伊勢殿御暇モ先ツ暫時見合相成度、当分ノ人数被召置
 候得ハ、御屋鋪取締モ、小松家外宿ヨリ掛テ行届兼候
 訳モ御座候付、是モ先ツ暫時見合候方可然哉ト、小松
 家ヨリモ頻ニ承候間、左様御心得可被下候、私ニモ最
 早御用モ無之候得共、来月末迄致滞留候ハ、長州一
 条モ何トカ相分可申、西郷ニモ此度ハ暫時成共、同伴
 ニテ罷下度談置候付、カタ〜爰許ノ模様モ見合候儀
 ニ御座候、藝州表出張ノ大小監察モ、両三日跡罷帰候
 由、慥ニ断判ノ次第モ不相分、専程能為相濟哉ノ風説
 ニ御座候得共、又一説ニハ愚弄セラレタルトノ嘶モ有

之、至極秘事ニイタシ候模様ニ御座候間、逆モ十分ニ
ハ出来申間敷被相察申候、尚爰許ノ事情委敷申上度御
座候得共、着涯未何モ能ク相貫キ不申、乍荒増承得候
形行申上置候、恐惶謹言、

十二月六日

桂 右衛門

島津 求馬様

伊集院 左中様

其外様

尚々此近日風評、閣老御国へ使節江相立トノ嘶モ有
之、出所モ不慥、全ク風聞カトモ存申候、シカシ柴
田ノ嘶ニ御上京ヲモ相計候ハ、書翰共ニテハ不相
濟、使節テモ差立不申候テハ難叶杯ノ嘶モ、閣老辺
ニ為有之候トモ申事故、右咄杯ヨリ右之説モ申触候
哉、只今承候迄ヲ、虚実ニ拘ハラス申上候間、左様
御汲取可被下候、以上、

別啓、私事別段 御伺モ不申上置候得共、先般攝海へ
異船致渡来不容易御場合ニ付、早々被遊 御上京、
天氣御伺之御用意迄モ相成居候得共、速ニ致退帆候間、
此節被差出御伺相成候筋ヲ以被仰上、可然申談既ニ今
日相勤答ニ御座候、尤諸藩モ追々罷下候由ニ御座候間、

此段達 尊聴候儀共宜敷御頼申上候、以上、

七二四 國泰寺ニ於テ穴戸等札問之次第

(土岐新兵衛報告)

長州家老穴戸備後之介事、藝州廣嶋江被召出、幕
役御札明相成、其場之次第等承得候形行左ニ申上
候、

毛利大膳父子昨年御征伐被仰出、各国出勢之上致伏罪
候得共、尚亦御疑惑之廉々有之、御尋之趣被為在候付、
末家并家老共之内致上坂候様、先達てより度々被
達候処、長防之者共、殊之外狐疑を懐キ、何角と申立、
御召ニ不応候付、篤と御諭有之候ニは、自今激徒之者
共疑惑を生し不致上坂候は、自然幕役人山口其外何方
迄も御踏入、大膳父子は勿論、諸隊共迄も被召出、道
理を以御詰問可被相及、為被仰渡由候得共、今度四路
之正兵御差向ニも相成候趣、致伝承候処より、弥嫌疑
を起し候哉ニも相聞得候付、兎角政府ニは、其法則被
為在候儀ニて、御人数御差向とは乍申、都て善悪邪正
之無御差別も、不法ニ御打入等之御振舞不被為在候旨、
尚亦被 仰諭候処、右様之御達ニ承服致候哉、長州家老

御裁許掛衆

(鳥津忠承氏所藏本にて校訂)

七二五 道島家記抄

江致着候由にて、今日前条旁之形行承得申候間、為御見合此段申上候、尤右御乱之儀は、初て之事にて、一通り之御乱ニ候得共、追々は御疑惑之廉々、せり詰たる御詰問ニ可相成向ニ被伺候由、承得申候、

一先日御届申上候通、模様次第御打入ニ付、左之御人数軍目付割替被仰渡候由、

井伊掃部頭様
(直憲、彦根藩主)

軍目付

朝倉藤十郎
(安毛、龍野藩主)
脇坂淡路守様

同

黒田五左衛門
(廣順、熊本藩主)
細川越中守様

同

長坂血鎧九郎

右通承得此段申上候、已上、

小倉滞在

唐物締横目

土岐新兵衛

丑

十二月六日

生産方掛

ノ事ナラン、

七二六 西郷吉之助ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

(京都ノ動静報告)

別啓仕候、御当地之形勢も暫時ハ不動、些静まり候塩梅ニ御座候得共、兵庫開港一条六ヶ敷成立、再攝海江廻艦之説紛々と相起候得共、弥相廻との義ハ不相分、大ニ失策を働候義と、一橋杯万悔之向ニ被相聞、幕府ニおひても私意を以、

朝廷を欺き候後難之恐を慮ひ、此機会ニやり付置様之計謀も不知処ニ御座候、若右様之計ニて攝海江相廻候ハ、又一機会も相生シ、此節ハ意之尽ニハ参兼可申事歎と奉存候、此度之所置を失ひ、因備辺之処も、頓と一橋侯ニハ兄弟之親も相離、人望絶果候向ニ御座候、

幕府よりも大ニ嫌疑を掛居候処、全嫌疑を速賦ニて相働候事、皆々嫌疑を重、十計断果候向ニ被相伺申候、兵力ハなし、如何とも致し様無之様子、当分辞職之義も御申出ニ相成候由、是ハ畢竟是迄ハ一ヶ月壹万六千兩ツ、幕府より続来候処、昨年来全不相送候付、京都町奉行手切を以一万五千兩ツ、月々差続居候処、將軍上洛以来此手も相離、一切統料も無之、拾万石限之事と相成、十方ニ暮候処より関白殿下至極之御ひいき故、攝津辺御宛行之義も御達相成候得共、閤老辺之処誰も受統人も無之、此度辞職ニ付、願之趣不被聞食候様、會津より

殿下江申入候処、海防之手当相成候丈ハ、御宛行之道不相立候てハ、御差留之処も六ヶ敷訊ニ候段、御沙汰相成候処、決て何之備も入る事ニハ無之、陸地ニ引上ケ接戦より外ニハ策も無之候故、刀一本ニて相濟候訊と申切、全相拒候由ニ御座候、就てハ閤老辺之処ハ、格別忌候向ニ無之候得共、其下之処一橋侯ヲ惡ミ候義甚敷、只今之処難ヲ不生ハ閤老之不応迄ニて、今日を過候事と被相聞申候、つまり此間ニ変を突候義、相違有之間敷と申説ニ御座候、実ニ兵力ハ無之、危き事と

被察申候、天下之人望ハ相離、可頼処更ニ無之様子ニ御座候、會・桑之処ハ少しハつるばり候処も可有之候得共、余ハ全手切ニ罷成候由ニ被相聞申候、

○長州之義も、永井・戸川杯先月六日大坂出立ニて、廣嶋迄参候得共、一段病氣と称シ伊原引取之後不参、いまた談判も無之由ニ被相聞申候、若哉不出来候得は、如何可致事哉と又心配之向ニ被相聞申候、中途迄段々と人数も繰出し居候得は、是以何となく引揚候義も出来申間敷、実ニ大笑ニ堪不申事ニ御座候、全体永井等江合之趣ハ領地差上、大膳父子之処も退隠と申義を申出させ候へハ、山陵之一条ニ付大赦被

仰出ニ相成賦ニ候間、其廉を以是迄之通何も支なく被仰付との諭有之賦と申説ニ御座候得共、長州より不出来候てハ、何之策も不被行込入候事と被相聞申候、

○板倉・小笠原之兩人御登用相成候得共、いまた何も相変候義無之、是以因循之様子と被相伺申候、畢竟幕吏之黜陟も相始候含と被相聞申候得共、若哉沸騰も生し候てハ、我身も危しと申事ニて、川越候之上坂を相待居、是より事を始候へハ、物議も相起らハ、都て川越候江打掃せ可申胸算と申説も御座候、右様身構を先

ニ致し候位ニ御座候へハ、大概程か知れ候事ニ御座候、可歎世態とハ罷成申候、此衰世を立直し候義、余程之豪傑ニあらずんハ出来申間敷事と奉存候、會藩杯之処も、いつれ明賢侯御來會と申場ニ不相成候てハ、迺も天下之治まりハ付申間敷と、近來致方なく議論も相立候様子ニ御座候、詐術權謀を以諸藩を愚弄致そふとハ、余り氣強き仕方ニて御座候、見込通不參と相見得、近來ハ余程媚を求候次第、実ニおかしな事ニ御座候、此旨大略申上候間、宜敷被仰上可被下候、恐々謹言、

西郷吉之助

十二月六日

蓑田傳兵衛様

(天久保利謙氏所蔵本にて校訂)

七二七 全上(十二月六日江戸邸引弘云々)

御兩殿様益御機嫌能被遊御座、恐悦之御義奉存候、貴兄ニおひても、寒冷無御障御勤仕之筈、珍重奉存候、陳ハ江戸表御役所等御引弘之一条、如御尊論政府より表通御問越相成候趣、具ニ承知仕候、此一条ニ付ては、

専私主張いたし候訳ニて御座候、天下之事情不貫徹御事歟、決て果断杯と申御扱ニてハ無御座、時勢相当之御事、此御方様より先ニ立て、御始め被成候様之訳なれハ、御懸念之御事も、可有御座候得共、各藩ニハ後れ候事ニ御座候、親藩すら御主殿迄も国江引取、定府も不殘引弘候次第ニ御座候、勿論大奥不被召立置候てハ、天璋院様御方江御情義ニおひて、被為疎候訳更ニ無之、如何程大粧ニ被召立候迎、只御取次迄之御事、日々御用共相勤候訳も無之、只費用を重候迄之事ニ御座候、御主殿迄国ニ引取之義と親疎之情義を以、大小輕重之処如何可有之哉、左すれハ只費を増候計と相成可申、他邦江御縁辺之

御方々様ニおひて、大方御国元江被為入候御事ニて、是以御疎遠之筋ニ被為当候御訳合も無御座、大縁寺等(四)之義、御役所不被召立置候てハ不相濟義も有御座間敷、御元祖様御靈屋と申ハ、何百年も戦争を経、鎌倉江被為在候御事ニ御座候得は、是以被為届兼候場ニ難申上、いつれ君公も御出府不被為在日ニ至り、御役場被召立置候御訳合無之御事、一々条理を以論し詰候へハ、何も筋之立候御事ニも無之、只嫌疑を恐れ候迄ニ相成

可申、當時ハ幕威相衰候故、嫌疑をさけ候所ニ、少し
 手之見得候ヘハ、益嫌疑を重候場ニ陥可申、四方嫌疑
 を掛候世上ニ候ヘハ、是以中々行届可申様も無之、是
 迄幕府之仕掛と申者ハ、色々流言を放テ嫌疑を掛て、
 内之混雜を見て、俗論を助て立崩し候義妙手ニ御座候、
 當時之処全ク手を引て、名義を明にし、条理を正し、
 枢要之場ニ建言相成候故、却て俗眼之嫌疑と見る処ハ、
 幕府之一策と相成、もふハ自分之失体を改不申候てハ、
 不相濟ものと相成、日々変革ニ心を向候趣ニ御座候、
 右様事情之不通より、裏はら相成ものニ御座候間、御
 熟考可被成下候、尤岩下君・吉井氏下着相成候付、右
 辺之所相分居可申事とハ相考候得共、尚又上村下着相
 成候ハ、江戸表之事情巨細御分相成可申、間ニハ私
 情を以嫌疑説を唱候ものも有之向ニ御座候、拜借等自
 由ニ相調、随意之遊樓ニ面白かり、江戸へ行たし念不
 已、物議相起候事も不少哉ニ相聞得申候間、必俗論ニ
 御沈被下間敷、天下割拠之姿ニ相成、いまた戦を不始
 計ニ御座候処、因循之説を以諸方江大ニ費用を増し候
 義、有眼之もの可恥事ニは有御座間敷哉、実ニ無用を
 省き、有用を事とする時節、小事ニ拘ひ区々たる訳ニ

ハ無之事と奉存候、上村より委敷御聞取得と御深察奉
 希候、若事実相当之訳と思召御座候ハ、政府江も宜
 敷御弁解可被成下候、不相当之訳ニ相成候ハ、其罪
 ハ私蒙申度、天地ニ正して恨無御座候付、少シも御遠
 慮被下間敷候、如何様共御取扱奉願候、為其貴兄迄申
 上候間、公平を以御汲取可被下候、頓首、
 西郷吉之助

十二月六日

蓑田傳兵衛様

(天久保利謙氏所藏本にて校訂)

七二八 在英国出水泉蔵ヨリ中原猶介へ書翰

(出水ハ寺島宗則変名)

乙未十二月七日書

折角御自玉所偏禱候、

其後御疎濶打過、御海容愈御安康奉拜賀候、生無恙消
 陰仕居候、乍憚御省念可被下候、楮十日前御地八月
 旬ノ書牘相達、御地全国之形勢巨細相分、征長モ不行
 由、併結尾之模様如何ニ御座候哉、其後之新紙ニ、三
 国之艦攝海へ相赴キ、詳ニ一月一日ヨリ武庫大坂開港
 之相成タルヨシモ、速ニ相聞へ申候、其時京攝辺之騒

動ハ、如何ニ大ナル事ヤラント想像仕事ニ御座候、十年前癸丑ノ歳、ペルリ之来ラサル以前、毎度右来襲之風説有之候処、海外ノ情ニ暗キ人々ハ、中々ニ其実ニ来ルヲ不信、其后蘭船ヨリ墨ノ書翰ヲ送候得共、マダ夫デサヘ不信、安閑トシテ内、浦賀沖へ墨船見ヘタリトテ、大ニ慌テ騒ギタリ、其後モ外説ヲ信セザル故、毎度失策勝チナリシニ、此度モ攝海へ来ルコト、恐クハ故人ノ不信処ニテ、不意ニ出タルナラン、サテ信シタリトモ、無用ノ用意ハ却テ国用ヲ費スノミ、況ンヤ鼻先ニ来テヨリノ備ハ、本ヨリ無益ノ事ナルコト知ルベシ、偕此度ハ無益ノ拒論ヲ捨テ、速ニ御許容アル事實ニ可賀、唯惜ムラクハ来ラサル前ニ我ヨリ先ンシテ許容セバ、主客ノ違ヒ彼ノ卑蔑ヲ免ルヘシ、往事ハサテ措キ、此後ハ外国ニテ何等ノ睥睨、何等ノ風説、何等ノ新事等起ル哉、茲ニ国家盛衰ニ目ノ属ケ処アルヘシ、俗間ニ云、近来ノ兎輩ハ、吾兎ノ時ヨリモ伶俐ナリトイハヌモノハ希ナリ、是ヲモヲモハス、井底中ニ在テ見ル処ノ天ハ我天ナリ、此天ノ一分晴ル中ハ、一天晴トヲモフ事、則目ノ付サルナリ、曾テ誰ヤランノ説ニ、印度ノ覆轍ニ陥ラン様ニアリタシトイヒタル

ハ、近頃ノ事ナリ、生今日閑ヲ得テ、幸ニ貴兄ニ印度ノ逸史ヲ略説センコトヲ願フ、抑英人印度ニ商会ヲ初メタルハ、二百六十年前ナリ、其頃ハ英ノ商賈彼地ニ住ミ、貿易ヲナス中、印度ハ我邦ノ如ク諸侯多ク、互ニ怨望起リ、其先キ佛ノ商会モ亦至リ、或諸侯ハ英ニ助ヲ乞ヒ、或ハ佛ニ依リ、遂ニ英・佛ノ争ヒ起リ、是ヨリシテ其土英・佛ノ手ニ落タリ、其間凡ソ百年英ト始終戦止ム事ナク、始ハヒドル帝ト云ガ強カリシガ、此モ敗レテ地ヲ奪ハレ、次デラヂヤ、又チツボセーブ、又バツセイーン、又アメタバブ等皆敗レテハ、降約ヲナシテ地ヲ裂キ与ヘタリ、千八百五十九年迄ハ、印度ノ兵ハ皆商会ヨリ雑費ヲ出シタレトモ、其政府ヨリ雑費ヲ出シ、終ニ印度英ノ政府ニ属ス、其弊一ハ學術ヲ知ラザルナリ、二ハ諸侯互ニ和セサルナリ、三ハ英・佛・瑞典・和蘭ニ互ニ助ヲ乞フテ、分裂シタルナリ、四ハ戦ハサル前ニ和セズ、敗後ニ必ス和シ、其愚ヲ輕蔑セラレ、常ニ其愚ヲ卑ミ、下ヲ惡ミ、再三沸起シテ終ニ瓦解シ、屈伏セルナリ、其五・其六等ハ贅説ニ違アラス、然ニ前ニ印度ノ覆轍ニ徼ハヌ様ニトソ、恐クハ浮薄ノ考ヨリ起リ、印度ニ商会ノ創リタル時分、何故ニ

早く攘去セサリシヤライフ事ナラント察セラル、是海外ノ事歴ヲ精知セ又誤ナリ、我或ル論者曰ク、瓦トナツテ全ラヌヨリ玉トナツテ碎ケヨトナリ、二百六十年以來ノ印度人ノ論、皆是説ナリキ、碎ケタルハヨシ、余類今コソ瓦トナリテ存シタルニ帰ス、方今印度ノ風可憐、裸体ニ一片布ヲ纏ヒ、炎日無帽脱履、然レドモ其人天性有才早ク悟リテ、学智ヲ育フタランニハ、今ノ屈下ニ至ラサルヘシ、生近頃新聞ノ中廣東ノ部アリ、之ヲ見ルニ、一日一英人市中ヲ歩シ、一酒店ニ入ル、先ニ清人三人アリ、父母及其兒也、其父兒ニ対シテ云フ、蕃鬼フンガイ来ルト、英人ハ清音ヲ解スルモノナリ、英人乃怒リ、清人ニ向テ云フ、蕃鬼トハ吾ヲ唱フルニ非ズヤト、清人辞云、君ヲ称スルニ非ス、今兒泣ク故ニ之ヲ驚シテ、泣ヲ止ント云ヒタルナリト、乃英人兎面ヲ見ルニ泣色ナシ、英人ヒソカニ怒リテ思ヘラク、土人英人我ヲ称シテ外夷蕃鬼ト為スコト久シ、兒ヲシテ此語ヲ聞キ習ハセハ、成長ノ后モ是ゾ思フノ侮蔑絶フヘカラストテ、之ヲコンシユルニ訴ヘ、清吏ト前ノ酒店ニ来ル客名ヲ探シ、之ヲ官衙ニ召シテ嚴シク罰セリトナリ、清英ノ条約中ニ、以來夷字ヲ唱フベカラストイ

フ約束ハアレトモ、是ノ如キ些少ノ事サヘモ英人ニ怒ラル、ハ、必竟林則徐カ大失策ノ為ニ、廣東將ニ焼レントスル時、六百万ドルノ贖金ヲ出セシハ、今ヨリ二十四年前ノ事ニシテ、其翌年香港ヲ与ヘ、五港ヲ開クコトヲ、南京条約ニテ定メタルニ、直ニ土人外国人ノ館ヲ焼キ、再ヒ戦起リ、九年前ニ終ニ廣東ヲ焼カレ、鎮台吏廿余ヲ擒ニシ、翌年天津ニテ和睦ノ条約ヲ為シ、更ニ北河ニテ偽テ船ヲ撃チ、其翌年北京大敗績、又八百万トルヲ出シ、此等ノ愚勝テ數フベカラス、豈タマタマ一人夷字ヲ唱フルトモ、アゲテ數フヘカラスル拙陋アラサレハ、前ノ様ニ怒リヲ受クル故アラシヤ、千八百六十年北京落城ノ後、此ヨリ北河ノ末ニ多沽城アリ、英兵五年ノ間城砦ニ入り、皆英ノ預リトナリシニ、二千ノ兵卒去歲即六十五年ノ冬、悉ク引キ退キ、砦ハ清政府ニ返シタリ、多クノ卒等五ヶ年モ居リタル事ナレハ、土人モ親ミ深クナリテ、離別ノ時ハ互ニ袖ヲ濡サヌハ少ナカリキトソ、新紙述者ノ按ニ、五年前ニハ此多沽城ニ支那ノ兵、屯營シテ英艦ト戦ヒ、其時サヘ敗レントハ思ヒノ外、五ヶ年モ人ニ乘リ取ラレタルニ、今別レヲ悲シムトハ何事ソ、本国ヲ慷慨スルノ徒之ヲ

聞カバ、更ニ一層ノ悲嘆ヲ益スヘシト云、又他紙ニ云、北京中ニ二僑アリ、外人ヲ好ムト惡ムトナリ、其不好僑ハ兵器ヲ多ク作り集ム、近日既ニアールコック到着セリ、必ス其事ヲ詳悉スヘシトテ之ヲ見ルニ、多年ノ頑愚未タ改悔セス、支那・印度ノミナラス安南モ同様ナリ、亜細亞ハ歐羅巴ヨリ余程早く開闢セル国ナルニ、今ハ之ニ反スル事實可惜、

儲緒論ハサテオキ、御地攝水中ニイヨク湊泊スルコト別条ナキ新紙ノ趣ナリ、此モ不得止押テ開カレタル事ニ無相違、然ラハ矢張グツ／＼、イヤナカラ貿易スルノ有様ナルベシ、浮説ニモセヨ俄羅ハ貿易ヲ意トセス、全国ヲ吞シカ為ニ、既ニ三四十万ノ兵ヲ備ヘヲケリト云、故ヲ以テ右ハミニストルヲ遣ハサス、是平時不用ナルノミナラス、將來突然發動ノ節ノ妨トナルヲ以テナリ、先年對州暴奪ノ時ハ英ノ助アルニ由ル、弱ハ強ノ肉トハイヘトモ領中ニモギリキ・ホルト・デネマル・オランミ諸国ハ弱ニシテ、他ノ敵タルベカラストイヘトモ、互ニ相助ケテ恙ナク独立セリ、トルコノ魯ニ囑セラレサルハ、此故ナリ、由是觀之イヨク將來ノ形勢ヲ同視シ、我国ヲ永ク万国ト併立セシメンニ

ハ、国家最上ノ主君大炬眼ヲ開キ、古頑ヲ捨テ、一新生児ノ如クナルヘシ、是則海外三四ノ大国ニ遣使ヲ置ク也、此説ハ生カ一生ノ燕石策、其詳ハ寸紙ニ難尽トイヘトモ、御賢量アルヘシ、タトヘ京ノ縉紳ハ盲ナリトモ、諸侯ハ割拠己ヲ防クトモ、ツマリ世間同様、教化ニキワタ、ネバカナワス訳アリ、分裂シテハ力足ラヌ事、我国ヲ一塊物ノ如クカタマリ和シテ一主ノ指揮ニ從フモノト見テサヘ、未タ他ト和好ナケレハ独立難シ、印度ノ約ハ分裂ヨリ成ル、洋諺ニ一薪ハ折易ク、東薪ハ折難ト云ヘリ、洋書ニ曰、一国人頑陋無知ニシテ解キ難キ時ハ、威ヲ以テ押スベカラス、急ヲ望ムヘカラス、一壮年^三精神敏活、道理貫通セル者ヲ選ミ、隣国ニ遊説セシム、但隣ニテモ同壮年ニシテオアル者ニ其説ヲ移シ、再其隣人ヨリ次ノ隣国ニ伝フルコト前ノ如クスヘシ、其者國中ニ在テ同ク壮年ノ者ニ説キ伝フヘシ、此術ヲ洋語ニテ^(Propaganda)バラガンタト云、五年前イタリヤニ有名ノ將ガリバルチナル者、此バラガンタノ術ヲ以テ国父ヲ説キ、王ノ兵ヲ借ラスシテ義勇ノ兵ヲ起シ、ローマ・リアヲ撃チ、終ニサルヂニー小國王ヲシテイタリア全国王トナシ、功成テ郷里ニ帰り余生ヲ養

へリ、今年六十許、先日ロントンニ参リタルヨシ、歐ニテハ三才ノ児モ此名ヲ知ランモノハナシ、偕我國ニテ此術ヲ行フタルモノハ、浪人ナリ、邪説ヲ以テサヘ鳥合セリ、況乎堂々ノ説国家恢復ノ助ナル事ヲヤ、乍恐先年老公度々御尽力ト聞ヘ奉リ、力ニ任カセテ急成セントノ御本意ナリシニ、經費ニ応スル程ノ功力アラバ、其後紳家開眼アル筈ナレドモ、否サルヲミレハ、所謂パラガンタノ所戒ニ帰シ可申候、蔭ナガラ愚シ奉ルニ、当時急成セサル勞ヲ惡ミ、晩成ノ効ノ勝レタルヲ思ヒ玉ワヌニヤ、今ハ其説変リ一國サヘ盛ニセハ、是ヨリ他ニ伝ヘン、他ハ其任アリ知ル所ニ非スト聞ヘタレドモ、是事全ク生カ愚意ニ解シ難シ、日本一國合シテサヘ大ナラス、況乎是ヲ百分セル一ヲ有シ、独立シテ歐風ノ開化ニ擬セン事、実ニ難キノミナラス不能ナリ、始ハ血氣ノ勇ニ乗シ、一時ニ濡手握粟ノ策成ニ似タレトモ、固ヨリ不能、且永続ノ望無覚束、抑西洋ノ盛ナル以所ハ、人ノ知ル通コムパニーナリ、或十人、或五十、或百人相合シテ、元額ヲ出シ大業ヲ起シ、永年ノ間其利ヲ平分ス、汽船・汽車・伝信・気灯・製鉄・造炮其他無数ノ工商ノ公会アリ、此公会ヲ結ハサル間

ハ、決シテ我國ヲ東方ニ掘起セシムル事不能、即パラガンダノ説ヲ以テ諸侯及紳家ニ伝ヘテ、同時ニ最上ノ君主ヲ理解シ奉リ、其命攝中ノ大商ニ令シ、大商諸侯相合シテ所謂コムパニートナリ、全国中一致セハ此時コソ大雪恥ノ時ヲ得タリト謂フベシ、然レトモ此間長フシテ急成スベカラス、全国一致スルサヘ、外国ノ睥睨ヲ防キ難キノ恐レアリ、故ニ早ク三四國ノ大國ニ遣使ヲ置ク事肝要也、賢兄若シ要路ノ人ニ逢フ事アル毎ニ此説ヲ解キ玉フベキヲ希フ、然レトモ或ル人ハトテモ力ニ及ハス故ニ、一國ノミヲ助ケテ之ヲ他國ニ表シテ、全国ヲ拯フベシト答フル時ハ、生カ愚案ニ合セザル也、思フニ此ノ如ク答フル人ハ、京師ニテ急功ノ成ラザルヲ悟リ、稍憤懣ノ意ヲ抱キ、退イテ守拙スルノ心ナリ、実ニ尤ナレトモ、先入ヲ急ニ退ケ去ルハ誰シモ難有キモノナリ、賢兄生ト御同意ハ無相違事ト被存候ニ付、頻ニ其説ヲ主張シ玉ハ、幸甚不少、若心ヲ不用シテ、自然我ヲ見習ヘトイフヨリハ、二ツナガラ施サハ、全タシトイフベシ、万一力及ハスシテ分裂割拠セハ、即印度ナリ、君主悟ラサレハ同知帝王効無論ノ如シ、整備不意ノ間ニ拯フヘカラサルニ至ランコト必セリ、

生今海外ニ在リ、胸中ノ説ニ仮令ヘハ、近ク其処ニ在テハ全形ヲ見ザレドモ、遠ク離テ見ル時ハ全形ヲ一見スルカ如ク、全国ヲ一国ニ望ミテ建築セントス、古人云当局者迷傍觀者知ノ謂ニ近シ、然レトモ当局セハ、必ス迷フナランコト無疑、併シ傍觀ノ者ノ知ルカ如ク、局ニ当テ迷ザレハ、必ス勝利アルコト亦疑ナシ、方今生カ傍觀ノ説ヲ以テ、当局者ニ静養默思シテ、遠策ヲ失フベカラザル由ヲ弁シ可被下候、是而已海外ヨリノ一姥心ヲ獻スル所ナリ、早晚其説実功アツテ、天子海外ノ遣使ヲ見、

勅書ヲ外国ノ主ニ贈リ、我遣使ヲ海外ニ出シ置キ、將軍・諸侯・國人相合シ合興業セバ、則大日本ハ亜細亞大英國トナルベシ、此時コソ此塵芥之軀トイヘトモ、歐羅巴ニ舟渡リ来ランニハ、大日本ノ幸民ト誇ルヘケレドモ、今ハ不知國ノ鼠ノ如ク思ハル、コソ口惜ケレ、

或曰、此事ハ論高ク望過キ、情失シ実無シ故、決シテ行ハレン空言ナリト、答曰常人ノ信用シ難キ所、将来多少ノ年ノ後此ニ利セサレハ、必彼ニ失、其時常人ハ始テ驚クヘシ、行ハレ難ト思フ所ニハ、益々力ヲ尽サスンハ、恐クハ彼ニ失セン、

○江戸ヨリ先日柴田日向守以下十一人佛・英ニ来リ、武器製造局器ヲ買フテ金澤刃江武局ヲ建テ、砲ヲ益シ諸侯ノ不屈ヲ庄ヘトナ、婦スル処ハ支那ノムカシ、始皇カ為セルニ類セントス、何トナレハ國人ヲ海外ニ出シテ、智ヲ益サン事ヲ惡ム、古来耶蘇ノ恐アル時ハ尤ナリ、今ハ民ヲ愚ニセントスルニ似タリ、儒書ヲ燒キ兵器ヲ燬スルノ望アルニ相違ナシ、可笑ノ至也、去十二月四日佛國ヲ相發候間、此書相發候以前ニ婦江致シ候半、是モ必竟佛ノミニストルヨリ欺カレテ、前策ヲ設ケタル也、洋人或利ヲ以テ欺候間、能々御用心、

御國ノ一人一人来航ノ由、何等ノ人カ思案不付、右ハ上海ヨリ報シ来ル、長人一人亦来ル由、此地長人四アリ、其内一人先日帰ル、又其一人ハ大病恐クハ不免、此地風雨甚強、英國ノ海辺破船スルコト三百余艘、其中汽船一艘憐ニ没水セルモノアリ、二三日間風強、汽機室ノ上ノ蓋ヲ浪ニ打破ラレ、水頻ニ溢込ミ、汲出スニ暇アラス、十九日ハ小艇ニテ免レ、其余二百廿二人波間ニ一哭声ヲ叫フト等シク、船ト共ニ海岸ニ沈降セリ、此新紙ヲ見テ交感不少、此船ハ名ヲロンドント称シ、固ヨリ新製堅牢ノ船ナリシニ、此ク大風浪ニ逢ヘ

ハ、助ケカタキモノト見ヘタリ、尚近日拜話ノ節ナラ
テハ、不可曲尽、例ノ乱筆御推読余期拜面而已、拜具、

丑十二月七日

出水泉藏(本)寺島宗則(本) 拜具

中原猪賢兄

閣下

七二八ノ一
別紙

副啓、生渡海中ヨリ英着今ニ到ル迄、差タル用向モ無
之、実ハ慰ノ遊歴モ同様ノ事、且何モ格別勤功ニナル
事モナシ、乍然新聞紙或ハ歴史等ヲ読、世ノ事情ヲ探得
タル事亦不少、イツレ帰国ノ後、此書ヲ以テ日本人ニ
海外ヲ知ラシムルヲ生カ国家ニ尽スノ本任ト存候、尚
帰国ノ時ハ、其向ヘ応シ候様、御周旋今ヨリ奉希置候、
石垣君・關・高木ハ先ツ来正月初ニ発候賦リ、尤生ハ
其帰列ニモ加ヘラレス、留英ハ本ヨリ無用ノ事ニ付、
三四月后ニ一英人ト共ニ開帆ノ賦ニ御座候、国家興隆
ノ尽力ニ就テモ、各目的相違イタシ、議論合ヒ不申、是
程ノ結末ハ後ニ知レ可申候得ハ、当座貪功カマシキ目
前ノ急策ハ、俗人ノ皆好ム処、生ハ反是申候、都テ近日
拜面可申述候、賢兄近日ハ何地ヘ御在勤ヤラ、折角自

遠地御勤務ノ儀奉祈候、別紙相啓様御計奉願上候、再
拜具、

十二月八日

泉拜

中原君

七二九 在廣島土持佐平太探訪報告 (十二月九日)

七二九ノ一

(尚志)

(備)

先月廿日、永井主水正等より宍戸備後之介御呼出、御
詰問御座候得共、其涯相分不申候趣、且此表風説書等、
同廿日附を以御届申上候通御座候処、其後長藩諸隊段
々廣島表江参着仕、同晦日備後之介其外四人御糺問旁
之事件、彼是承合候形行左之通御座候、
一同廿日午刻時分、永井主水正・戸川伴三郎・松野孫八
郎等三人乗馬にて、都合五拾人余従卒一列ニ曳続、御
徒目付石坂武兵衛・粟田耕一、御小人目付櫻井謹作・
瀧田正作・内田鎗五郎・鈴木安兵衛等付添、藝藩物頭
一人致先乗、國泰寺江出張相成、然ニ宍戸備後之介ニ
は、麻上下致着服、尤乘輿にて率添馬一疋家来五拾
人程召列、且大津四郎右衛門同十四五人之供廻にて出
張、四郎右衛門ニは御糺之席ニは不被召出候得共、
藝藩五六人植田乙次郎等相俱寺中江罷出、諸事致手続

等、次之間江相扣居、勿論寺内人私ニテ、藝藩より寺門前江は段々致護衛、左候て乙次郎等儀は、折節其場之様子相伺申たる由御座候処、書院中央ニ主水正出座、伴三郎・孫八郎順席被致、無程備後之介被召出、主水正膝元近く稍額を合候位ニ相隔、語音等瑣細襖越しニは聞分兼候廉々御座候由、然ニ同晦日昼時分又候大目附等三人、廿日同様之振合ニテ同寺江御出席有之、備後之介其外四人之者共御呼出相成、備後之介着服供廻等先日同断、木梨彦右衛門(恒勢)儀家来三拾人程召連、尤乘駕ニテ右同様、諸隊河腰安四郎・井原小七郎・入江嘉傳次三頭乘馬ニテ、都合拾人余曳円、且藝藩ニも段々附添致出席、御糺問之節は次之間江相扣罷居傍觀仕候処、最初右安四郎・嘉傳次・小四郎三人、一同ニ被召出御糺濟之上、引続備後之介・彦右衛門兩人御糺問有之、然ニ安四郎外兩人被召出候座席、主水正膝元より漸四五尺位も隔居、右備後之介・彦右衛門兩人罷出候節は、少し席を引進れ、同日御口問之事件は、薄々洩聞得候程之由、然共備後之介始諸隊相俱、廿日御糺之趣ニ不相替、藝藩等致伝承候趣旨を以、其後植田乙次郎等より内々長藩江承繕候処、兩日御糺ニ付、応対振

之件々委は不相洩候へ共、大略説話之趣別紙之通御座候、將兩度之御糺夜ニ入曳取、其節備後之介始諸隊等、至極喜悅之面色ニテ致退座、左候て長藩より藝藩江挨拶之趣、此節御用召ニ就ては、実ニ難題之訳筋と及痛心候処、案外御叮嚀之至、別て難有儀と奉存候間、猶亦宜敷御執成給度段為申儀も御座候由、

一前条兩度之御糺ニテ、御疑惑之廉々相分申候哉、且直様長国之御所置被仰出ニても可有御座哉之旨、藝藩より御目付方江内分問試候処、最初備後之介申出之趣意不相替、諸隊之申口も随分相揃候、乍然確証之為、書取を以可申出段被相達候付、差出候ば則閣老衆江御執達有之、其上浪華表ニおひて重て御評議被為尽、何分御沙汰可有之訳柄ニテ、当国出張之大小監方、前二テ不相分段御内達之由、左候て諸隊之分は一応御糺濟相成候故、御暇被仰出候へ共、邂逅出浮候付ては、何と欽御所置被仰出迄之間、備後之介相俱滞留仕度段申出候由、

一今度大小監御供方之内、長州脱藩三人被召列、廣島江御来着之上金子迄も被差与、乗船より長国江被差遣、右は全長防之御所置等ニ付、暴徒共承服之否御説得之

為、御廻込相成候哉之風説御座候、依ては至極御密策
と伺れ、一円御布告無之候得共、段々見届候者有之顯
然確証等御座候、右就ては当四五月比京攝表にて、浮
浪士御召捕相成、其内萩様・筑前様・久留米様御内脱
走之者有之、御札之上及白状候口問書、且牢中より建
言仕候書附迄も御座候由、然は右之者共にては有之間
敷哉と流説仕候、依之建白之写別紙相添、為御見合差
上申候、

(貼紙)

本文三人長藩赤根武人・久留米脱藩淵上郁太郎・筑前同杉

(和紙)

村泰輔にては無之哉、勿論此者共当四五月京撰にて御召捕
相成候節、御口問書并牢内より建言仕候者ニ御座候由、

一先達て申上置候通、紀州侯御人数追々参集、御家老安

藤飛驒守其外諸隊凡七百人余到着、且関東之騎馬隊・

(直轄、田辺藩主)

歩兵隊等都合千四五百人去三日来着仕、勿論甲冑又は

(陣)

陳羽織・竹鎧等着し、一刀差之者共劔銃備、押太鼓ニ

て中国路より致通行、左候て当所寺院并商家江宿陳罷
成候、右外榊原侯人数も、当御城下より壱里半程東ニ

あたり、海田市上方往來宿陳之手当有之、追々出勢之賦

ニ御座候、将又井伊掃部頭殿・同兵部少輔殿ニも、一
昨七日八日迄ニ相掛、上下四五百人之同勢集勢相成、

掃部頭殿ニは当御城下寺院江御宿陳相成、兵部少輔殿
儀は、諸隊曳円廿日市広島より西ノ方ニ宿陳、追々参集之
由、いまた人数相分不申候へ共、大凡三四千位之手当
と相見得申候、

一御目附方より藝藩江御内沙汰之趣、前段通大坂表より
追々御人数御繰出し相成候得共、決て長国江御撃入と
申訳にては無之、右は当九月廿七日限長藩より出坂不
致候節は、迅速御旌旗進られ、御札問被為在との趣は、
兼て被仰出候事にて、何れ御先鋒御中軍之御人数御差

向不被成候ては、御名分ニおひて不被為濟候処より御
出勢相成候間、長藩共疑惑沸騰不致候様、藝藩共より
程能説得可致旨御内達之由御座候、

(貼紙)

本文御名分ニ御為先鋒御出勢之段、御沙汰ニは御座候得共、

弥其筋共着眼難致哉と、各藩より彼是疑惑相及候形ニ相見
得申候、

一大小監察被御差向御札問之上、時機ニ依て御人数被差
向候段被仰発候、就ては専幕長之情実為探索方、当
分筑前様并中津様・宇和島様・熊本侯・柳川・雲州・石
州・因・備等之諸藩追々出浮、何れも毎々出會仕打合申
候得共、此節御札旁之儀、御気密之御取扱と伺れ、勿

論御伐長御進退之路更ニ分兼、空敷曳取候国柄も御座候、然ニ中津様御内三輪彦八・恩田源右衛門、宇和島様同加幡又市・櫻田大助と申者被差越、右御両藩は御重役様方より私江被仰達候趣ニは、此節柄為御聞合旁御差遣ニも罷成候ニ付、無隔心探索等之儀共、宜敷周旋可仕旨、承知仕候故、彼御両藩江は其心得を以何篇会釈仕申候、

一 此表江萩様御重役穴戸・木梨某、其外諸隊從卒都合百三拾人程滞留之处、右之人数市中自俣致徘徊、湯屋又は茶屋端等出張、勿論宿亭ニて酒食等取囉し、酌婦等呼集、金錢等数多仕込、散財之振舞有之、将当所関東并諸藩入込紛雜之為体ニ相見得申候、時機次第ニは戰爭可被及国柄、何れを敵味方と申候差別相分不申、左候て追々參集有之候節々長藩致見物、歩兵隊等之行粧ヲ致傍觀、色々致輕蔑候口氣も有之哉ニ巷説御座候、勿論其通歩兵共至て卑賤之者共と相見得、一隊老若不同有之、且木劍等帶し候者段々有之、尤中国筋押太鼓ニて隊伍相整、二里三里位ツ、の宿泊ニて致通行、諸所ニて米錢品々貪取たる聞得御座候、然は冲当国江到着仕候て、未日數も相立不申候得共、最早商家江踏入、

右体不宜所為之者不少、惡評沙汰之限ニ御座候、此上如何之事釀出候も難計哉と、藝藩等末々町家之者共始、懸念令痛心候形ニ相見得申候、右通ニて 幕長之情実、就中御札問之事件等精々探索仕候処、条理明白分兼、併大同小異は可有御座候得共、大凡前段之趣意柄と奉存候、右付ては大小監方至極御寛大之御札ニて、長藩半服安堵之氣先と伺れ申候得共、渠御詰問口書を以、浪華ニおひて御評議之上、重て何と欵被仰出ニて可有御座哉、尤当分之处ニては、先公平之御命令被仰發候半哉と、藝藩共着眼之様子ニ相見得申候得共、脱藩等長国江御差遣相成候ニ付ては、何れ之筋承服之可否説得次第之事ニて、万一周旋之路不開得、却て暴徒等過激之論致主張候時機ニ立至り候ては、何様變化之形勢成立候欵も難計哉と奉存候間、猶此末之機會ニ応し、追々何分申上候様可仕候得共、當時之形行此段申上候、以上、

但大小監より穴戸并木梨諸隊共口問書写老通、且脱藩人建言写老通相添差上申候、

廣島滞在

丑

十二月九日

土持佐平太

奥掛

書役衆

七二九ノ一

別紙巻通并脱藩建白之写、且又大小監方より長藩江御
札問之条々聞書一通、相添差上申候間、御披露給度、

此段御頼申上越候、以上、

但脱藩於京攝御召捕相成候節、同人共口問書写御座
候得共、此節写方相濟不申、依て跡便より差上候
様可仕候、以上、

丑十二月九日

土持佐平太

奥掛

書役衆

〔島津忠家氏所藏本にて校訂〕

七三〇 小倉滞在土岐新兵衛探訪報告(十二月九日)

先月廿日於藝州ニ、長州家老宍戸備後之介御札明
之次第承得候形行、去ル五日付を以御届申上置候
処、先月晦日右於同所、長州奇兵隊頭取之者共御
札明之次第、且上方表之形勢承得候形行、左ニ申
上候、

長州側用人

木梨彦左衛門

同奇兵隊頭取

河腰安四郎

井原小七郎

入江嘉傳次

右彦左衛門事、先達て廣嶋江致參着候井原主計病氣煩

付致帰国候付、右為代先月廿五日藝州江致到着候由、

河腰安四郎外二人事、右通頭分之者共ニて御用召ニ付、

同廿九日同断致到着候由、然ニ翌晦日於廣嶋國泰寺、

大目附永井主水正殿、其外 公辺御役々より、右安四

郎・彦左門等御札明之ケ条、左ニ承得申候、

一当春長州内乱争鬪之節、大膳父子慎中出馬如何、

一右争鬪相鎮候上、大膳萩江不引取山口江入城如何、

一破却之山口城修覆、且武器手配等如何、

一於馬關来船之夷人接対和親如何、

一大小砲夷国より買入候儀同断、

一壬戌丸夷国江壳渡ニ付、(大村益次郎)村田蔵六印形付之書面、長門直

応対同断、

一筑前太宰府江被召置候本公卿江進物致、右江付添之本

諸大夫森寺大和長州江渡海同断、

一淡路・監物御召ニ不出、其外末家家老之内、御召ニ不応

段同断、右八ヶ条木梨御呼出一応之御札相濟、河腰外

二人御召出、同様御札明之由候得共、極秘密にて何様

御答申出候儀逐一相分り不申由、然共壬戌丸夷国江壳

渡候儀は、初て致承知候段、銘々申出候由にて御札相

濟、尚亦穴戸・木梨御呼出申出之趣、一応御聞込相成候

付、此上は何れも調印之書取可差出、猶其上にて御尋

之趣有之段御達相成候由、右は小倉藩川嶋再助事、当

分藝州江差越居候者にて、彼之方より当月朔日仕出シ

之届書、昨八日当所江相達申候由、

一酒井雅楽頭様御役御免にて、川越侯御儀御用にて、当

分御京着之由、右は本之通御復職共にては有之間敷哉

と取沙汰有之由、

一筑前宰府滞在之五卿為取締、公義御目付先日通行之向

ニ申上置候得共、右為取締御目付小林甚六郎、其外近

々中津江着船之上、通行相成筈之由、尚亦承得申候、

右通承得申候間、為御見合此段御届申上候、已上、

小倉滞在

唐物締横目

丑
十二月九日

土岐新兵衛

生産方掛

御裁許掛衆

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

七三一 黒田嘉右衛門ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰

(大坂ヨリ十二月九日)

一筆啓上仕候、嚴寒之砌弥御安泰被為成御精務、大慶

御儀奉存候、近来絶て御安否伺も不申上、甚不本意之

至御海容可被下候、次ニ私事も十月初旬江戸より登京、

于今滞京無異相勤罷在候、然処先達て幕人柴田東五郎、

大坂ニ於て永井清左衛門江取会、天下之御為且御国之

御為、一大事を御談話申度儀有之候間、内田仲之助欵

又は私欵ニ御用序下坂いたし呉候様、都合は相調間敷

哉之旨申入候由、永井より形行申上越、私江下坂被仰

付、去ル五日大坂江罷下、其段柴田方江相通し候処、

翌六日旅宿江東五郎入来致面会候処、方今不容易世態、

閣老方ニも別て心痛被致居候折柄、御国之儀当分何も

御関係無之、何卒天下之御為御尽力被為在度、各懇願

被致居候次第、已前之幕役ニは色々浮説を信じ、御国

を被疑候事も為有之由候得共、只今板倉・小笠原之両

閣老ニ於てハ、更ニ其等之疑念は無之候間、何事にて

も被仰立候筋は被行候様いたし度、其段御国江申せと
 八なしニ、小笠原之家老多賀長兵衛より内々柴田江相
 咄候由、依之薩藩見込之筋は、彼両閣老江吹込、御國
 論被行候様致周旋度と之趣、柴田より承候付、兩閣老
 薩藩之見込御聞取有之度御存慮ニ候ハ、公然と重役
 ニても被召呼御聞届給度、左も無之ニ内々此方より手
 寄を求、僥倖して説之被行候様之儀は、決して不致賦、
 且今更ニ相成征長等之事ニ見込申立候ても、最早無詮
 事ニ候間、適御存寄之儀被示聞候儀ハ忝候得共、何分
 難応其意旨程能申答置申候、然処此節討長之儀ニ付て
 は、内実深キ子細有之事之由申候付、何様深キ御子細
 有之歟ハ不存候得共、基無名之師を起し、条理之不立
 征討を被唱候ては、内々如何程深謀有之候共、都て
 欺謀ニ相成、欺謀を以天下を被制候ては、長州は勿論
 諸藩挙て承服致間敷、扱其子細と申は何等之訳柄ニ候
 哉承度、精詰及尋問候処、右は不輕機密にて、卒爾曖
 昧之事は難申入候間、兩三日相待呉度、左候ハ、詳ニ
 証説聞出し、為知可申と之事ニ御座候間、其通可被成
 返答いたし置候処、一昨日又候參、右子細と申は容易
 口外いたし兼候事ニは御座候得共、御国は旧主父母之

國之事ニも候間、不包相咄可申、抑此節御進発之起り
 は、一橋・會藩等より頻ニ御誘引有之、其か為ニ
 御出京ニ相成、

朝廷之御廟議且諸藩之議論共被聞召、素より

將軍家ニも寛典之思召ニ候処、一橋・會津只管議論を
 建、此度長州を不攻屠候てハ、幕威益相衰、天下之号
 令も是限可相廢と之趣を以被激励、終ニ、

勅諭迄も申下し、下坂を計り、將軍家をして進退ニ窮
 せしめ、而して一橋は京師ニ居留り、天下之怨言憤罵
 を尽く幕府江摺付、己れ独り譽を取之姦計、會も是か
 為ニ姑く被致籠落、怒近比稍解悟いたし候由、右等之事よ
 り、旗下之士一橋を悪む事最甚敷、阿部・松前之退職
 も、表向は攝海夷舶之取扱不束と之事ニは候得共、其
 実は一橋を除之策を廻らし、其謀拙して却て彼之為ニ
 被倒たるにて有之、今之板倉・小笠原も表ニは一橋と
 合論之様相見得候得共、右は勢ひ不得已之次第にて、
 幕吏之黜陟進退も尽く一橋之手より出、板倉・小笠原
 等は只手を空して其職ニ在而已、此故ニ勝安房守其他
 有志之者も、一橋之忌悪を受候者は更ニ不被挙、依之長
 州之事は、内々既ニ和解之意通もいたし有之候付、必ず

穩ニ可相濟、一橋之事は今通ニては不相濟、水戸江本
家相統ニ可押込、管中之密議ニ候得共、彼人其儀承服
いたす間敷哉、万一承服無之時は、其存ニ難被召置、

自然其節は何様之異変到来可致哉も難計、全体一橋之
京都守護は、御国より之周旋ニ因て、右之命を蒙り被
居候事故、若も其通之儀相発候節、御国より一橋を御
救助可有之哉と之懸念も有之由、一体御国之儀は、長
州之事ニは勿論、外ニ何様足許ニ異変到来候ても、敢
て御動キ無之、何方江も御荷担不被成御国論ニ候哉と、
東五郎より承候付、成程条理之不立事ニ、私意を以妄
ニ動キ候様之儀は、不致儀勿論之事ニ御座候、只義之
在処ニて動キ、義を以不義を征する迄之着眼ニ罷在候
間、兼て交之親疎、且勢ひ之強弱を計り、予め何方江
可致荷担の、可敵のと申様之事は一切無之旨、相答置
申候、畢竟右云々之口氣を以推量仕候ニ、幕橋之間大
ニ相軋、既ニ争端をも開程之勢ひと被察、是か為ニ御
国を味方ニ取込、後循ニいたし度方略ニ相違有御座間
敷哉ニ奉存候、且又御国之
太守様

中将様御間近々御出坂・御上京等之御都合は被為在間

敷哉、是以兩閣老頻ニ希望被致居候次第ニて、御国之
儀は 御旧家と云ひ、

廣大院様

天璋院様御統柄と申、旁以等閑難被成置

御家ニ候間、已來御会釈振御一門・御三家同様之御家
格ニ被成進度、御内評も為有之様と之趣迄も、柴田よ
り縷々承候付、先達て攝海夷艦渡來之砌は、不取敢
天氣御伺旁として御上京被遊答候処、夷船も無事故退
帆いたし候付、今は別段此方より起ツて御上京、御尽
力不被為 在候て難相濟程之事も不相見得、若又天下
之御政体ニ付、是非御相談被為 在度大樹公之思召も
御座候ハ、其形行閣老方より表向被仰入度、左候ハ、
自ら主人之存慮可有御座、私体此儀は治定如何と御決
答は相成兼候趣、致返答置申候、既ニ幕府内輪之乱階
を醸出し、今更婦女子を欺様之事を以、外藩を後援ニ
取込度浅間敷計策、何分ニも笑止之至御座候、左候て
右柴田儀御屋敷江參、右申聞候次第ハ何卒広く他江不
相響様、至極秘密いたし呉度申事御座候間、左様御含
可被下候、尤爰許ニ於て右柴田江会取候形行は、私よ
り其御許江御届申上候様、京都ニて承知仕置候付、此

段申上候、以上、

十二月九日

(清柳)
黒田嘉右衛門

蓑田傳兵衛様

追啓、先月廿日藝州廣嶋ニ於て、幕役永井主水正より、長州之穴戸備後之介呼出し、昨年伏罪以後、大膳父子弥謹慎有之候哉否尋問有之候処、其後今に至り恐入慎罷在候旨穴戸相答候由、然処國中一統之人氣ハ如何ニ候哉被相尋候処、是以主人之心底汲受、謹慎罷在候、乍然大勢之中ニは、間々固陋頑愚之者も罷在事御座候間、國中一人も不殘尽く皆、大膳父子之心底通慎罷在とは難申上、諸隊之内も各不同御座候付、委細は追て取しらへ、書取を以可申上旨相答、其日は至て穩成応接ニて相濟候由、左候て井原主計は病氣ニて引取、代りニ木梨彦左衛門と申者出張、外ニ諸隊之内より六人程出掛參候由、同晦日又々右木梨并諸隊六人も呼出し、札問有之由候得共、其節之応接は、いまた何分共次第不相分段、藝州藩士より承得申候、

(島津忠承氏所藏本にて校訂)

七三二 十二月十六日一橋中納言殿ヨリ御札

攝海防禦指揮 御免ノ儀奉願候処、難被

聞食、是迄ノ通相心得候様、以御書付被 仰出候趣奉畏候、御受ノ儀大樹迄申達候得共、御札使ヲ以申達候、

十二月

七三三 伊達遠江守ヨリ桂右衛門へ書翰

一筆致啓上候、甚寒之節愈御健達可被成御勤、慶賀之至ニ候、陳ハ先頃ハ寒氣之時分、為御使者御入来、御苦勞存入候、御滞留中不行届失敬之至、御海容可被下候、其節御咄申上候通、

朝廷ヨリ御召ニ付、上京之含ニ御座候、然ル処御借用申上置候蒸氣船モ、未帰着無之、追々歳暮ニ相成候へハ、月迫致発足候テハ、召連候家来共難波之向モ可有之、其節ニ相成候へハ、來春早々致発足候テモ、对朝廷首尾如何御座候哉ト心配イタシ候、右等ノ処御賢慮之次第同度願望ニ御座候、何卒無御遠慮御答被成下候様希入候、尚又書中ニ被示下兼候廉モ有之候ハ、使之者へ御口上ニテ、委曲御教諭被下度此度頼入候、右之趣意御問合迄如斯ニ候、恐惶謹言、

十二月十七日

遠江守「伊達宗城」(朱)

桂 右衛門様

二白、嚴寒之節御保養專要所祈候、本文之趣可然御聞取御答書待入申候、不備、

七三四 道島家記抄

七三四ノ一

丑十二月二十五日、野村宗七長崎ヨリ罷帰、其訳ハ異

国ニ被差越候刑部殿、其外ノ一条殊ノ外六ヶ敷相成、

右辺ヨリ難題到来候テ、二十八九日ニハ、御一門方初

喜入家へ御打寄為有之由、則長崎へ罷帰、宗七ニモ異

国へ被遣候由、右刑部殿ニ逢トノ事ニ候、何分ケシカ

ラン事ニ候、

但正月三日承候事、

七三四ノ一

口永良部ノ商館米ハ不引合、不被遣筋ニ相成候由、枈

木ヲ被遣候由、新泉院草牟田ノ上ノ松林大木過分、柿

本寺馬場ヲ牛五六十足カ沢山ニ率廻候間、何方へ被遣

候哉ト被相聞候処、口永良部へ被遣候材木ニテ候ヨシ、

限有ル材木ヲ以、無限商ヒ何様ノ御所置ニテ候哉、ツ

マラン事ニテ候、

七三四ノ三

一腹白鯨 一献 代錢二十三貫文、正月三日直成

一鯛 一献 代 二兩二步、右同断

一其外ノ直成是ニテ可考、米ハ少クブラツキ候得共、是

モ格別ノ直下ニテハ無之、三盃入一俵ニ付、二十三貫

文位モ可致候、

但腹白五百(宛)

五百文ニ相成候得共、七貫文ヨリ六貫

文位ニ相付候、是程勝手次第ニ売出候儀、諸色制

度モ不行届所置、有司ノ誠下如何アラシカ、可議

事ナリ、

七三五 本藩歳入調

(表紙)

元治元年子秋分

現高増減帳

表方

御代官所

亥八月より子七月迄

現高拾壹万六千八百六拾六石五斗四升壹合貳勺

子八月より丑七月迄

現高拾壹万七千貳拾八石五斗五升五合五勺五才

内

百六拾貳石壹升四合三勺五才

右壹行子年休地等より起地相成候ニ付増ス、

右は表方御蔵入現高増減差引仕候処、右之通御座候間、

此段申上候、以上、

表方

丑

十二月

御代官

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

七三六〔御船奉行届書船頭水手切米払増減〕

〔表紙〕

一元治元年子九月より慶應元年丑八月迄

御船頭脇船頭仮脇船頭役料米并船頭水手御切米払

増減帳

御船奉行

米四百七拾四石貳斗三升五合三勺貳才

右亥九月より子八月迄

米七百貳拾壹石九升五合八勺

内

真米三百五拾壹石四斗九升五合八勺

赤米三百六拾九石六斗

右子九月より丑八月迄

差引

米貳百四拾六石八斗六升四勺八才

右壹行前仕切より払相増申候、

外二

真米八斗貳升八合五勺貳才

右壹行御船手船頭・水手上納前有之、差引上納

被仰付候間引、

右は御船頭より脇船頭・仮脇船頭役料米并船頭・水手

御切米払、当年分増減差引仕申候処、乍大概右之通御

座候、此段申上候、以上、

丑十二月

御船奉行

(島津忠承氏所蔵本にて校訂)

七三七 道島家記抄鹿兒島事情

江夏壯助・仁禮源之丞〔景徳〕ヲ又異国へ被遣候由ニ有之、彼

方へ被遣候趣意ハ、年輩ノ者ヲ遣候テ諸稽古相調候ヤ、

又ハ幼弱ノ者被遣候テ宜敷ヤ、何分現事見届候テ、可

參トノ事ナリシヨシ、諸稽古ハイツレモ得手不得手有

之〔マメ〕トモ有之候通、一生得手ヲ不届付、不得手ノモ

ノヲ骨折致シテ、不相調モノナリト相見得候、江夏カ

差越候テ、夫ヲ見極ルモ無覺束候、

但又ノ説ニ異国ノ戰爭直ニ見聞不致候テ、実場ノ場

へ難用、夫ヲ姿ヲ替、或ハ車押ニナリ、或ハ夫卒
ニナリ候テ、彼ノ形勢ヲ見ニ被遣候由、

右桂トノ杯一緒ニ被差越候由、

七三八 薩藩長州ニ密使ヲ派遣シテ連衡ヲ謀ル

高杉晉作ハ長藩ニ於テ頗ル名声アリ、初メ癸亥ノ年、
毛利家攘夷鎖港ノ事ヲ謀ルヤ専魁首タリ、其時高杉同
志ニ謂テ曰、今日ニ当リ殆ント三百年太平鼓腹ノ士皆
事ニ堪ヘス、宜シク筋骸ヲ練リ、武事ヲ講セサルヘカ
ラスト、乃チ藩ニ請ヒ新ニ兵ヲ編スヘシト、而シテ門
閥ノ弊ヲ矯メ、士庶ヲ問ハス強健ノモノヲ択ヒ、以テ
行伍ニ充ツ、其馭法頗ル嚴明ナリ、故ニ凶險無頼ノ徒
ト雖モ、勉勵セサルヲ得ス、其兵強悍ナルモノ之ヲ奇
兵隊ト名ス、則久坂義助(通西)・入江九一(弘毅)等之ヲ贊ケ、益々
旧慣ノ陋習惰風一変ス、關藩風ヲ望ミ、各隊伍ヲ編束
シ、遂ニ高杉・久坂・入江ノ三名ヲ推シテ將トシ、事ヲ
為スニ至レリ、然リ而シテ七月十九日、京師ニ暴動シ、
久坂・入江ノ二名ハ死シ、高杉ハ山崎ノ敗ニ真木和泉
カ訓諭ニ由リ、再ヒ為スコトアラント、走テ國ニ歸リ、
而シテ俗論党ノ禍ヲ避ケテ筑前ニ遁レ、各所ニ潛匿シ、

三暴臣其他斬ニ就キ、一藩畏伏極リタルヲ聞キ、奮然
激ヲ同志ニ伝ヘタリシニ、來集スルモノ凡三百異本五百
名或ハ八
百名ト記セリト雖モ恐ラクハ、高杉乃チ太田市之進・山縣狂助旧名
三百名ニ過キナラン乎
等ニ謀リ、長閑ノ藩庁ヲ襲ヒ、糧食及ヒ金銀・彈藥ヲ
掠奪シ、或ハ土人ノ豪富ニ諭シ、或ハ却シテ軍資ヲ助
ケシメ、大ニ勢ヲ保チ、諸隊ヲ率ヒテ萩城ニ薄ラント
ス、俗論党大ニ驚駭シテ、事実ヲ

朝幕ニ訴ヘ、藩主父子ヲ城中ニ擁シ鬻キニ父子謝罪ノ為メ、寺
院ニ屏居シタル高杉等ニ得
入レタルモノナリト云フ、而シテ討伐ノ令ヲ藩内ニ下シ、或
ハ市民ニ令シテ、賊党ニ米穀・衣布ノ類ヲ売与スル事
ヲ禁ス、已ニシテ数千ノ兵ヲ出シ、元老粟屋某ヲ將ト
シテ、高杉等ノ軍ヲ討タシム、高杉等カ軍迎ヘ戦ヒ之
ヲ拒キ、遂ニ大ニ俗論軍ヲ破ル、俗論党又新ニ兵ヲ発
シ、連戦三日終ニ利アラス、退テ萩城ヲ保ツ、高杉等
カ軍勝ニ乘シ萩城ニ闖入ス、或ハ策ヲ用テ間ニ居ルニ
擬シ、之ヲ和解ス、俗論党必勝期シ難キニ依リ、和ヲ
約ス、高杉等俗論ノ巨魁數十名ヲ殺シ、軍門ニ徇フ、
是ヨリシテ關藩嚮背一定、終ニ一致ノ基ヲ立ツ、而シ
テ高杉等藩主父子ヲ山口ニ迎奉シ、守防頗ル嚴ナリ、
山口ノ地タルヤ、古大内氏ノ築構ニシテ、頗ル要害ナ

ルカ故、初メ攘夷ノ先魁ヲナシ、敗潰ノ際ニ當リ、大ニ塞堡ヲ築キ、以テ藩主ヲ遷ス、而シテ後京師暴動ノ後、俗論党山口ヨリ出シテ、萩ノ寺院ニ移シ、是ニ至リテ又高杉等カ為メニ山口ニ入ル、高杉等相謀リテ曰、幕府カ我カ藩ヲ罰セントス、意フニ必ス困老以下ヲ殺スニ止マラス、其他ニ及スヤ疑フヘカラス、或ハ主君父子ニ及ハンモ亦知ルヘカラス、或ハ今回我曹カ事ヲ聞ヒテ、再ヒ兵ヲ向クヤ見ルカ如シ、我曹鬪藩一致協力之ヲ防キ、藩主父子ヲ助ケ、或ハ死者数名ノ魂靈ヲ慰セント議ス、衆僉ナ踊躍人々自ラ奮起スト云フ、初メ京師暴動ノ際、薩・會ノ兵銳意奮戰、長兵ノ勇鋒ヲ挫キ、多ク死捕ニ就ク、茲ニ於テ長兵敗潰遁走ス、是ヨリ長人上氣胆ヲ失フコト甚シ、此時ニ方リ本藩ノ所論一変シタリ、其因テ起ル所以ハ、今ヤ内外ノ困難一時ニ発シ、内ハ長州不逞ノ徒アリ、外ハ外国ノ難アリ、然ルニ徒ラニ兵ヲ内国ニ動シ、区々トシテ勝敗ヲ争ヒ、生靈ヲ殺シ人民塗炭ノ困ヲ与フルハ、抑モ下策ナルノミナラス、遂ニ外夷ノ為ニ燦爛セラレルヤ疑ヘカラス、宜シク海内一致以テ、

皇國保護ノ一点ニ帰スルニアリ、因テ長藩ノ罪ヲ有シ

寛大至仁ヲ以テ処分シ、然シテ外夷ノ輕侮ヲ挽回スルニアリト方向ヲ一變シ、京師ニ於テ捕フル処ノ浮虜ヲ厚遇シテ長州ニ送歸ス、茲ニ於テ小松・西郷・大久保等ニ議シテ、密使ヲ長州ニ遣リ、以テ密使黒田了介 薩藩旧名前議ノ旨ヲ以ス、長人等之ヲ聞テ且喜ヒ、且ツ疑ヒ大ニ相議シテ曰、今ヤ天下ノ望ヲ失ヒ、

朝敵ノ名全ク消スルニ至ラス、幕府ハ既ニ再討ノ兵ヲ揚ントスルニ臨メリ、然ルニ天下ノ大兵ヲ一孤城ニ受ケ、挫削ノ兵ヲ以テ、守防ノ全カラサル言ヲ俟タサルナリ、然レトモ事茲ニ逼力竭ルトキハ、社稷ト俱ニ斃レシノミ、實ニ危急存亡ノ時ニ當リ、薩藩欺謀ト疑ヲ容ルトキハ、後世之ヲ怯ト謂ハン乎、情ト謂ハンヤ、或ハ曰、事茲ニ至リ、薩藩ノ説ク処ヲ厚意トシ、以テ我藩ニ於テ之ヲ拒ムトキハ、義ニ於テ如何ン、或ハ

皇室ニ対シ私怒ヲ以テ大義ヲ誤ルノ罪、且ツ不名干載免ルヘカラス、或ハ斃レスシテ藩祿ヲ全フシ、而シテ皇室ニ竭スノ計ナカルヘカラス、薩藩ノ言強チニ疑ヲ容ルヘカラスト、交々紛議錯出停止ノ期ナキカ如シ、此時高知藩土坂本龍馬長州ニアリテ、此議ノ擾雜タルヲ聞キ、進テ薩論ヲ贊成シテ曰ク、説ク処公明ニシテ

啄ヲ容ルニ道ナシ、今ヤ會・薩ノ勢最モ盛ナリト雖モ、薩ノ勢力頗ル強、且ツ公明ナリ、加之君臣一致且胆略アリ、士庶勇敢当リ難シ、嚮キニ京師ノ拳ニモ薩兵ナクンハ、我軍喪沮志ヲ述スコト能ワサルヤ必セリ、唯薩兵ノ為メ今日ノ形勢ニ立到レリ、此時ニ方リテ薩ノ説ク処ニ狐疑スルハ、自ラ志ヲ屈シ、自ラ社稷ヲ亡スト云フヘシ、宜シク説ニ從ヒ倚頼シテ、而シテ大ハ皇室ニ竭シ、小ハ社稷ヲ完フシ、前恥ヲ一雪セサルヘカラスト謂フ、衆之二從ヒ、使ニ向テ厚意ヲ謝シ倚頼スル旨アリ、而シテ桂小五郎・井上聞太等ヲ本藩ニ遣リ、尚ホ拋頼スル最モ厚シ、

本藩已ニ長州ニ説キ一致協力政体帰一、外夷ノ処分モ亦、公明盛大ナランコトヲ欲スルノ策ヲ立タルハ、當時ノ形勢ニ於テ、叩リニ發表シ得ヘカラサルカ故、最モ機密ニ置キタルカ故、

朝幕俱ニ之ヲ知ラス、然ルニ朝廷ハ長州ノ内變ヲ聞キ、他日必スヤ復タ暴挙再燃ヲ憂患セラレ、將軍家ノ上洛ヲ促シ玉フコト頻ナリ、將軍家ハ長藩再討ノ説起リ、

四月^(廿九)日ヲ以奏

聞シ、天下ニ令ヲ布キ、各藩ニ令シテ兵ヲ募リ、部署

ヲ定メ、將軍家モ麾下ノ兵ヲ率ヒテ征討セント、俄ニ操練ヲ初メ、或ハ駒場ニ於テ、自ラ指麾ヲナシテ馴練ス、是ヲ以テ全国再ヒ棘然タリ、此時尾張大納言[□]殿ハ嚮ニ惣督ノ任ニ座リ長防國境ニ各藩ノ兵ヲ臨マシメ、已ニ攻撃ヲ試ミントスルニ方リ、三暴臣ヲ斬リ、首級ヲ軍門ニ捧テ謝罪シタルニ依リ、具上シテ軍ヲ班シタリ、今復再討ノ令ヲ發セラレタルハ、名義ナキヲ憂ヒ、左ノ建白ヲ捧ケラレタリ^(建白略カ)

如斯建言セラレント雖將軍家聴カス、益進發ノ準備ニ吸々タリ、此時ニ当リテ各藩モ不服ヲ鳴ラシ、建言或ハ幕吏ニ向テ論責スル者少カラス、或ハ麾下ノ士ニ至リテモ、非トスル者多シ、中ニ就テ勝安房守ハ閣老ニ直接痛論シテ、徳川家ノ存亡モ此事ニ起ルヲ論ス、閣老等怒リ、遂ニ長防人ニ左袒ノ嫌疑ヲ容レテ擯斥スルニ至レリ、徳川家隆替亡滅ノ原因ハ、種々ニシテ抄カラスト雖モ、陽ニ發顯シタルハ這一点ニアリ、

七三九 當時各藩評判

水戸

一藩士ノ風、尊

皇道重節義殆不顧身命、其風教ノ美天下比ナシト雖、惜ラクハ方今宇内ノ形勢ニ暗ク、蛮夷ノ情態ニ不通ヨリシテ、今日ニ処スル永世ノ策ニ乏ク、眼ヲ万世ニ着シ、皇國ヲ維持スルノ確論ト為ス可キコト少シ、故ニ癸丑以來姦吏誤國ノ処置ヲ慨歎シ、空シク柱石ノ士ヲ此歎ニ尽セシコト挙ケテ不可數、而テ今日ニ至リ、都テ國家ヲ補益スルノ功少シ、豈可不恐哉、豈可不歎哉、

長州

一 飢ヲ見レハ必助ケ、善ヲ見レハ必ス進ム、而シテ亦惡ヲ惡ムノ心モ甚ヨリシテ、予メ善ヲ定メスシテ、事ヲ処スル事多シ、常ニ皇室ノ日ニ衰微スルヲ憂ヒ、幕府ノ勅ニ違フコトヲ慨歎シ、断然応詔命成敗利鈍ヲ不顧、強敵ヲ彈丸ノ地ニ抗ヒ、屢戰鬪ヲ作シ、終ニ其誠心上ヲ奉スルノ志、以テ天朝至尊ニ報スルニ足ルト雖モ、抑又策謀遠慮ニ乏キ者ト可謂哉、

薩藩

一 近聞 天朝ノ御為ニ力ヲ專ニシ、皇國ノ正氣ヲ維持シ、姦邪ノ威權ヲ抑ヘント欲シ、有志ノ士ヲ拔擢シ、東奔西馳頗ル周旋ヲ極ム、曾テ壬戌ノ歲天下ノ列侯ニ先テ書ヲ 天朝ニ奉リ、天下ノ正義ヲ鼓動シ、天下ノ

元氣ヲ作興ス、而シテ癸亥ノ歲俄ニ反テ正義ヲ拒廢シ、天下ノ元氣ヲ蔽塞シ、上ハ朝威ヲ損シ、下ハ天下ノ士氣ヲ期難ニ蔽ハ不可數、実ニ一時奸佞高崎某等數人ニ國事ヲ委ネ、島津家ノ家名ヲ汚ス事不可少、今已ニ回復スト雖トモ、天下半ハ之カ為疑ヒ、半ハ之カ為二恐ル、暫ク其実行ノ建所ヲ待シ、

備前

一 水藩公子入テ継キ、一時士風作興、國論 天朝ヲ重シ、頗ル正義ヲ主張ス、未其実験ナシト雖トモ、國守不変亦以恃ムヘシ、惜ヒ哉其君有テ其臣少シ、

筑前

一 從來士風軟弱、近頃有志ノ士權ヲ取ルト雖モ、尚士氣不振、正ヲ見テ進ムコト不能、姦ヲ知テ避ル事不能、空ク嫌疑ヲ厭事多クシテ、國論止事更ニ可見ナシ、恐ラクハ一國確定ノ論無ルベシ、

土佐

一 老公本賢明ノ聞ヘ天下ノ所屬望、然ルニ先年有志ノ士ヲ悉ク貶黜シ未有所詳其意、皇國ノ為タルカ、將又幕府ヲ援クルノ意カ、其國論ノ是非正邪未可詳也、

因州

一昨年来爲 天朝力ヲ尽シ、專勤 王ノ志ヲ励マシ、其功モ不少、然レトモ君側要路ニ有志ノ士少ク、難ニ臨テ動ク所有リ、第一一橋骨肉ノ兄ニシテ、奸吏佞邪ヲ正シ、其驕暴ヲ防ク事不能、未タ其實ヲ尽サ、ル所アリ、

尾州

一幕府親藩中ノ第一ニ居リ、癸丑・甲寅以來今日ニ至リ、幕府更ニ一^(マ)ノ勅詔ヲ奉セス内、天朝ヲ蔑如シ、君臣ノ礼ヲ失シ、驕暴不遜至ラサル所ナク、実ニ奸吏誤国天下ノ人心ヲ激成ス、而シテ猶未正其本、恣ニ皇国ノ正気尽滅スルヲ座視シ、終ニ宗室ヲシテ 皇国千年ノ罪魁タラシム、豈其位ヲ尽サ、ル者ト謂サルヘケンヤ、

藝藩

一藩ノ風俗自古懶惰ノ風士氣不振、然ニ近来世子賢明、国内ノ民政少ク成ル所有リト云、

藤堂

一此藩ノ如キハ正邪必不可弁、其国論モ亦必一定スル処ナク、古ヨリ晴雨ヲ見テ進退シ、其勢ニ随テ變動スルニ有縁底意凶ルヘカラス、

佐竹

一天下諸侯ノ中ニテ最名家ト称ス、方今ノ世必ス先ンシテ、皇国ニ力ヲ尽ス可キ筈ナレトモ、其国偏境ニ在テ、頗ル天下ノ形勢ヲ不知、大義ニ暗シ深ク以テ咎ムルニ不足也、

仙臺

一往昔南朝ノ微ナル、此国小テ猶誤脱多キナランヲ今日ニ當、其封境ノ広大往昔二十倍ス、而當時却テ報国ノ志ナシ、若今日皇国ノ為ニ力ヲ尽サント欲セハ、奥羽ヨリ北蝦夷ノ地ニ至リテ、順逆ヲ定ム可シ、関西勤 王ノ藩ト力ヲ合セ、互ニ相応援セハ、皇国ノ姦妖ヲ抑ヘルモ、又何ノ難キコトカ是在ン、惜ヒ哉士風孱弱、皇威復スルニ心ナク、藩士多クハ幕府在ヲ知テ、天朝ノ尊キヲ知ラサル者多シ、

肥前

一西洋学ヲ開キ、武備ヲ整ヘ、一国ノ論他ニ洩ル、コトナク、自カラ割拠ノ姿ヲナス、然ルニ其藩士勤王ノ事ヲ談スルモノ稀ナリト聞ク、其学ヲ開キ、武備ヲ整ヘ、恐ラクハ只自其国ヲ克ク守ルノ事ノミ專ニシテ、更ニ信実ナル事ナシ、天下一度紛乱セハ、中原ヲ窺ノ意不可計、

久留米

一 挙国正義ノ士、身ヲ容ル、ノ地ナシト聞ケリ、其国風推シテ知ヘシ、

上杉

一 諸侯中ノ名家ニシテ、西毛利氏ト並称セラレ、モノナリ、其質朴ナル風俗、可賞者有ト雖モ、祖宗尚義ノ遺風地ヲ弘ヒ、時勢ノ難易ニ随ヒ、反覆朝ニ 朝廷ヲ尊ヒ、夕ニ幕府ニ媚従スルカ如キ徴アリ、可不歎哉、

越前

一 藩ノ論西洋ノ情実ニ明ラカニシテ、能ク其得失ヲ弁スルヲ以テ、却テ彼レヲ推尊ヒ、我国体ヲ失スルノ論不少、可不惜哉、

紀州

一堂々タル大藩幕府ノ親戚ニ処リ、幕府ノ政奸吏ニ任セ、不忠不義ニ墜チイラシム、君無ク臣無ク措テ不可論矣、

加州

一位処於諸侯第一、祿百万石ヲ封シ、神州未曾有ノ大難ノ時ニ当リ一モ其実行ヲ施ス所ナク、因循曖昧不足論、昔赤穂ノ変一商賈天川屋某能ク義ヲ助ク、是レ則チ我邦向義ノ風ナリ、然ルニ去冬水藩武田耕雲齋已下憂国ノ

士數百名此藩ニ憑恃シ、堂々タル大藩幾千忠誠ノ士ヲシテ、却テ賊手ニ陥ラシム、可惡ノ甚シキ者ナラスヤ、

肥後

一 往昔元祿ノ比、其君有テ能義ヲ尚ヒ、 神州ノ元氣ヲ維持シ、赤城ノ義士ヲ過トスルニ至テモ甚タ厚、太平ノ世最可為、其後風俗潰頽、近頃佞媚ヲ專ラトシ、士人名節ヲ重スル者ナク、総テ 天朝有ヲ不知、而シテ其藩横井平四郎(時彦)ノ如キ、有名ノ士モ所論ニ曰、天壤無窮ハ我朝ノ私論ニテ、争テ吞噬ヲ事トスルヲ至当トナシ、幕府ヲ助ケ、大ヒニ奸謀ヲ為シ、窃ニ 皇室ノ不良ヲ謀リ、曾テ有志ノ為ニ暗撃セラレ、幸ニシテ虎口ヲ逃レ、近來肥後國中、平四ノ論徒暗ニ專為セリト云、
国論推テ可知矣、

彦根

一 江戸櫻田ノ拳万世不可雪ノ大恥ヲ受、天下無双ノ大逆賊ト為テ斃ル、然ルニ數千ノ臣下一人君ノ為ニ死スル者ナク、今日ニ至テ尚且不覺、却テ幕府ノ驕暴ヲ助脱字アラン可亂天下不可容大逆賊也、

會津

一 乍恐擁至

尊屢 勅詔ヲ矯メ、京師ニ暴行諸藩ノ有志ヲ捕殺此言ヲ長人又殺士ルヲ知ルニ足ル、狡謀黠策無所不至、天下万民ノ知所也、今更一々其罪不挙、要之

天朝ノ罪人、尚且幕府ノ罪人タル最モ不免、

幕府

一其政体ヲ見ルニ、疇昔

列聖ノ規模ヲ小ニシ、

皇威ノ偏屈スルヲ厭ハス、只自家一己ノ永久ヲノミ計リ、神州ヲ維持スルノ略ナク、専ラ諸侯ヲ疲弊セシメ、神州ノ元氣ヲ損シ、天下ノ人民ヲ愚ニシ、識者ノ見ヲ拒ムト雖、適々憂國ノ士宇内ノ形勢ヲ論シ、未萌ニ策ヲ陳スル者アレハ、忽其人ヲ誅シ、甚シキニ至テハ、禍ヒ親戚ニ及フ、終始私意ヲ以テ、天下ヲ恐嚇スルコト不少、而シテ癸丑ノ年米夷一度渡來恐怖退縮、上ハ

天子ノ詔ニ違ヒ、下ハ諸侯ノ忠言ヲ容レス、私ニ和親シテ、交易ヲ専ラニシ、独其利ヲ恣ニシ、大ニ下民ヲ苦マシム、彦根・堀田・間部・安藤・宮津・阿部・松前ノ如キ大姦連々統出、癸丑以來詔書數十篇ヲ拜戴シ、再度上洛セシニ、未タ一度モ

叡慮ヲ尊奉セシ事ナク、内ハ上

天子ヨリ下万民ヲ欺キ、外ハ各国ノ蛮夷ヲ欺キ、誤國ノ罪挙テ不可數、甚シキニ至テハ、

親王ノ尊モ一度其嫌疑ニ触レハ、忽チ幽囚禁錮シ、而シテ將軍益々誤脱アラシ可利益賞アリ、天下國家ヲ憂フル志士仁人、憤慨歎息、前後前身ヲ斯ノ難ニ殺セシモノ千ヲ以テ數フ、嗚呼二千有余年ノ

皇統ノ危キ、徳川氏ニ至リ不可測知、而テ天下ノ諸侯伯阿媚佞從、甚キ者ハ其姦ヲ助者亦不少、更ニ一人其罪ヲ糺スモノナシ、實ニ神州ノ大不幸ニシテ、徳川氏ノ幸哉、徳川氏ノ幸ハ、神州ノ大不幸乎、神州ノ大不幸ハ亦徳川氏ノ大不幸カ、

一十萬石以上名家多シト雖トモ、神州ノ名義ヲ不知ノミナラス、稍モスレハ乱臣賊子ニ佞從阿媚ノ肥後・彦根ノ徒モ不亦少、縱令善ナル者ト雖、只隱暗ヲ窺ヒ、進退スルノ徒多ク、祖宗ノ遺風ヲ存スル者少シ、故ニ措テ論セス、モレタル

阿州・雲州・川越・松山・郡山・酒井三家・柳川・真田・對州・佐倉・小田原・淀・桑名・盛岡・神原・津輕・大垣・小倉・奥平

此評論ハ誰人ノ作ナルヤ不詳、慶應三年丁丑七月下旬
洛中諸所ニ揭示セシモノナリト云、

七四〇 乙丑十二月頃京攝事情

(記者詳ナラス、蓋村山下総ナラン乎)

前文略ス、当今京攝ノ事情左ニ記ス、

一橋殿ハ才智兼備、深志遠大ノ器アリ、然レトモ悲哉、
兵権ナキカ故、志ヲ述ヘ得サルカ如シ、故ニ股肱トス
ル水戸人原市之進(忠成)・梅澤孫太郎等如キ輩謀士ニテ、大
ニ為ス処アラントス、原ナル者ハ才智勇兼ネタル者
ニテ、当今有名ナリ、然ルニ一橋殿ノ胸底ハ、衰頹ノ幕
府ヲ亡シ、自ラ大権ヲ掌握セントスル意アルコト久シ、
幕吏ハ是ヲ察知シタリ、故ニ且ツ疾ミ、且ツ恐ル、コ
ト甚シキ情アリ、因テ動モスレハ、後見職又ハ京都総
督ノ任ヲ解キ、関東ニ引キ下ントスルノ機アリト雖モ、
朝廷ニ憚リ、事ヲ発スルコト能ハス、一橋殿モ此機意
ヲ察シタル故、原・梅澤等ノ輩ハ、禍ノ起ラサルニ先
ンシテ、事ヲ揚シノ準備密ニナセリト云々、如此内不
穩ノ事実アルカ故、百事揚ラサルナリ、
一尾州侯此回長藩征討ノ総督ノ任ニ於テ、処置因循ニ過

キタリトテ、朝幕共ニ物議ニ涉リ、是レハ第一薩論ヲ
專ニ採用アリシ故ト云フ、然レトモ正論ナリ、其嫉ム
処ハ、會津其他幕府譜代ノ大小侯、或ハ外様ニモ熊本
等ノ如キ諸藩ノ忌諱ニ罹レルナリ、全ク薩州同論ノ各
藩ニ、離間ノ策ナリト云フ、又長藩処分ノ寛大ニ過キ
タルハ、薩侯父子ノ意ニ出タルニ非ラス、全ク西郷吉
之助カ胸中ニ出タリト云フ、西郷ハ又討幕主張ノ人ニ
シテ自ラ為ス処アラントスルノ意アリト云フ、於此尾
州侯ハ進退大ニ窮リ、解陣後名護屋ヘ帰城モ不調、出
京モナシ得ス、直チニ関東下向ノ命下レリ、然ルニ
朝廷ニ周旋セシ人アリテ、御召シノ
勅下リテ、先日上京セラレタリ、然ル処ニ尾州中ノ隠
老公中納言殿ニハ、竹腰兵部少輔等カ如キ奸臣ヲ引出
シ、幕府ノ俗吏ト結ヒ、国政ヲ改革シ、前大納言殿ヲ
再ヒ幽閉セントス、先公於爰進退殆ント窮セラレタリ、
故ニ一橋殿ハ其機ヲ察シ、尾州先公ト謀リ、長征三十
六藩ヲ
朝命ヲ以テ京師ニ会シ、錦旗ヲ申シ下シ、関東ニ向ケ
幕府ノ姦吏ヲ除キ、大ニ勢熾ヲ張ラントスル企アリ、
會津ハ無二ノ佐幕論ナルカ故大ニ憂患シ、若シ事実ナ

ルニ於テハ、幕威ハ一朝ニシテ消滅センコトヲ恐レ、肥後守殿急ニ関東ニ下向セラレ、大樹公上洛ヲ勸メ、而シテ姦吏ヲ除ントス、二月廿日頃ニ京師発足ノ積ナリシニ、閩老松平伯耆守^{宗秀}・阿部豊後守^{官津藩主}上京ノ旨相開得^{正外}、趣意不分明、夫故暫時猶予、未タ今日迄ハ発足ノ日モ不相分、何レ不日下向アルヘシ、會津ハ

朝廷ノ御都合宜シク、是レ一橋殿ト親睦ナルカ故ナリ、幕吏ハ又是ヲ嫉ムコト甚シ、姦ヲ以テ守護職ノ任ヲ解カントス、今度肥後守殿関東ニ下向アラハ、再ヒ上京ハアルヘカラス、又将軍家上洛モ千万無算束ト云々、

一 一橋殿ハ會津侯関東下向ヲ幸トシ、其機ニ乗シ三十六藩ヲ京師ニ召シ、大事ヲナサントス、然シ三十余藩ノ中上京スルハ半ハニ過キサレヘシ、如此形勢ナルカ故、天下ノ機運モ漸ク傾キタリ、姦ニ於テハ傍觀シテ機ヲ窺ニ外ナシ、此回兩閣老上京ハ分明ナラスト雖トモ、兵庫開港、且ツ長藩処置ノ二ヶ条ナルヘシ、此等ノ存念ヨリ長州処分モ苛酷ニ出ツヘシトノ説ナリ、郡目付等モ兩三人出京ナレハ、必ス地面受取ノ為メナラント云フ、

一 水戸浪士^{武田・伊賀等ヲ云フ}ハ悉ク加・越・彦・若ノ三藩ニ預ト

ナリ、越前敦賀ヘ土蔵ヲ牢トシ入レ置キ、先日田沼玄蕃頭參向、重立タル者武田耕雲齋以下三百余人ヲ斬首セシ由、其他モ追々誅セラルヘシ、又土蔵ヲ破リ脱走ノ者モアリトノ説モアレトモ、虚説ナラン、

一朝幕トモニ因循姑息ノ事ノミ、又官吏ハ尽ク私家ヲ利スルノ念ト、一日追ニ姑息ヲ行フノ外ニ出テス、侯伯ハ互ニ猜疑ヲ懷キ、偏執嫉妬狐疑ノミ、一モ天下ノ事ニ真意アルハナキ如シ、本藩ト雖モ、多年ノ尽力ニ疲弊ヲ極メ、今ニシテ大挙シテ、天下ヲ救フノ力ナカルベシ、嗚呼、

乙丑十二月 日 京師ノ旅舎灯下ニ記ス、

七四一 横濱来書中異人ノ説話

(薩州学生十五人云々)

千八百六拾一年、横濱ヨリ潜逃シテ、巴里斯ニ居ルモノアリ、侷同ヘモ參リタリ、此モノ熊谷宿一医ノ弟齋藤健次郎ト云フ、村上英俊門生ニテ、一度横濱ヨリ壳船ニ乗付、其事発頭シテ入牢シ、幸ニ免レテ再乗付、巴里斯ニ至リ、或者ト世話ニナリ居ル、何モ專学ハ不致レトモ、仏語ハ可ナリ出来候ヨシ、

薩州学生十五人倫同へ至レリ居ニ、其三四人ハ余程達学モ出来ヘシ、一人前一ヶ年七百金余八百元ヲ費アリト、日本七月十五日ニ柴田（編中）日向守其外十五人巴里斯ニ着ス、此使節ノ趣意ハ佛國へ書生ヲ送ル事、又職人ヲ出シテ学ハシムル事、又軍艦ヲ造ル事、又長州一条ノ事ト申セトモ、堅耆尺幅五六寸ノ書翰箱ヲ出シタル由、是ハ何事カ不詳ナレトモ、兵庫鎖港ノ事ナルベシ、此節ハ尻ヲ居ヘテ談スル積ニヤ、宿屋ハ入費多シトテ、借屋ニ移レリ、此人日本人ヲ欺ク方ハアレドモ、仏人ヲ欺キ得ヘカラス、所詮叶ハヌ事ヲ云ンヨリ、早ク六十九年ニ兵庫ヲ開ク用意サセヨト云フ評判ナリ、去年ノ使節ハ評判宜シカラス、唯ブンツキコン使節ニ附添タル人ニ欺カレ、金ヲ奪ハレタルノミ、柴田ハ前ノ使節ヨリ稍勝レタレトモ、却テ日本ノ為ニ覺束ナシ、

和蘭伝習人ハ、西曆来四月注文船ニテ帰ル積リ、医師ノ分ハ残ルト云フ、薩州ノ貴族英国ニ在リ、諸所ノ大機器ヲ驚歎シ、我一國ノ力ノ及フヘキニ非サレトモ、其一二種ハ必ス購ヒ帰ルヘシトイヘリト、英国壮年ニ一種ノ病流行シ、死スル事國中三分ノ二ナリト、ポートルメルキノ価コレカ為ニ沸騰ス、

長州人三人英ニ在リ、二人ハ含密ヲ勉メ、一人ハ造船ヲ学ヒ居ルト云フ、

丑十二月

附云本書蘭語ノ分ハ、傍ニ訳ヲ下シ置、（四）闕見ノ人々其コ、ロヘアルヘシ云々、

七四二 風悔情事申渡（無名）

其方儀、近来世上騷擾之基本ハ、外夷渡来後、幕吏和親交易之条約取結候ヲ名ト致シ、無頼之浮浪輩未熟之書生、血氣之狂勇共煽動致シ候故トハ乍申、常陸坊源烈・鹿兒島（郎カ）三六・大江長門カ輩、内心開港ヲ希望ノ意有ナカラ、外西攘夷鎖港之儀ヲ主張致シ、其虚ニ乗シ、自己ノ欲ヲ遂可申企有之トハ不心附、種々ノ妄言ヲ以テ、幕吏ヲ批判セシメ候ヲ猥リニ信用致シ候ハ、元来其方儀、至尊ノ身ヲ以テ、匹夫ノ勇ヲ好ミ候性質被付込、尊王ノ名義ヲ唱へ、音物等贈リ候儀ヲ、全ク崇尊ノ道ヲ尽シ候儀ト喜悅ノヲモヒヲナシ、彼是ヲ依恬（位）ノ高位高官ヲ援ケ、元ヨリ外国ノ儀ノミ、勿論自國ノ事情強弱サへ更ニ不存、攘夷ハ容易ニ出来候モノト、輕卒ニ心得、諸民困窮人命ノ關係スヘキ大事ノ儀トモ不

心附、惣シテ無謀過激ノ暴論ヲ正義ト称シ、微賤ノ藩士、浮浪ノ妄言マテモ取アケ、品々不法ノ勅諭ヲ出シ、三百年來ノ制度ヲ狂ハシ、列藩ヲ引付、人心ヲ動揺セシメ、諸藩台命ヲ輕蔑シ、倒幕ノ議論ニ及ヒ候様成行、或新政施行可致ナト及差図、名ハ監察使差向ケ、国々ヲ騷立、諸藩ヲ京師ヘ呼アケ引留、散財相掛ケ候ニ付、諸藩悉ク及費弊ニ至リ候、其方心得振不宜候ヨリ起リ候儀、既ニ京師兵火ノ為ニ過半及焼亡候ハ、天ヨリ下ス災ニテ、民ノ父母タル道理ニ相背候罪科ヲ示シ候儀ニ有之、一、体祖先以來相伝ノ皇統連綿タルハ、中古以來国政武家ヘ委任セシメ候故、相家無難無異ニ相伝致シ候儀ニ有之、畢竟朝家ニ於テ仏ニ婦依シ、婦人ノ仁ヲ仁トシ、詩歌管絃逸遊ヲ事トシ、男女ノ礼節正シカラス、淫奔ノ風習ヲ以、伊勢物語ナトノ書ヲ国史ノコトク取扱、武国ノ遺風廢馳〔地方〕ニ及、鳥羽・白川ナトノ不始末ヨリ国権武家ニ帰シ、皇国威武ヲ持重シ、皇国安泰ノ良国ニ候ヲ不悟、武家繁昌ヲ妬ミ惡ミ、承久以來不謂企ヲ致シ、身配所ノ鬼ト相成候ハ、自ラ災トハ不心附、終ニ建武ノ擾乱ヲ起シ、一旦志ヲ遂ルトハイヘトモ、素ヨリ自己ノ欲情ヨリ生シ候儀ニテ、是カ為ニ

死亡モ夥シク、諸民困窮セシメ、其罪逃ル、道ナク、正統ノ南朝及断然〔地〕、足利武將ノ建ル所ノ北朝ヲ以テ相伝致シ、就中元來〔和〕以來徳川氏ノ治世六拾余州、蝦夷ノ高ニ至ルマテ徳化ニ伏シ、其方ハシメ泰然タル上ハ、仮令何者カ何様申立ルコトアリトモ動転ナク幕府ニ委任致シ候ハ、世ニ騷擾ニ不及処、邪説ヲ挙用シ、暴論ヲ是トシ、国体ヲ危フシ、万民ヲ塗炭ニ陥シイラシメントスルニ至、殊更皇国ヲ焦土ニ至シ候テモ不厭ナト、以ノ外ノ暴志ヲ以不仁不慈ヲ示シ、不届至極ノ次第、当今ノ夷狄ハ往古ノ類ニ無之、国富兵強ク、器械充実勝算ヲ計ルノ渡來ニ候ヘハ、彼ニ敵対候ハ無智無謀、自滅ヲ招クノ拙策ニ候、夷狄ヲ攘候ハ、飯ノ上ノ蠅ヲ払ヒ候トハ相違フニ、輕卒ナル指揮ニ及フノ始末、其方心得振不宜ヨリ、臣下ニ於テモ、鷹司・三條以下中山ノコトキ不届者モ出來候儀ニ候間、既ニ長州ヘ被誘引浮浪ノ身トモ可相成処、僥倖ニシテ免レ候上ハ、悔悟謹慎ノ志ヲ起シ、万機幕府ヘ委任致シ可申ノ処、今以其儀ニ及兼候段、欲念ノ為ニ被暗候儀ト相聞ヘ、不埒ノ至ニ候、急度可申付候得共、実以其方意中ヨリ出候儀ニモ無之、肝者〔好〕ノ為ニ被致愚弄候ヲ真実トセル

心違ヨリ事起り候儀ニ付、格別ニ令用捨、不及其沙汰候、向後屹度改念、此上若心違候ハ、厳重ノ神罪下スヘキモノ也、

右於世上評定所ハ、百万神列座、伊勢神申渡シ候、同日西洋天王相越ス、

七四三 夢マボロシ記

幾夜浮寝ノ波枕、幾夜浮寝ノ波枕、袖ノ湊ハ月モクモレル、抑コレハ豊芦原ノ秋津御国ニ住ルモノニテ、吾此程ヨリ勤学ニ勞候程ニ、僅ノ閑ヲ得テ、船道遙ニニ出シ処、俄ノ暴風砌ニ吹払ハレテ、今カ、ル大洋中ニ漂テ以船出セシ、ヒト日・フタ日ハ浪花根ヤ、秩父甲斐カネ箱根路ヲ、遙カニソミノ後ハ、カトタノム富士ノ雪、トケテイツシカシラ浪ノ、空行月ハ我宿ノ、学ノ窓ヲ照ラストモ、文ノ手タテモ浪ノ上、南ニ見ヘシ月日影、今ハ頭上ニ仰キ見ル、赤道近ク流レキツラン、アラ嬉シヤ西方ニ、島影ノ見テ月日ノ運行ヲ考ミレハ、天竺地方トモ思ハレ、順風ニ随テ地方モ明ニ成ル程ニ、彼地ニ上陸シテ、帰国ノ事ヲ頼ント存シ、去ナカラ御国体ヲ恥シメサルコト肝要ナレハ、志コノ

エミシラニ、我国体ヲ輝サント存シ、敷島ノ大和心ヲ人問ハ、旭ニ匂フ山桜花、殊ニ桜ハ日本ノ名木ニシテ、唐人スヲ海棠ヲ桜ニ擬スト聞、アラ草ヤノ我御国、春ノ弥生ノ曙ニ、四方ノ山辺ヲ見渡セハ、花盛りカモ白雲ノ、カ、リヌ峰コソナカリケル、難ナク磯辺ニ着テ、アレヨリ来ラレル人ヲ待得テ、万ノ事ヲ頼マント、古郷トナシテ出ケン身ノ昔思ハス、積ル年波ノ淀マン旅ノ行脚僧、草露ニ均シキ夢ノ世ニ、夢ト請継ク身モハカナキ、先ニ此地方安南ノ、事情モ委シク□タレバ、此岩ニ腰ラチ掛、此地ノ風景ヲナカメハヤト存シ、東ヲ遙ニ見渡セハ、茫茫タル蒼海ヲ旭ニ洗フ沖津白波、面白ヤノ有様ノウウ、旅ノ御僧ニモノ申サン、某ハ旭ニ匂フ山桜ノ大和魂備ヘタル、帝国日本ノ人ニテ、漂流シテ今爰ニ来レリ、本国ニ帰ランコト偏ニ頼タク、又此御国ハ何ト申地方ニテ候ヤ、御教ヘ候ヘ、アラ痛ハシノ御人哉、見レハ手弱キ板小舟、浪路ヲ遠ク此国ニ漂流シ、此日頃嘸ヤ切ナキ憂カンナン堪ツ忍ツ今日迄モ、命ナカラヘ来シ人ヲイカテ見捨身ノ昔思ヒクヲヘテ哀サノ、イト、涙ノ増カ、ミ曇リシ声ヲフルハシテ、此地ハコシンシナト云フ国ニテ、支那人ハ安南

ト唱フル国ナリ、扱ハ御僧ハ日本ノ御人カ、我ハ諸國ノ詞ヲ学ヒ、万国ニ遊歴シテ世ノ盛衰得失ヲ論シ、万民ノ惑ヲ晴サンコトヲ旨トスル雲水ノ僧ナリ、思ヒキヤカ、ル辺土ニ来リテ、言語ノ通スルコトノ嬉シサヨ、元來御僧ハ此地ノ住居カ、サレハ三界ニ宿り定メス、樹下ニ木ノ実ヲ甘ンスル、一生不住ノ旅僧ナリ、先月此地ニ来リ遊行シテ、今はヨリ陸地亞細亞ニ旅立セシト存シ、幸ヒ同伴シテ支那迄送り參ラセ、アラ嬉シヤ、支那迄送り玉フナラ、帰國ノ便宜ニ過ス、又幸ニ支那ノ名所古跡ヲ一見シ、阿房ノ燒跡馬嵬ノ履、頃シモ秋ニ近ケレハ、洞庭ノ觀月モ日本土産ノ咄シトモセン、又数々承り申ヘキ事ノ候ヘハ、道行フリニ御物語候ヘ、イサノ御供申サン、キヌノ別レ互ニ掛カハス、比翼連理ノ花牡丹、ナサケ有世ニ引替テ、身ハ雲水ノ旅衣、露ケキ袖ハ幾日數、帯解ヒマモ夏ノ夜ノ、草ノ枕ヤ引結フ、柴ノ庵ニナレシ身ハ、旅ノ行李モ解易キ、紐付皮籠腰ニカケ、俱ニ此地ヲ出立ケリ、サシテ行傘ノ恵モ浅カラヌ、炎暑ヲ凌クノミナラス、世ノ塵埃ヲ厭ヒツ、相合傘ノ道行ニ、旅ノ情ハシラレケリ、道草ノ御断申サン、日本ノ御人ヨ、サキニ桜ヲ殊ノ外メ

テ玉フ、御尤ノ御事ニテ、元來桜ハ亞細亞ノ名木、然レトモ今各国ニ繁茂シテ、是ヲ釀シテ活計トスルモノ多キ世ノ中ニ、花ノミ愛シ玉フトハ、余リ拙キ御コトニテ、イヤノソレハサルコトナレトモ、我御國ニハ諸國製ノ美酒アリテ、シカモ其色、金香、酸味ヲ賤ム御國體、國人是ヲ賞セスハ、好メル國ヘ送ラハ、如何天物ヲ廢スルコトノカナシケレ、イサ食事セシタベ玉ヘ、此蒸餅ニテ思ヒ出シタリ、日本ニハ末タ是ヲ御用ヒハ御座有マシ、古ノ戰爭ニハ竈ヲ減シテ敵ヲ敗リ、亦炊烟ニテ策ヲ失スル戰將モアリ、然レトモ是皆和漢ノ戰法ニテ、今コトアラハ必スモ、是ヲ用ユル人アラシ、カ、ル旅路ハ取訳テ、イト、便宜ノ程モ知ラル、道モケハシキ山坂ノ、岩根松カ根シノキツ、峰ノ峠ニツキニケリ、御僧ニ尋ネ度事ノ此山間、西ニ當リテ海ノ見ヘテ、海士ノ家居モマハラナル、塩屋ノ煙中絶テ、浦サビシクモ荒磯ニ、カラクモ世ヲヤ渡ルカナ、日本ノ人ニハ御疑モアルヘキナレトモ、海ニハアラス塩湖ナリ、ケニ夫ニテ思ヒ出セシ事、夷中ニハ塩沢地下ヲ潛行スト、張鷟ノ言シハ此コトニテカ、又峠ノ茶店ニ装屋タル望遠目鏡ニテ見ヲロシ候ニ、彼

方ニハ三階^ア五階ノ新シキ建家、又海岸ニハ数艘ノ軍艦ヲ浮シテ、北ノ方ニハ旗表風ニ翻シタル貴館アリ、煙氣頻リニ立登リシ場所アリテ、恰モ火ヲ失スルカト思ハレタリ、ソレニハ引替庵末ナル家居モ多シ、亦流水ヲ前ニ控ヘ小橋ヲ架シ、技折門内ヲモ風流ノ草庵アリテ、此郊外ニ依然トシテ孤立セリ、門額ノ有様ニテハ、痛ク世ヲ憤タル風情アリテ、支那ト洋臭ヲ混書シハ、必ス深キ訳アラン、委敷語り玉ヘカシ、実ニ尤ナル目ノ着処カナ、是ニハ哀ナ物語リ、所望アラハ咄シ申サン、抑此安南ト申ハ元独立国ニテ、太平ノ後国カ衰ヘタリシカハ、近代印度地方英国ノ所領盛ンニテ、良モスレハ蚕食ノ萌アリ、国王・宰相深ク是ヲ患ヒ、良策ヲ立テ法国ニ和約ヲ結ヒ、美々シキ旅館ヲ造営シ、公使ヲ迎フ、茲ニ於テ英国ハ失望シテ、安南太平ヲ奏セリ、然レトモ開ケヌ国ノカナシサハ、杓子定木ノカネノ手ニ、正サレ勝ノ多ケレハ、カ、ル良知ノ国王ヤ、社稷ト頼ム宰相ヲ、ソレトモシラス誹謗スル、親ノ心子シラスノ譬ニツレテ、弥増ル公使ヲ遂テ、条約ノ破談ヲ唱ヘ、戦争ヲ好ム内心ハ、トテモ敵セヌ法国ト、飽マデ知レド^ラハ^ベニハ世ニ諂フテ、官禄ヲ貧ル者モ

多クシテ、只真実ニ兵端ヲ、開クヲ主トシ備ヘシハ、仮令国事ヲ破ルトモ心尽セシ甲斐アリテ、武器ノ調十分ノ、智者ト云フニハ非ストモ、意地ダテ通ス武士ノ、心ノ程コソ痛マシケレ、此挙ニ乘シ名聞ヲ立テ、政府ニ敵セシヲ征スルコトモ、衆説ノ決セヌ一事コソ歎クヘキ、亦其内ニ甚悪ムヘキモノ、王ノ近臣ニテ悪徒等ニ密事ヲ洩スモノアリ、輿廢得失ヲ觀通スルト雖モ、威權備ハラサレバ其言行ハレス、天ヲ恨ミ世ヲ憤ル人サヘ多カルヲ、哀シヤ遂ニ諸国ノ公使ノ旅館ニ夜討シテ、悉クコレヲ切害シ、先ヨリ益国乱ノ日毎ニマシテ、其内ニ法ノ軍艦渡来シテ、時日移サス攻立々々、訳ナク此地ヲ諸国ノ所領トシテ安南ノ王ハ僅ノ地ヲ領シ、猶法国ニ臣属セリ、此戦争ニテ國中ノ人民ハ、始テ夢ノ醒タル如ク迷ハ晴テ、国王ノ深慮遠謀慈悲心ヲシタヒシテ、今更ニカヘラヌ事コソカナシケレ、是ヨリ法ノ鎮台權ヲトリ、軍艦ノ備ヘ嚴重ナリ、アノ烟氣ハ則製鉄所ナリ、鉄最国用ノ第一ニテ、日々石炭ヲ焼テ製造盛ナリ、次第ニ国ハ開ケタレトモ、他国ノ有トナル事ノ恥辱ヲ知ラヌ国民カナ、コナタノ草庵ハモト国ノ重臣某ノ閑居ニシテ、専ラ国事ヲ議シ、和議ヲ唱ヘタレト

モ、建議ノ策ハ行ハレス、忠臣ノ言語通セス、果シテ此動乱ニ至リシカハ、誠ニ天道ハ非ナルコトヲ恨ミテ、閉籠ル一間ノ内モ痛ハシヤ、扱々委敷御物語、其戰爭ノ勝敗ハ奈何、戦ハ三度ニシテ悉ク敗走セリ、國ノ爲ニハ掛替ノナキ一命ヲ惜マシト、一途ニ思ヒ桐ノ葉ノ空シク散テ秋風ニ、先立モノコソ哀レナリ、ソレニ引替暴悪ノ、毒水淵ニ心ナク、落入ル程ノ奸吏トフノ、イカテ軍旅ニ向ヘキ、國ノ大事ヲ跡ニ見テ、日頃ノ路金イタキツ、皆山中へ逃レ入り、虎狼ノ餌ト成果テ、天罰始テ顕レケル、カ、ル猛獸モ國ヲ乱セル奸賊ノ、暴悪者ニクラフレハ、遙ニ増ル者ニシテ、財布計ハ喰ヒ残セリ、実ニ哀ナル御物語、去ナカラ余リ愚ナル國民ニテ、果シテ詞モ出サル、御僧今様委敷御存ナルゾ、先御名ヲ名乗玉ヘカシ、我名ヲ云フクレノ影サヘ厭フ身ノ上ヲ、明スヨシナキ暗ノ世ニ、君ニヤ告テ、迷路ノ関ノ道開ク曉ハ、月モ入ルサノ峰晴テ、我名ヲソレト名乗サラン、不思議ヤナ、今在シ旅僧ノ其名ヲ問ヘハ、忽ニカキケス如ク失ニケリ、心得難キ事トモカナ、澄月ノ更行マ、ニ聞ユラン、吹モヲロサヌ峰ノ松風、空淋シクモ成リ増ルカナ、落花枝ニ帰ラス、破鏡再ヒ

照サス、然レトモ猶妄執ノ噴恚トテ、我ト我身ヲ苦メテ、此世ニ迷フ業因ノ浅カラサリシ恨カナ、不思議ヤナ、夜モ昼トモ分チナク、曉空ニ成ヤラント思フ、旅路ノ道連ノ、墨染衣ニ引替テ、金冠ヲ差シ束帶ノ其出立ハ、聞及フ支那ノ欽差ノ大臣ト見マコフ方モナカリケリ、我ハ大清蘇州ノ文宦林則徐ノ幽靈ナリ、一度国事ヲ過テ三途ノ路ニ迷タリ、ヲロカヤナ心カラトテ立通ス、学ヒシ道ニ固差シテ、死後末代ニ災ノ祖トナルコトノ浅マシヤ、扱ハ名高キ林先生ニテ候カ、其英名ハ万国ニ轟キ、人皆テ今尊奉ス、如何ナル訳ニテカル此辺土ニ迷ヒ玉フトハ、余リ拙ナキ御事カナ、其一声ヲ聞カラニ、猶胸板ニ立矢ヨリ、苦シク思フ心カラニ、我業因ヲ説明セン、吾支那父国ニ人トナリ、壮年ニシテ文道ニ長シ、級幾等ヲ異ニシテ、四百余州ノ國人ニ、出群セント思フカラ、曾テ学ヒシ国学ノ、中華ヲ誇リ外国ニ、人間アラヌ卓識ヲ、常ニ唱テ我国ノ、愚昧ノ人ノ多キトモ思ハテ、國ノ内乱ヲカヘリミスシテ、強國ノ世界無双ノ英國トマコヲ醸シ万民ノ、塗炭ニ苦シム其原ハ、狡猾非道ノ英商ヲ、悪ミシ趣意ハ正シクモ、彼ヲ知ラス我国ノ、柔弱怠惰ノ改革ニ、心モ付ス

焼失シ、阿片ニカ、ル国難ハ、云テカヘラヌ事ナレド、我過チノ非ヲ飾リ、猶モ国事ヲ破リタル、再度ノ乱ニ国帝ハ^(又)行ノ旅ニ雲カクレ、カ、ル例モ有ナカラ、悔悟ノ人ハ多カラテ、我過去ヲ請繼テ、猶モ主張ノ僻アリテ、我後悔ヲ知ル人ノ、ナキ世ヲナケク心根ヲ、アハレトコソヤ思召セ、誠ヤナ、人ノ死セントスル時ハ、其言コトヨシト雖モ、死シテノ後ハ賢人モ、迷フ例ハ法ノ師ノ、唱ヘシコトモコトハリヤ、林公如キ賢者ニモ、此妄説ノ發リシハ、浅間敷有様カナ、君位ヲ去テ後、朝廷ハ虎狼ノ如シ、若君位ニ在スナラ、英軍悉ク殲滅シテ、中華ノ威徳ヲ万国ニ、輝サンコトイト易シ、阿片ヲ燒シ御見識ハ、万代不朽ノ英断ナリ、必スモ説ヲ變シ玉フナヨ、ナサケナヤ東方ノ君子国、旭ニ匂フ山桜ノ大和魂備タル、日本ノ人モカク計リ、我過ノ非ヲシラテ、我支那国ノ轍ヲ蹈萌サシノ程モ顯レタリ、カヘス^レモ僻説ニ迷ハセ玉フコトナカレ、吾若四百余州ヲハ、心ノマ、ニ指令スル、威権ヲ兼テ改革ノ、政度ヲ立テ国政ヲ、振フトイヘト積年ノ、功ヲ重テ開化スル、時節ヲ待ス外國ト、争フコトハ兵法ニ、勝テノ後ノ戦ヲ、シラヌ無算ノ無鉄炮、打出シ事モシラヌ、

官軍ノ、練兵サヘモ未熟ニテ、イカテカ英ノ国軍ニ、敵スルコトノ成スヘキヤア、斯云フ我モ常々ニ、孫子兵ハ講シタレトモ、中華ノ外トイヤシムル、学ノ道ニ固着シテ、終ニ国事ヲ破リシハ、学医ノ匙ノマハラヌニ其理ハ等シ、衰弱ノ身ニモ応セヌ劇劑ヲ、仮令医則ニカノフトモ、忠臣孝子ノ心カライカテ用ン、国体ヲ思フ誠ノ赤心ハイツカ覆ハレ、学才ノ大量ノホトヲ顯ハサント、思ヒ込ミシハ末代ノ、恥辱ヲソレト知ラヌ世ノ、我国ナラス他国マテ、国ヲ破ル開祖トハ、イカナル因果ノ罪ナルゾ、既ニ此安南国乱ノ元ハ、専ラ我説ヲ唱、マタ其上ニ我説ヲ惡徒原ノ口実ヤ、奸吏ノ禄ヲ貧リシ手クダトナリシ、遂ニ此国ノ乱ト成果タリ、國中ノ諸侯等ハ此争乱ヲ觀望シ、皆独立ノ企ヲ發シ、各互ニ法国ニ条約ナサントセシ程ニ、其手ハ行カヌ壞レ車、国ニハ王ノ有ラ此条約ヲ結ヒ、目ヲ解テ乱セシ國人ヲ罰シテ元ノ復スヘキ道振リ捨テ、一郡ヤ二郡ノ主タル小国ノソノ府ニ公使ヲ送ル、謂ハレナシトモヲモホヘス、カヌホレ顔ノ諸侯等ハ皆罰セラレ、末代ノ恥辱ヲソレト畏レサル欲ノ熊鷹、又モ地サイテ政府ニ詫ルモアリ、知者ハ臆病ナリ、勇者ハ頑固ナリ、大炮

ノ音震動セリ、陸ニハ鯨波ノ声、目ニシラムハイボレツトノ房汐ニウツルハ、ハヨネツトノ光リヲチララサレ、違ル合戦ノ追ツ追ハレツ、血マフレノ目モ当ラレヌ有様カナ、マタ修羅道ノトキノ声炮発ノ響、天地モ崩ル、勢カナ、此モノ音ニ驚キ醒テナカムレハ、机上ニ置ス安南ノ、戦記ノ夢ニカンタンヲ、碎ク思ニ、困生ハ、廉生ニ増ル貧シキノ、粟ノ飯サヘカシ兼テ、火桶ニカケシ鍋ノウチ、箸モテ之ヲ突ミレハ、マタ煮ヤラヌ芋茶粥押直シ手トリ、鍋己ハ口ガサシ出タゾ、粥ヲ煮トハ世ノ人ニ告ナト約シ、元ノ座ニ見残ス夢ヲムスヒケリ、

七四四 石脳油ノ効用

クサウツノケブラ
英国刊タイムスト名付
ル新聞紙ヨリ抄出ス

此油ハ一種天造ノ山物ニシテ、其効用明ナラス、只コレヲ焚シテ燒カ代ルノ議論アレトモ、其説尙或ハコレヲ弁駁スルアリ、或ハコレニ左袒スルアリテ一定セサルシニ、近日ノ發明ニ拠レハ、此油最能ク人身ノ寄居パウシテ体寄居体ト云フハ寄生ノ樹幹ニ在ルカコトキヲ按スルニ蠶虱ノ類驅逐ス、加之此油ヨリ、アニリネヲ製シ出スヘキノ理ヲ發明セリ、元来アニリネハ世上ニ知ル如ク、藍靛中ノ一成分ニシテ、甚鮮美ナ

ル薔薇色ノ画料ナリ、是ヲ製スル常方ハ、上好ノ藍靛ヲ啼囁沙ボウデアスノ濃キ腺液ニ和スレハ、即チ褐色ニシテ油ノコトキ物トナル、扱是ヲ蒸餾スレハ透燐無色ノ液ヲ得、此液即チアニリネニシテ、香気酒ノコトク味甚苛烈侵蝕ス、此アニリネヲ以テ製シタル塩類ハ、都テ無色ナレトモ、空氣ニ触レテ速ニ薔薇色ヲ帯ヒタル黄色ニ変ス、或ハ試ニ白色ノ木片ヲアニリネ塩ノ溶液中ニ投スレハ、輒チ深黄色ニ変ス、塩酸ハ能ク此塩ヲ種々ノ色ニ変セシム、但シ其稀稠ウスキヨキニ随テ、或ハ綠色或ハ藍色或ハ黒色トナル、シカルニアニリネノ価廉ナラサルヲ患ヒトセシニ、近来ノ試験ニ賤価ヲ以テ脳油ヲ化シテ、アニリネヲ製シ出スヘキヲ徴シ、此試法必ス効ヲ奏スベシト云ヘリ、亦油ヲ以テ揮発芳香ノエーテルヲ得可ク、并此油ヲ石炭或ハコーク根キ瓦斯分油分ヲ除キタル石炭ニ代ヘテ、蒸氣機ニ用フヘシ、

柳河春三補訳

〔表紙〕

忠義公史料

慶應元年

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

七四五 西郷吉之助ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

〔蘆屋陣中〕

今日長府ヨリ使者参候付、致出席呉候様越藩ヨリ承候
処、拙者ニハ蘆屋之様差越候付、御方御出席可給候、
下宿大和屋ト申所之由ニ候、此旨及御問合候、以上、

正月元日

黒田嘉右衛門様

〔清標〕

西郷吉之助

七四六〔長州処分〕

写

正月廿二日惣参内、、、、父子家政向不行届、家
来共一昨年七月父子黒印ノ軍令状所持、京都へ乱入奉
対

禁闕及砲発候段、不恐

天朝所業不屈ノ至ニ付、可処嚴科候処、益田右衛
門介・福原越後・國司信濃等於出先条々趣意耿失非礼非
義之儀、暴論ニ付三人斬首之上備実檢、并参謀之者共

夫々加誅戮、任用失人之段恐入悔悟伏罪相嘆罷出候上、

自判之者ヲ以申立、於其後疑敷件々相聞候ニ付、永井
主水正・戸川鉾三郎・松野孫八郎遣シ相札候処、恭順

謹慎罷在候趣ニ付、於、父子朝敵之罪名相除候、乍
去畢竟不明統御之道ヲ失、家来之者、本ノマ朝敵段、右其

科不輕、雖然祖先以来之忠勤ヲ思ヒ、格別寛大之趣意
ヲ以、高之内十方石被召上、ハ、ハ蟄居隠居、ハ、

ハ永蟄居、家督ノ儀ハ可然者相談可申付候、右衛門
介・越後・信濃之儀ハ永可為断絶候、此段遂

奏聞候、以上、

正月

長州処置之儀ハ、祖先ヨリ勤功モ有之候ニ付、寛典被

処候

思食之処、屹度決議言上之趣聞食候、猶兩國安穩可奉
安

宸襟御沙汰候事、

七四七〔木場傳内ヨリ大久保利通へ書翰〕

大久保一蔵様

木場傳内〔衛生〕

平安

一筆啓上仕候、春暖相催申候処、愈御安康被成御勤、
恐悦御儀奉存候、二私無事如形相勸申候間、乍憚御放
念可被成下候、此内之御懇書被下置、殊ニ御調之代金
五両壹分三朱愷ニ相受取申上候、又似合之御用途可被
仰付候、長征も相片付、水浪士も一往鎮静之由、先後
門ニ吠候狼も無御座候、安心仕居候、中原逐鹿の時節、
陳勝肺公いつ方ニ起り可申候哉、何分諸国一統の疲弊
ニハ、皆々手も出され申間敷、合従連衡あちらニゆら
り、こちらニゆらりいたし候内ニ、我々も一生ハ相濟
事にやと、一寸先ハめぐらにて消光仕事御座候、居付〔朱〕〔定〕
之儀何共難有、年内岩佐君下坂之節、媒婦ニてつれ込
相成り、朝夕の不自由ハ申迄無之、寝てから先も不自

由無之、唯々向貴方遙拜仕居候事御察可被成下候、
先日小松家・岩佐公下坂、塚台場見物帰路、住吉江一
宿、久々振愉快を究申候、翌朝

住吉のまつのあらしものとかにて

ね覚うれしき朝ほらけかな

今日蒸氣船安行丸江、寺内新左衛門一統差下申候、委

事ハ小松家より被仰越候付、不申上候、乍筆末

太守様御上京被為在候哉ニ丁度御咄ニ御座候、

中将様一昨年亥十月より子四月迄御滞京中、京都積金

拾式万両ニ相及、夫ニひかされ当地諸私金七万両余り

御座候、可相成ハ五六月方より先ニ

御上京之御都合どもニ被為在候へハ、誠ニく難有仕

合ト奉存候、雲の上の事、私より迷惑等可申上訳ニ無

御座候得とも、御合にも可罷成儀と奉存、申上置候、

当分御産物切レ間にて、前後繰合必至と出来兼、不相

応之心配御憐察可被成下候、先ハ右御札之御礼答かた

く如此、例之乱毫御海容可被下候、尚期後音候、恐

惶謹言、

二月朔日

木場傳内

大久保一蔵様

参人々御中 「大久保利謙氏所蔵本にて校訂」

七四八〔今井榮ヨリ黒田清綱星山矢之助へ書翰〕

包紙

黒田嘉右衛門様

星山矢之助様

今井榮

昨日ハ何ノ風情モ無御座所御誘引申上、其末大失敬相
働、何トモ汗顔之仕合、平御仁恕可被下、チラト御約
束申上候様ニ相覚候鮭ノ子、甚以輕少御座候得共、有
合ニマカセ供貴覽候、御笑留被下候得ハ大幸不過之、
今ニ微酔ヲ帶、乱筆御免奉希候、再拜、
〔悉「慶應元年」
二月十日〕

榮

黒田先生

星山先生

七四九 對馬藩平田大江ヨリ西郷吉之助へ書翰

(藩内紛擾ヲ告ク)

西郷吉之助様

平田大江

拜呈

尚々奉願候、筑前ヨリモ御役者御同伴被成下候処、

御談合被成下候様千万奉希上候、以上、

一輪呈上仕候、春和ノ時節御座候処、弥以御勇壯被為
入、大悦奉存候、然ハ先日ハ初テ拝顔仕申候処、国体
ノ情実筑藩ヨリ御承知被下置、私ヨリモ申上候次第御
憐察、御懇情ノ程肺腑ニ微感銘仕候、奉恥入候内情有
之、長州迄罷越申候付、馬關ヨリ出船、アイノ島へ繫
船仕、御乗出シノ御様子ニ随ヒ、壹州ノ如ク出帆仕リ
可申候、仍テハ旧藩濱田孫三郎・青木小藤太御地へ差
出、御談申上候間、宜ク御聞得可被下候、御威光ヲ以
宗家無別条安堵ニ至リ候義千万奉願候、兩人取合略呈
仕申候、失礼御高免奉仰候、不日拝顔万々御教示可奉
蒙、此段申上度早々呈薦毫候、恐惶謹言、

二月二十五日

平田大江

西郷吉之助様

七五〇 慶應元年吉村才之丞寺師次右衛門伊集院

四郎建言

二月

御領國中硝石出產趣法組合郷割

鹿兒島郡吉田

始良郡山田

帖佐

重富

加治木 國府 清水 囃吹 日當山
溝邊 踊 敷根 福山 入來

合拾四ヶ郷

櫻島 牛根 高隈 百引 市成 垂水
新城 花岡 始良 大始良 鹿屋 大根占
小根占 佐多 田代 内之浦 高山

合拾七ヶ郷

財部 恒吉 末吉 大崎 松山 志布志
串良 高城 山之口 勝岡 高崎 高原

合拾貳ヶ郷

右一手

高岡 綾 穆佐 倉岡 須木 小林
野尻 飯野 加久藤 馬關田 吉田 吉松

栗野 横川

合拾四ヶ郷

湯之尾 馬越 曾木 本城 羽月 大口
山野 鶴田 宮之城 佐志 黒木 蘭牟田

百次 山田 山崎 大村

合拾六ヶ郷

出水 野田 高尾野 長島 阿久根 高城

水引 甌島 高江 中郷 東郷 樋脇

合拾三ヶ郷

右一手
伊作 阿多 田布施 加世田 坊泊
久志秋目 鹿籠

合七ヶ郷

隈之城 平佐 串木野 市來 伊集院 郡山
日置 吉利 永吉

合九ヶ郷

穎娃 山川 指宿 川邊 山田 知覽

喜入 今和泉 谷山 屋久島 種子島

外二近在貳拾四ヶ村

合拾壹ヶ郷

右一手

但壹ヶ所同断ニ付十一ヶ月

合九組三手請持 百拾三郷

但外二都之城并三ヶ郷近在ハ、浮ニテ組合外二除

キ、都合百九ヶ郷ヲ以賦相定候、惣シテ郷々ノ

組合不等ナルトキハ、凡人体ノ多少又ハ運輸ノ

便不便ノ訳ヲ以、試ミニ組合如斯候事、

硝石出産比例

一硝石三千式百七拾斤

壹郷一日出来 三拾斤并

百九ヶ郷出来占高本行

入目四千百六拾三貫八百文

一日一ヶ郷入目三拾八貫貳百文

木炭百拾石六斗五升 盛立柳

壹ヶ郷一日用分壹石五升ツ、

硝土千百貳拾石

一日壹ヶ所拾石并

右每郷壹日製法出来比例ノ概算ナリ、

但并硝石代賦、一日百九ヶ郷ニテ、出来高斤数売立

代、并硝石壹斤ニ付壹貫五百文宛、占代錢四千九

百五拾貫文、右入目差引殘利分七百八拾六貫貳百

文ニ相及候賦候事、五拾斤定代ノ儀ハ、第一硝土

ノ厚薄ニ依テ、出来ノ増減有之候ニ付、製法方入

目造作、惣テ此ニ準シ、硝土木灰等之ノ増有之、

尤硝土木灰等ハ中等ノ例ヲ以相賦候、

一硝石拾万九千斤

但百九ヶ郷占高

一日壹ヶ所出来高硝石三拾三斤三合三勺ツ、

日数三拾日

壹ヶ郷千斤ツ、出来ノ賦ナリ

但每郷押并ノ賦ニ候、

右売立代

錢三拾八万貫文

壹斤ニ付貳貫文ツ、

日数三拾日

入価錢四万六千六百三拾八貫文

一日入目四千百六拾三貫八百文

壹ヶ所一日入目三拾八貫貳百文ツ、

入目差引殘高

錢貳拾五万五千八拾六貫文

一硝石八千五百斤

但一日三拾斤并

郷割九組ノ内壹組郷ツ、九ヶ所製法相成、出来高

一日硝石貳百七拾斤ツ、

三拾日占高本行

売立代

錢壹万六千貳百貫文

壹斤ニ付貳貫文ツ、

入目錢壹万三百拾四貫文

一日壹ヶ所入目三拾八貫貳百文ツ、

一日九ヶ所占入目三百四拾三貫八百文

入目差引残高

錢五千八百八拾六貫文

一硝石拾六万九千斤

但老郷千五百斤ツ、一日五百斤宛、定代百九ヶ郷

三拾日占高本行

入目錢拾三万八千貫文

三拾日分百九ヶ郷占高

一日占入目四千三百六拾貫文

一ヶ所一日分四拾貫文ツ、

売立代

錢三拾三万八千貫文

壹斤ニ付貳貫文ツ、

入目差引残高

錢貳拾万七千貳百貫文

一硝石百六拾三万五千斤

但老郷一日五拾斤定代

壹ヶ郷一ヶ月ニ付、出来高千五百斤ツ、拾ヶ月

百九ヶ郷占高本行

但日数三百日賦

入目錢百三拾三万五千貫文

但拾ヶ月日数三百日賦、百九ヶ郷占高壹ヶ郷一日

入目錢四拾貫文ツ、

売立代

錢三百貳拾七万貫文

壹斤ニ付貳貫文ツ、

入目差引残高

錢百九拾三万五千貫文

右銘々本行出産比例ノ通り、多少タル御益筋ノ増減モ、

大抵右ノ通ノ賦立ニ相及ヒ申候、尤入目ノ賦ハ、当時

諸郷製法山ノ振合ニ相基キ、売立代ノ儀ハ是又當時ノ

直ヨリ三分ノ二位ヲ以テ相賦候、右ニ付当分他国御買

入直ニ比較致シ候ヘハ、并硝石ニシテ壹斤代貳貫四五

百文ニモ相及、諸雜用等相掛候ヘハ、三貫文以上モ相

当リ候割ニテ、只今諸郷製法山ノ出来直モ三貫五百文

ヨリ四貫文余ニ相及申候由、長崎等ニテ御買入舶来硝

石ノ儀ハ、少シ直安ノ方ニ候ヘトモ、至極粗製ニシテ精製ニ相成、塩分雜物多候テ過半ノ欠相立、御不益ニ相当リ候由、全ク塩分本マ品ハ相見ヘ申候、所務ハ稍五貫文ニモ相当リ申候由、是御領国ニ於テ、屹ト御趣法生産ノ道御開業被為在候ハ、往々他産ヲ仰クニ及ハス、概算ノ通り莫大ノ産出相成候上、却テ他国等ニ御売出相成候御益筋、是亦略比例ノ賦ニ相見ヘ候通りナリ、且御入目等モ全ク御国中ニ散布致シ、自然民間ノ融通ニモ相成可申候、

一右郷々第一組合ノ次第ハ、尤モ御領国中一同平均ノ趣法ニテ、全国人体御国役無親粗、全力平等ノ賦ニテ、殊ニ聚テ大積ヲ主目トシテ、多産ヲ計ヒ、且其所ヲシテ永ク人民ノ煩勞ヲ掛ケシメス、唯一往ノ造作ヲ以テ速ニ直リ、山趣法ハ則所ノ雜費・人馬ノ疲勞・出夫・出錢等定山ノ如ク、連年ニ不被令負ノ趣向、万全ノ策中ニ永統治定ヲ主意トスル事、

一硝石ノ事ハ他ノ産物ト違ヒ、年々ノ豊凶無之、天然ニ出産ノ品故、仮令今日ハ凶損候共、明日意ヲ用ヒ候ヘハ、屹ト豊饒ヲ得ルモノニテ、只採得候硝石ノ厚薄ニテ豊凶ノ訳ニ候ヘハ、是サヘ睨ト取調候ヘハ、比例ノ

産量ニ於テ、少モ減ハ無之賦ニ候、勿論爰ニ於テ、御支配ノ役目意ヲ用ルト用サルトニ依ル事ナリ、右ニ付郷割組合大中小、押井中等ノ賦立定代比例ノ通候事、

壹ヶ所煎法諸入具賦

一 大平鍋 五枚 径式尺八寸口

内 壹枚ハ隔日并硝石製法用

一 硝土澄桶 拾式本

深サ式尺五寸

涉リ式尺八寸

壹桶容土壹石五斗七升ツ、

一 日新土仕込六升ツ、

一 木灰澄桶 四本

但書同断 一日新灰仕込式本ツ、

一 大口切桶 六本

深サ壹尺八寸

涉リ壹尺式寸

内 式本泡沫溜用

式本灰汁溜用

式本澄水溜用

一 中口切桶 五本

但方
内荒製硝石建置用

一 小口切桶 五本

但煎熬水溜用

一 小手桶 四ツ

但煎汁汲移用

一 大据桶 五本

但煎液冷用

一 中据桶 四本

但并製用

一 大樽 壹本

但泡沫澄液等溜用

一 大曲柄杓 四本

一 丹荷 拾荷

内六荷澄水用

式荷澄液方

式荷灰澄方

一 芽筵(第九) 拾式枚

但蘘筵古物又ハ叭古物蘘包類ニテ代用

澄水并澄灰汁方入用一度分十五日目新取替

一 ザル 拾枚

一金量 壹掛

一金頭 三本

一千切 壹棹

一大斧 一挺

一火揆 壹本

一鍬 三挺

一槌 三挺

一漉絹 壹反

但木綿切三尺幅切四ツ五日目取替

一ブリ 三荷

一験液器 壹揃

右ノ諸器械壹ヶ所製法場壹揃分ナリ、

但製法道具ノ内外ニ瑣細ノ品モ有之候ヘトモ、差

当出来ノ品ハ不載ナリ、

右製法道具ハ、御領国中郷々編成三手請持ニ付、

本行ノ品々三揃分ニテ相濟賦候事、

硝石製法賦

一硝土九石四斗式升

但一日壹ヶ所ノ用分澄シ桶六本分

前文比例壹郷一日五拾斤、定代ニシテ硝土拾石八

斗六升ノ賦、本行ノ儀モ硝土ノ厚薄ニモ依リ候ニ付、一日拾石并シノ賦候ヘトモ、現ノ賦高本行ノ

通候事、

但本行ノ硝土澄水ニシテ凡七八度アルヘシ、以下

皆是ヲ定則トスヘシ、

占賃錢六貫六百元
一土負届馬 拾四疋

但尅駄籾六ツ負、尅籾尅斗式升入

一日五拾斤、定代ニシテ馬數拾六疋

尅駄ノ硝土七斗式升ツ、

一焚子 六人

内主取夫 尅人 賃錢貳貫文

焚子 四人 尅人ニ付賃錢尅貫八百文ツ、

占賃錢九貫文
七貫貳百文

内尅人釜前火焚澄シ水兼

尅人澄シ水方水汲夫等

式人釜前火焚製法方一切

外ニ雇夫尅人・雜仕水汲薪取等

一日賃錢八百文所出夫仕舞暇

占賃錢拾貫文

一硝土採得方夫 四人

内式人定夫 尅人ニ付賃錢尅貫八百文ツ、

占錢三貫六百元

式人所出夫

雇錢尅貫五百文ツ、毎日代
り合

占錢三貫文

占賃錢六貫六百元

一土負届馬 拾四疋

但尅駄籾六ツ負、尅籾尅斗式升入

一日五拾斤、定代ニシテ馬數拾六疋

尅駄ノ硝土七斗式升ツ、

尅駄賃錢尅里賦ニシテ六百文ツ、遠里取
捨有之

占駄賃錢八貫四百文凡五拾斤、定代ニ
シテ九貫六百元

一木灰 尅石五升五拾斤、定代ニシテ
尅石三斗五升ノ賦リ

尅升ニ付代錢拾六貫文ツ、

三斗入苞作

占代錢尅貫七百四拾八文一日焚用
分二補

一右負届馬 貳疋

但尅駄賃錢六百元ノ賦

遠近差引アリ

占賃錢尅貫貳百文 尅里道法并

一薪 尅拉

但尅丈拉五尺五寸
横尅丈五寸 斤ニシテ千三百斤位

松其外雜木在合次第

代錢八貫四百四拾八文

但駄賃込木代ハ除キ、受負運ニシテ弁利也、尤御

物山御渡付ニテ木代ナシ、

一右同 式百斤位

但隔日并硝石製法用

但前文ノ用分不足ノ節ハ、是ヲ以差足ノ賦ナリ、

代錢四貫文

惣入目錢三拾八貫式百文

一日一ヶ所焚ノ入目惣計、但一日五拾斤、定代ニシテハ外ニ芘貫八百文ヲ増、四拾貫文ニ相及候事、

右諸入具一日定代焚ノ用分

此所一日出来并硝石三拾斤定代ニ候ヘトモ、通例ノ山ニテモ、今式三斤位ノ出来増ニ相成候モ有之候故、現入目一日ノ定代時々減ハ無之賦ニ候、尤驗液器ニテ濃薄ノ試ミ致可明弁仕候、若又此処ノ減ハ彼処ノ増ニ相并、購補ノ賦ニ候、右ニ付場所ニ依リ少々ノ増減スヘキ有之賦ニ候ヘトモ、并シ賦候ヘハ、全減ハ無之候、就テ場所・薪水ノ弁利、次ニ相里ノ粗密・硝土ノ厚薄・運輸ノ便利等ヲ以、出産ノ親粗有之事ナリ、

趣法建

一郷々組合・私領・島々迄モ相加ヘ、大小ノ差別ナク平

等出産ノ賦ヲ以、九組ニ相分ケ、又其内ヲ三組ツ、統テ、大頭ヲ三手ニ請持相立、凡組合ノ通り御領國中三手ヲ以支配致シ、比例ノ通毎郷ノ産高定、斤數ノ製法方相成、尤モ粗製ニテ差出候様、其上時々直リ山薪水ノ便利ヲ測リ、其郷賦通り多少ノ出来、平均ノ定代、焚方相仕舞候事、

但組合郷ノ内小郷人ハ、薪水運輸不便ノ処ハ、場所ノ任弁利、最寄り摸合山等ニ仕掛可有之候、尤其郷内ニ於テ、人家淋下土取尽スニ及ハス、一通便利ノ場所採得方致シ、定斤數出来ノ上ハ、仮令其余分過分ノ硝土有之候トモ、以往ノ用分ニ殘置賦ナリ、右ニ付早く其処焚仕舞、請取ノ郷ヘ可次渡事ナリ、然レハ事一往ニシテ、何モ速功ヲ取ノ趣法ニテ、少障ノ煩雜ハ顧ス、只大業ヲ宗トシテ、第一又其処ノ疲労ヲ厭ヒ、且専ラ民間ノ大業トナシ候趣向、外ニ良策モアルヘキカ、右ニ付郷内定代一旦ノ製法ヲ以、早ク外ヘ引直シ、比例ノ通り聚テ実功ヲ主トシテ、聊カ末葉ノ製法ノ甲乙杯ハ不論賦ナリ、何分郷村ニ於テハ、製法山ノ通り其所ニ在住、多日ノ造作・人馬出夫請負、出銀等ヲ

其所ニ負ヒ候ハ、武家勸農ノ潰害ハ固ヨリニテ、
当時柄無策ノ所置ニテ、一旦一ヶ月又ハ二ヶ月長
クシテ、半年・一年ノ事ハ又格別所ノ疲労ニハ不
及義ナリ、能々此処ニ意ヲ相用、御領国中平等全
功ヲ為濟スルノ本旨ナリ、

一硝石ノ義ハ、倭漢共ニ農ニ属シ候品物ニテ、地方請持
相当ニ候、則採製農家ニ就テ、出夫人馬・薪水ノ用度、
悉ク農ニ關係ノ事故、郡奉行方ニテ支配農事科中ニ規
定相成候ハ、往々ノ御為至極御弁利筋、第一勸農ノ
為ニモ兩様易簡ノ所置行届可申訳ナリ、然レハ往々ハ
所ノ産物、農民ノ産業ニ相成候様、砂糖作式ハ食塩製
法同様、民間ニ於テ製法ノ上、官ヘ差出候様ノ趣法、
猶又簡易ノ方ニ取計様、イクラモ可有之事ナリ、尤入
私等ノ事モ、地方諸普請同様、所郡見廻・庄屋等ヨリ
可相勤哉、

一木灰採得方、郷内村々惣竈戸ニ相懸ケ、其郷定代仕用
ノ賦ヲ以上納被仰付、組合名頭等ヨリ取円、郡見廻并
村々庄屋請持ニテ、製法場所ヘ納方ノ事、

但灰ハ農家培養使用ノ品ニテ候ヘトモ、一郷内惣竈
戸ニ割并候ヘハ、実ニ些少ニテ、一家ノ納聊ノモ

ノニ可有之候、木灰賦ニハ壹升代錢拾六文ツ、ニ、
駄賃錢マテモ賦ニハ相見ヘ候得共、培養用分差欠
程ノ事ニ不至候故、却テ上納可然カ、

一薪ノ儀ハ所ニ於テ不差障、最寄り山床ヨリ御物山ノ内、
無代銀ニテ御渡相成、尤并木松又ハ野松・雜木惣テ可
用、伐方ヨリ届駄賃錢等ハ、定法雇ニテ御払可被下、

但所ニ於テ野松等モ、地方普請用木ニ建置事ニ候ヘ
トモ、松・雜木在合ニ任セ相用候事故、一種ニ限
リ候訳ニ無之候、右ニ付往々所焚ノ趣法ニモ候ハ
、永続ノ為メ薪用ノ松殖立置候ハ、猶又後年
ノ弁利ノ事、

一硝土採得方ノ儀、郷内村中ニテ篤ト硝土ノ厚薄・薪水
運輸ノ便不便ヲ見計ヒ、時々ノ製法場可相定事ニ候、
淋土採方・運入馬等雇賦通り候事、

一每郷賦通り、出産直リ山ニ付テハ、定代斤数出来相成
候ハ、直ニ其場所引払、組合請取、外郷ヘ次渡候事
ニ付、諸製法道具持、移方ハ惣テ其請取郷ヨリ人馬差
立、役々立会請取渡等嚴重ニ相改メ、若シ損物等有之
候ハ、則修復ノ上可次渡候、尤一組合中一持ノ器械
ニテ連々廻製法相仕舞候事、

但組合郷中ハ、是非限月中ニ製法仕舞候様無之候テ

ハ、大ニ時日ヲ費シ、製法滞ニ相成候故、掟通り
休停不相成様規定専務ニ候、右ニ付仮令ハ垂水新
城・櫻島等ノ砂糖製法同様、後ニハ時節ヲ以一時
ニ仕懸候モ易簡ニ候、津下シ等ノ事ハ、随分百姓
有暇ノ時ヲ以仕合候モ可然候、左候ヘハ旁御領内
郷々、惣テ一ケ年ニハ平等致タス候付、三ケ年ニ
相掛リ御試有御座度、左候ヘハ比例多少ノ出産相
成、尤一郷ニテ硝石千斤・式千斤位ハ、一村中ニ
テモ定代出来可相成事ニ候故、猶又人馬運等ノ便
利モ調易訊ニ御座候、右ニ付大郷ハ村々方限ヲ以、
年々ノ硝土採得方致シ候モ可然哉、又ハ出夫等ハ
其時宜ニ任スヘキ事、

一諸器械ノ儀ハ、第一釜鍋類ニテ一ケ所ノ用分賦通り、
壺山鍋五枚ニテ、三手請持ニハ都合拾五枚ニ相及候間、
右ハ惣テ御物御渡付相成候様、桶類ハ出来手当、初発
ノ郷ニ於テ入目取換、手当致シ候様、左候テ追々其組
合郷中割并摸合ニ弁済致シ可然哉ニ奉存候、

但組合郷ノ内ニテ隣郷等弁利ニ任セ、両郷摸合山等
ニ申談候ハ、勿論入目造作等双方ヨリ相弁、尤

日限ノ儀モ其割ヲ以為召運且冬

一製法木屋仮取建ノ儀ハ、纔一ケ月・二ケ月ノ間ニ候ヘ
ハ、至極粗陋ノ取建、雜材所寄り物・茅・竹・縄等モ
同断、一郷中人体ヨリ惣納物ニテ相弁ス可ク哉、又壺
人前ニハ聊ノ事ニ相及候、時宜ニ依リ人家借入、竈等
取建候モ可然カ、就テハ一時余計ノ費用ニ似候ヘトモ、
何レ永続可焚ノ御趣法モ相成候ハ、追々彼是ノ為メ、
且ハ手馴易簡ノ法則ニテ、発起ノ取作尚後年ノ御鴻益
ニ御座候、

但木屋五敷・六敷位ニテ、流七八間ハ入用ニ候、澄
水等ノ処ハ、猶更仮ニ雨露ヲ凌キ候位ニテ相済ヘ
ク哉、製法人モ定規ノ人規廻ニテ、其所ヨリハ雜
仕夫壺人・硝土採方夫式人ツ、其外右負届、木
灰等モ雇夫有之候、

付箋本文製法木屋取建方ニ付、入具所寄物ヲ以テ取
建候儀、本文ノ通郷中一同、衆中ヲ始メ百姓・
野町・浦人・寺前・中宿者ニ至ル迄、出納ニ付
テハ惣人体ニ割掛候テモ、聊茅ハ壺把ニ及ハス、
長木・縄・竹・柱用ノ材迄モ、壺人前ニ及ハス
四五人摸合ニテモ相済程ノ事ニ可有御座候、右

ニ付以来村製法等ノ御規定ニモ相成候ハ、毎年規ヲ以正月方人別繩壹房・竹五六本ツ、或ハ茅三尺壹把、或ハ雜木・柱用摸合壹本坏、兼テ致定納候趣法モ御座候ハ、事臨時ノ動作ニ及ハス簡便ニ候ハン、尤郷々大中小平均ニ致シ候モ、壹郷十人并ヨリ多可有之候、依テケ様ノ事ハ、定例ヲ以予備ノ方被行易キ訳ニ奉存候、

一木代ノ儀、比例ノ通産高二応シ、夫丈過分ノ御入目ニ相及候ニ付、木代ハ預リ紙札等ノ御趣法通り、惣テ御入目丈ケノ銀札ヲ以テ、硝石山札御仕立相成、夫ニテ充分ノ御用途被為相弁、追々出産硝石、相当ノ直立ヲ以所務損益ノ差引相成候上、右紙札ノ儀ハ時々引札ニテ御取上相成候様御趣法有之候ハ、凡三年ニシテ所務本現銀ニ引替リ相成候訳ニ御座候、左候ヘハ御物ニ於テハ、出産硝石ノ所務文ハ全ク無代銀ニテ出来ノ賦ニ相当リ申候、是他国等ニ於テ米札取立ノ趣法ニモ相叶、且ツ肥後坏ニ行レ候新田札等モ同意ニテ、一時ニ權道ヲ以、終ニ実用ニ帰復仕候御良策ト奉存候、

但木代紙札ノ御趣法ヲ以テ、十分ニ御取起相成候ハ、三ヶ年目ニ至リ、每郷ノ出産高聚テ大成ノ所

務、悉ク收納相成候ハ、何モ無代銀ニテ、乃チ硝石涌備相成候訳ニ相当リ候、然レハ硫黄ノ儀ハ、既ニ蒸溜機(器脱)ニテ多量ノ出産、余程ノ御利潤相成候事ニテ、銃薬方調合、御用途モ無代銀ニ相及ヒ候程ノ儀ニ候処、硝石ノ儀御國産相少、年分御用途不足分ハ、他邦ヨリ御買入ニ付、追々高価ニテ、銃薬ノ御入目等過分ニ及ヒ、不相当高料相付申受、直成等只今ノ通ニ御座候、右ニ付硝石サヘ十分出産候ハ、銃薬ノ出来増ハ勿論、御入費モ至極輕目ニテ、往々ノ御益筋モ比例ノ通りニ御座候事、本文木代紙札ノ儀ニ付、西蕃政体ニ相見ヘ、生財ノ趣法、彼国ニ於テ誰人ニ限ラス經濟ノ一端工夫、勤得ノ道筋有之候ヘハ、則官ニ就テ願立、可否論判ノ上、其宜キニ就テ免許、所謂御証文ニ相成候上、其本人ヨリ為木代、譬ヘハ千両入用ニ候ヘハ、千両文ノ紙札ノ預リ壹枚壹両ツ、年限ヲ以テ千枚ヲ出シ、是ヲ諸人相對ニ買取、都合シテ千両ニ足、則業ヲ取起候木代ニ宛行候趣法ニテ、夫ヨリ段々盛業ニ成立候ヘハ、随テ右ノ紙札ノ相場相増年限ニ至、弥其業治定致シ候ヘハ、壹両ノモノモ

壳両式歩又ハ式兩、其余ニモ相及候由、其利潤其相場ヲ以テ木方ヨリ買収、官ニ返進致シ候由、其間右ノ紙札ハ世間通融シテ、買取候人モ利益ヲ得候由、又外ニ壳渡、或ハ質物等ニモ行ハル、由、是本ハ国ノ預リ紙札ト同様ノ趣法ニテ、是則易簡ノ弁方、且ツ嚴密ノ活法ニテ、今ノ紙札ノ趣法ヨリ一等ノ利方ニ御座候ハンカ、右ニ付紙札ノ御趣法御取起モ御座候ハ、為木代組合郷々々其賦ヲ以テ御貸附被仰付置、追々出来硝石ヲ以テ差引上納被仰付候ハ、入払等勘弁ニ行ハレ可申事ニ御座候、

一硝石製煉ノ事、今御国ニ於テモ、加賀伝・信州伝ノ両流、製法方倭流ノ伝法ハ、此両法ヲ相用候、然ニ彼ノ採成釀成ノ法ハ行ハレス、只製煉ノ法ノミ行ハレ来リ候、然ルニ右加賀・南部・信州ノ国々、或ハ肥後・豊後又藝州等ノ硝石出産ノ国々ニテ、銘々趣法ノ次第モ、惣テ民間ニ焚出シ候事ニテ、就中加賀国ハ百姓ノ家毎ニ淋下、惣テ作硝ノ仕掛、春夏ノ間雜草獲込灰等調和シ仕込置候由、國中一般ノ仕来ニテ、村方ニ於テ百姓共ヨリ年貢同様ニ上納致シ候事ノ由、皆自身ノ産業加

州ノ国産ニテ、莫大ノ利潤有之、則御国砂糖同様ノ産業ニ可有之、右ニ付是迄段々西洋流ノ作土製煉ノ法モ相開ケ、良法ニハ候ヘ共、人力ヲ尽シ、造作煩勞少カラス候故、其佗行ハレ難キ筋モ有之、何レ民間農料中ニ屬シ候上ハ、易簡ノ法ヲ以テ、農民ノ産業無造作仕掛ニテ相濟候様無之候テハ、(マ)

永続相成サル訳、依テ西洋法又ハ加州伝ノ通りニ相用候モ、亦必ス良法トハ言フヘカラス、故ニ御国ニ於テハ、風土ニ依テ、彼ノ西洋并加州ノ両法取捨折衷、適度ノ良法相用度訳ニ候、尤硝石ハ天然出産ノ品ニテ、本今淋下ニモ三年ニモ相成候ヘハ、硝氣ヲ釀成スル事

ハ、人ノ知ル通りニテ、必加州ノ如ク偶ニ手入スルニモ及ス、自然在合ニ任せ、聚メテハ却テ産積モ莫大ニ相及可申事ニ候、此取捨目論見肝要ニ候事、

一右硝土採製ノ法ヲ以テ、三ケ年位ニシテ仕舞相成候后ハ、郷毎ニ請持製法ニ候ハ、壳郷ノ内三人計ツ、夫役ヲ許シ被置、此者ヨリ引請焚出候様御規定相成候ハ、猶更弁利筋ト奉存候、

一此製煉ノ賦リハ、普通ノ法則トハ異ニシテ、今諸山ニ於テ製造スルモノハ、多分ノ硝土ヲ費シ、随テ費用モ

多く、所謂古法ノ倭流ニシテ、加賀・信州伝ナルモノニシテ、精勉研究ノ究理ニ方リタルモノニアラス、故ニ今ニ於テハ、固陋發明ノ良法ト謂フヘカラス、且ツ仏人等ハ尋問ニ及候処、猶又易簡製煉ノ法モ明弁致シ候事多御座候由、是諸方ノ製法ニ涉リ、煩ヲ去リ簡ヲ取り、費用ヲ省キ、多量精品ヲ得^(ル)ニ事ヲ勉メテ、屢回試験実功ヲ得候、和・漢・蘭ノ三方ニ因リテ、集メテ以テ大成シ、遂ニ一法簡易ノ法則ヲ得ルニ至ル故ニ、或ハ普通ノ例ヲ以テ、他ヨリ是ヲ非難スルニ、硝土ノ少キヲ以テ大量ノ産硝ヲ得ル疑説アラシカ、然レトモ既ニ実効其法範ヲ得ルヲ以テ、此計費ノ例証ヲ以テ賦之処御座候、則殊ニ当時ノ軍備、猶更兵糧・玉薬ノ二本本ノマ、他方法則治定モ有之候ヘトモ、今玉薬土ノ事ハ粗略ニテ、悉ク不具ニ至、一州内数万ノ屋戸淋下悉ク硝土ヲ生釀シテ、順次之ヲ採用シ、從テ採レハ又從テ生シ、尽ル事ナキハ天然自然ノ生成ニシテ、此無尽蔵ナルモ又尚釀成ノ間暇、生育一年ノ用ニ供スルニ足ラサル必然ニ御座候、爰ヲ以テ抹製時処ノ法アリ、法ニ亦勝劣アリ、其法ヲ得サレハ其功不全、是産硝ノ大主意ニ御座候事、

七五一 太宰府在營三原關山ヨリ黒田ヘ書翰
七五二ノ一

黒田嘉右衛門様

三原次郎左衛門

關山新兵衛

自太宰府

丑三月五日

御袖別以來御左右不承候得共、追日暖氣相催、一入御多祥可被成御奉賀候、然ハ致承知置候蒸氣船小蝶丸、一時日博多ヘ入津、昨日ハ内田仲之助殿、右船ヨリ被罷下由ニテ、入來有之候ニ付、御沙汰之趣相達候処、多人數ノ乗組、其上荷物等過分ニ積入相成居、全体器械モ相損、此節長崎ヘモ差越、取締方等相成賦ノ由候ヘハ、辻モ對州マテ罷越候儀ハ調兼候段承得、今朝ハ早々出帆之由御座候付、別段御国許ヘ御掛合御手当不被成候テハ、御用立兼可申、此段早々御シラセ申上越候、以上、

三月五日

關山新兵衛

三原次郎左衛門

黒田嘉右衛門様

二白、其許之御都合何様之御事御座候哉、^(朱)星山氏^(矢之助)ヘ

モヨロシク御致声被下度御願申上候、

七五二

別封三通認置候所ニ、内田氏ヨリ別紙之通申来、当藩之蒸氣船ハ迎モ借入之都合相調間敷ニ付、於長崎早々修覆有之、便人等之義ハ、長崎ヨリ外船借受被差送、小蝶丸之儀ハ、博多湊へ回船有之候様、内田氏へ申遣置候、右之趣一往貴様迄御掛合、御決心之所承届候上、右次第返答ニ相及義、当然之事ト相考申候得共、左候テハ往返旁延引ニモ可罷成申談、右通取計申候間、左様御得心可被下候、此段早々為御心得申上置候、以上、

〔朱〕「慶応元年」

三月五日

太宰府ヨリ

關山新兵衛

三原次郎左衛門

久留米滞在

薩州

黒田嘉右衛門様

七五二 黒田彦左衛門ヨリ同嘉右衛門へ書翰

(以下三十二通)

一筆啓上仕候、去廿七日博多ヨリ之飛脚、一昨三日到

着、御尊書相届難有拜見仕候処、御都合能博多へ御着

被遊候段、其后御草臥モ不被遊、益御機謙能被遊御勤務、重畳目出度御儀奉恐悦候、於爰許イツレモ無異罷

申候間、乍憚御安意思召可被下候、然ハ五卿方之儀

ハ、無異条幸府へ御転宿相成、御疑念モ無之由、是ハ

先御都合之御事ト奉遠察候、長州之儀ハ激徒大ニ勢ヲ

得候由、是迄吉川等尽力之詮モ相立不申、右次第ニ付

テハ、モフハ致方モ無之次第罷成申候半、残多事ニ御

座候、尤久留米并對州国難一条ニ付テハ、彼是御配慮

之程奉恐察候、扱五卿方警衛人数更代一条ニ付テハ、

直様市來トモ委細引合仕候ニ付、主宰者決テ御軍賦役

之内へ被仰付、交代一緒ニ被サシ越申候半奉存候、奉

申上度儀共御座候へ共、其許ヨリ之飛脚、今日俄ニ被

サシ返候ニ付、何モ細事得不申上候、先ハ御返報迄奉

申上度如是御座候、尚期後音諸慶可奉申上候、恐惶謹

言、

三月五日

彦左衛門〔朱〕
〔嘉右衛門ノ実弟〕

其外ヨリヨロシク

嘉右衛門様

〔日置郡〕
〔川内市〕

追テ、伊集院町并水引ヨリ御尊書モ直様相届、イ

ツレモ難有拜見仕候、善兵衛義其後正路相勤申候由、市二ニモ同断相勤申候由、無此上事ニ御座候、扱形菓子一箱節句祝物トシテ進上仕候間、御笑納可被下候、返ス〜モ俄之事故、何モ不取敢候間、後音細事申上候様可仕候間、左様御思召可被下、可祝、

七五三〔幡島三郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰〕

封書

久留米ニテ

従博多

黒田嘉右衛門様

幡島三郎

要用

謹啓仕候、宰府奉別後、弥御清適可被成御起居奉遠賀候、先以弊藩之儀段々御苦心御執掌中、遠路御苦勞被成下候段、誠ニ以難有、不堪感戴之至候、抑弊藩之義二十年来之錮疾ニテ、是迄推移来居候事故、急ニ連ヒ兼候勢モ可有之、猶更御苦心被成下候半ト奉敬察候、然シ
尊藩之御力ニ頼、恢復之義モ不遠ト奉存候、何卒幾重ニモ宜敷様奉伏願候、陳処右弊藩之義ニ付、御苦心被成下居候申上候モ、甚不都合之次第ニ御座候得共、

先達テモ宰府ニテ段々申上候通、對藩之義、此節 尊藩且諸藩ヨリ御使者参候事相聞、一旦折合居候様子ニ候得共、尚正議之士繫獄・蟄居等モ不少、彼勝井暴逆此迄之処置ニテ相考候得ハ、此等モ何時又及誅戮候哉モ難計、且又是迄段々彼ヨリ諸藩へモ手ヲ廻居候義ニ付、事及遅引居候テハ、種々之書ヲ引出シ、彼地ニ渡候上モ、事之難易ニモ大ニ關係致可申被考候、寔以彼藩之義、危急存亡ニ迫り居、弊藩之儀ハ未タ夫程之事ハ無之、其上弊藩之義ハ、此節御苦勞被成下候上ハ、決テ暴戮等之氣遣ハ無御座義ト奉存候、就テハ当藩使節モ、弥十一日欽十二日迄ニハ屹度出帆可致決着致、平田大江モ今明日ニハ当所へ廻船可致ニ付、何卒宰府ニテ御然諾被成下候通、弊藩之義ハ右暴戮等ニ及不申丈之所ニシテ、一往御引取被下、對州へ御渡海之上、毎度御苦勞被成下、恐入候義ニ候得共、又々御再行被成下候義ハ相叶間敷哉、左様不被成下候テハ、弊藩ヨリ對州へ対シ、一向信義不相立事ニ相成候ニ付、何卒其等之情実御酌取、速ニ御帰博御入對被成下候様、万々奉願候、猶委細ハ對藩人書中御承知可被成下候、右御願迄草略如此ニ御座候、イツレ拜眉万縷御礼可申上

候、再拜敬白、

〔卷「慶応元年」〕

三月九日

幡島三郎

黒田嘉右衛門様

〔付箋〕

侍史

「久留米人脱走ニ
テ三条へ就レ」

七五四 〔西田彌四郎外一名ヨリ黒田嘉右衛門へ

書翰〕

御分袂以後弥御堅勝珍重奉存候、然ハ私共再往田代へ差越、貴公御論之通五十嵐同伴、博多へ差越、太田初へ及議論候処、太田之論ニハ、成程五十嵐存慮之程、臣子之分ニ於テハ必然之事ニ候得共、五十嵐一兩人ニテ、国内平穩之所置ニ付テハ、勝并親戚之続モ有之、勿論是迄平田初腹心之者共ニモ、少ハ表裏之次第モ相生居、此末逆モ十分之所置ハ無覚束、太田其外有志輩不安心之事之由承候付、兎角此上ハ五十嵐得卜御談判有之、御決議結局之所致承知度申置候所、其後五十嵐議論モ稍太田等同論相成向ニ候間、初ヨリ月形へモ依頼之事故、同人ニモ一会イタシ度トノ事ニ候所、折柄月形宰府へ罷出居候、就テハ宰府ニ於テ、私共モ面会イタシ、一同致決議具候哉承り、昨日五十嵐・太田等

同伴、当所罷帰、今日右兩人并月形等出會、彼是談判有之、終ニ五十嵐モ弥同論相成、イツレ此上ハ最初通諸藩使節致渡海不具候テハ、国礎髓ニ築立之儀出来申間敷、一旦此涯平穩相成候テモ、再往紛乱相生候欵モ不被計候間、是非貴公初其外使節、急ニ渡海之儀歎願之事ニ候間、私共ヨリモ尚又尊公へ願越具候様呉々承申候、尤五十嵐・太田兩人同伴、其元踏越直ニ可及示談段モ承届候間、ヲノツカラ右兩人ヨリ細々御聞届可被下候、先ハ形行迄早々申上候、以上、

〔米〕慶応元年

三月九日

筑前太宰府ヨリ

津留金次郎

西田彌四郎

筑後久留米滞在

〔付箋〕「同藩人」

黒田嘉右衛門様

要詞

七五五 大山彦太郎ヨリ黒田嘉右衛門へ面会ヲ請

フノ書翰

未得貴意候得共、自宰府一輪呈上候、先生之御事兼々

去年於京師モ承届居申候、先月〔卷〕〔友妻〕初吉并君ト上京、於御

邸モ色々御世話ニ相成、此節罷帰申候、根元ハ土左之〔佐〕者ニテ寺石ト申者也、於小倉大島先生〔卷〕〔西郷吉之助変名〕ニ拜眉仕候者也、

於京師天下真有志者ト様々約談仕、夫ニ付先生ニ是非共御目ニカ、リ度、御国迄モ事ニヨリ参上可仕相舍居候処、此節是辺ニ御来光不計奇機、何卒色々拝顔相願度候ニ付、当宰府ニ御越被成候ハ、如何程御急キ候トモ、鳥渡御沙汰被仰付度奉願上候、取急極失礼不顧呈一書申上候、再拜謹言、

三月九日夜

三條殿内

大山彦太郎

黒田嘉右衛門様

七五六〔蓑田傳兵衛ヨリ黒田嘉右衛門外二名へ〕

書翰〕

對州ヨリ小蝶丸御借入之相談相成候由ニテ、博多表へ乗廻候様、西郷吉之助方ヨリ右船乗頭春山彦右衛門方へ問合相成居、其後内田仲之助博多上陸之折、各方ヨリ對州之儀、別テ急迫之時機無抱趣ニ付、急々御船船借渡之道相運候様承趣モ有之候得共、右御船之儀京都

ヨリ急成御用向ニテ出帆相成候付テハ、イツレノ筋御

國元へ早々廻着之上、其許へ相廻候儀ハ、如何様共可取計ト之趣示談之上、其許出帆罷下候段仲之助申出候、就テハ對州之事情実以難黙止無御抱儀ニハ候得共、京都表御用ニ付、爰許ヨリ急速不致出帆候テ難相濟義有

之、近々小蝶丸出帆被仰付筈ニテ、外ニ蒸艦之義モ、大坂・長崎へモ被召出置、機械等相損居候御船モ有之、夫々此涯都テ御船賦相成居付テハ、乍御氣之毒御借渡之義難相調候間、各方ヨリ程能断被申入候様、宜被取計候、右ニ付テハ御内沙汰之趣モ有之候付、飛脚差立

此段早々申越候、以上、

〔卷〕〔慶応元年〕三月十三日

蓑田傳兵衛

黒田嘉右衛門殿

三原次郎左衛門殿

關山新兵衛殿

七五七〔黒田嘉右衛門ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰〕

對州ヨリ小蝶丸御借入之相談相成候所、右ハ京都表御用付、急速不致出帆候テ難相濟訳有之、對州へ御借渡之義難相調候間、程能断申入候様御問合之趣承知仕候、

對州之儀筑前使節并五卿ヨリノ使者同伴ニテ、去ル十五日博多出帆相成候由、依之私ニハ当地用濟次第致渡海吳候様、對州人ヨリ掛合有之候段、三原次郎左衛門・

關山新兵衛宰府ヨリ申越候、然所当地之幽囚ハ、一朝一夕之起リニ無之、積年之旧怨固結ニテ、中々弁解六ヶ敷、大ニ俗論沸騰之由ニ御座候得共、頻ニ要路之者共へ迫リ、説得ニ及置候付、大抵ハ解立、殊ニ中務大輔様別テ御奮發之由ニテ、是非中將様被仰進候通、為相運度ヨシ御趣意ニ有之、既ニ兩日中ニハ御決答可相成段、当藩君側之者ヨリ為相知、其御返詞有之迄ハ滞在イタシ吳候様、無余義申聞候付、今明日ハ右之御決答相待居申候間、御返詞有之次第速ニ形行申上越候様可仕候、先ハ右之御答迄ニ早々如此御座候、以上、

(朱)慶應元年
三月十七日

黒田嘉右衛門

叢田傳兵衛様

七五八〔關山新兵衛三原次郎左衛門ヨリ黒田嘉

右衛門へ書翰〕

其後不得御意候得共、弥御堅勝之筈珍重奉存候、然ハ御国許ヨリ飛脚今日九ツ時致到着、別紙相届候間、早

々差廻申候、使節乗船之儀、對州御借入之向ニ間違ニ相成候軟ト相見得候、勿論西郷氏ヨリ春山へ問合之書面ニモ、御借入之向ニハ不相見、爰元ニテ私共ヨリ内田

仲之助へ引合之節モ、乗船ノ所ニテ致示談置候処、如何之間違ニ候哉ト存候、筑前使節ハ去ル十四日乗付候テ、十五日出帆相成筈之由、多田莊藏博多ヨリ申越候、尤同人ナトモ乗組之由、就テハ貴公之義、米藩御用濟之上ハ、早目ニ御渡海被下候様トノ事ニ御座候、此旨御掛合申上越候間、御国へハ貴公ヨリ御返答御申越被下度御願申上候、以上、

(朱)慶應元年
三月十七日

三原次郎左衛門

關山新兵衛

黒田嘉右衛門様

七五九〔今井榮ヨリ黒田嘉右衛門星山矢之助へ

書翰〕

(付書)

〔筑後
久留米人〕

黒田嘉右衛門様

今井榮

星山矢之助様

御直披

御両君様弥御清適被成御滯座奉賀候、扱永々御迷惑干

万之至ニ奉存候、漸今夕御返答御座候筈、イツレ私罷出候義ニ可相成、勿論御返翰モ可被進筈ニ御座候、右御案内申上度、扱夫ニ付御異存モ無御座様ニ至候へハ、定テ近々御発途ニモ可相成御様子モ難計候へハ、今夕磯部勤平初例之面々、近辺ニテ御別益申上度、毎度御迷惑ナカラ、其節ハ御出浮可被下候、右申上度如此御座候、御筆答御無用可被下候、早々、

〔朱〕「慶応元年」
三月十九日

榮

両先生

七六〇〔今井榮磯部勤平ヨリ黒田嘉右衛門星山

矢之助へ書翰〕

包紙

黒田嘉右衛門様

磯部勤平

星山矢之助様

今井榮

七六〇ノ一
尚々兎角不順之気候、乍憚御国家之御為別テ御自重被成候様奉折候、

一輪拜啓、暖和之節各位弥御清適被成御入、珍重之御義奉大賀候、爾ハ榮ヨリ御披露ニ及置候 中務大輔様

ヨリ御両所へ之被下物、別楮目録之通差進候間、御入手可被下候、扱弊藩御滞留中ハ、万端不行届之事而已、私共ニハ御懇意被成下候ニ甘へ、例毎失敬相働、何モ御海容之程奉庶幾候、右之段得貴意度、書外后音之時卜草略如是御座候、

〔朱〕「慶応元年」
晚春念二

今井榮

磯部勤平

黒田嘉右衛門様

星山矢之助様

七六〇ノ二
右ニ同封

別啓、御難盃之節ハ、私共コソ殊更酩酊、失礼ヲ極メ候処、御腆篤之御書残シニテ、却テ縮入申候、御同藩様へモ始テ御面会、無御伏藏御快話ヲ伺、大慶罷在候義ニ御座候、御序宜御致声奉願候、扱又不存寄御因産之名葉沢山御投与被下、深辱御礼申上候、勇吉・傳十郎ヨリモ同様厚ク申上呉候様申聞候、其御地ニテハ御引返シ、抑ヨリ万緒御賢勞之御事ト奉深察候、愚筆不尽情、右御挨拶迄早々敬白、

〔朱〕「慶応元年」
三月廿二日

兩人拝

黒田先生

侍史

鮫島 彦 齊

足輕六人

七六一 〔黒田嘉右衛門宛国許御軍役奉行御軍賦

役沙汰書〕

右五卿方為警衛被遣置候三原次郎左衛門一列へ、交代被仰付候、左候于津留金次郎・有馬英之助・星山矢之助儀へ、是迄之通被召置候旨被仰付候、

御国許

横目勤

御軍役奉行

蓑田 新平

御軍賦役

澁谷 彦介

筑前滞在
御軍賦役

本占

黒田嘉右衛門殿

田中正太郎

篠崎彦十郎

取払

右八、其許滞在五卿方警衛人数交代等ニテ被差出候付、

有川 休 八

致取締候様被仰付、其地滞在中物頭之場ニテ被遣候、

兵糧方

染川五郎右衛門

山口吉五郎

寺尾新之丞

足輕二人

大脇彌五右衛門

西郷友右衛門

右五卿方警衛人数交代等ニテ被差出、御賄之儀ハ京都守衛方之振合ヲ以、焚出被仰付候付、右人数別段被差遣候、

大脇正之助

小山田休次郎

島津元丸家来(卷)「(都城領主)」

御広敷医師

組頭

土持攝右衛門
北郷棟太郎

右同人家来

上田矢兵衛

河野源左衛門

財部秀右衛門

加塩善之進

津留千左衛門

大草淺市

持田嘉右衛門

鎌田覺太郎

河野悦兵衛

上田平大夫

大峯太兵衛

鎌田九之丞

藤井慎哉

右其許へ御用之儀有之、被遣候付、御用向之儀ハ、篠崎彦十郎へ得差凶、可相勤旨被仰付候、右之通被仰付、今日差立被遣候付、着之上其許交代人数被差立候儀共、篠崎彦十郎へ被仰合越候付、申談都

合能可被取計候、右衛門殿依御沙汰此段申越候、以上、

丑三月廿八日

御軍役奉行

御軍賦役

黒田嘉右衛門殿

七六二〔今并榮ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰〕

黒田嘉右衛門様 今并榮

内用御直披

尚々時下御自愛專一ニ奉存候、平塚勇吉・松岡傳十郎共へ、御伝言夫々申聞候所、厚ク大慶、猶ヨロシク申上候様申居候、小生義モ不計追々御懇意被下、千万大慶此事ニ御座候、此心同ク、此志同ク候へハ、仮異境ニ罷在候テモ、朋友ニ相違モ無之、マシテ同ク 皇国之地ニ罷在候得ハ、猶更之義ニテ、幾久敷御交接被下候様、為国為民御自重奉祈候、一輪奉謹啓候、暖和之節ニ御座候所、弥御清適被成御在留、奉敬賀候、扱過日ハ御懇書被下、御厚意之御書中忝奉存候、当地御逗留中ハ、追々御懇意被下、深ク奉銘肝、乍去終始失敬而已相働、今更ナカラ恐縮之至

真平御海恕可被下候、御同藩様方へモ厚宜敷御致声奉
希候、然ハ弊藩亡命人御周旋被下候一条、早速御取扱
〔前註卷一「水舟ハ水野丹後」真外ハ真宗外記ノト也
被下、水丹・真外兩人へ屢被及御懇説候処、格別感戴、
頗涕泣ニ及程ニ御座候段、右兩人実情之趣委曲被仰聞、
謹承仕候、扱夫ニ付、唐突本人共ヨリ難申出事情モ有
之候事、当方ヨリ公然召返之命ヲ示候様トノ御事、都
テ謹承仕候、不取敢其筋へ申達置候事ニ御座候、然処
此節俄ニ幕命ヲ以、別ニ難渋之次第被仰出、右取繕
等其外甚以彼是取紛居、何分右幽閉一条ニ取掛候事ニ
モ難相成、一体之評議ニオイテハ、日外御噂申候ニ、
少シモ變動仕候義ハ無之候得共、重役へモ右之方ニ取
込、何分未タ手廻兼候趣ニ相聞候、少シ折合候へハ、
早々右一条ニ手ヲ下シ可申趣ニ御座候、扱夫ニ付、小
生義モ俄ニ江戸出府被申付、今六日爰元出立仕候、依
之、此後御応接被下候義ハ、柘植傳八事宰府出役罷在
候へハ、同人へ御引合被成下候様仕度、勿論同人へモ
其筋ヨリ申聞置候事ニ御座候、右ハ追々延引ニモ相成、
先生尊慮之程モ如何ト、右之趣得貴意候、宜敷御聞得
可被下候、此段早々申上留候、恐惶謹言、

〔采一慶応元年〕

四月六日

今并榮

黒田先生

七六三〔黒田嘉右衛門ヨリ横井大里和田へ書翰〕

御細翰忝致拜見候、陳ハ五卿方取扱一件ニ付、被示聞
趣逐一了承、弊藩存慮之次第ハ、過日御同藩島田君へ
申上置候通ニテ、万事福岡藩へ委任致シ置候事ニ有之、
殊ニ御使者往来、且御文通、他所人御応接等御差支有
無之義ニ付、弊藩ニ於テハ、別段総督府ヨリ承知仕居
候義モ無之候条、此末右等之儀、当藩ヨリ御相談ニ相
成候節ハ、聊不相拒、何モ異存無之趣ヲ以、返答可申
入覚悟ニ罷在候、尚委細ハ期拜眉可申上、先ハ此旨御
報而已、早々、以上、

〔采一慶応二年元月〕
四月十四日

黒田

横井様

大里様

和田様

七六四 對州藩多田莊蔵ヨリ黒田嘉右衛門外二名

へ書翰

尚奉申上候、今日ハ此迄段々厚キ思召ノ有難ヲ、逐

〔卷〕〔平巴〕

一大江初一統ノ者へ申越候、仕出シ等甚混雜仕候儀
ハ、露モ相違無御座候得共、病体ヲ以申詫不申上候
処、一応申訊御断迄ニ奉呈候、拜爾、

一輪呈上仕候、頃日於宰府ハ、恐多モ旅宿へ御枉駕被
仰付候上、万端御懇ニ被仰付、有難仕合奉存候、陳ハ
昨日夕景ニ及、御着ノ御様子奉窺候、折柄大山彦太郎
相見居候テ、暫猶予 御旅館伺公仕候処、彦太郎御心
接中トモ相伺、其上御草臥万々奉察上候テ、態ト御取
次衆迄申上置蒙御免候、今朝早々外堂ノ心得御座候処、
少々不快ニ有之、同藩金十郎へ相委罷在、其俚打過只
今ニ至リ承候得ハ、是モ又持病ノ眩暈相発、石蔵方ニ
平臥罷在候由、依テハ卯平名代旁トシテ罷出御窺奉申
上、兩人共不快ト申候テハ恐多ト申、同人誠心ヨリ取
繕候テ御詫申上呉候由、如何共恐縮ノ仕合御座候、素
リ一ト通ノ義ニモ有之、頗ル快方御伺可奉万謝候間、
何分今夕中ノ処ハ失敬御容恕可被仰付候、將近頃輕微
ノ至奉恥入候得共、龜菓一筥ツ、奉進呈候、御莞留被
仰付候ハ、本懐ノ至ニ奉存候、此段得芳慮度如此御
座候、恐惶頓首、

四月十四日

多田莊蔵

御次第不同、御高許奉願、

黒田嘉右衛門様

大脇彌五右衛門様

染川五郎左衛門様

侍史

七六五〔新納嘉藤二ヨリ大久保利通へ書翰〕

包紙

大久保一蔵様

新納嘉藤二

参人々御中 平安要用

尚々御繁多御央恐入候得共、別紙金子入巻通、木尾

清次江届候様、御申付被下度奉願候、以上、

三月廿六日大坂より被下候御状、村田新八より相届、

難有拜見仕候、京師御出立、浪花迄御下り被成候由、

其後無御滞御安着、愈御勇健可被成御勤、恐悦奉存候、

楮御注文物之料として、金子八両被遣、慥ニ落手仕候、

御縁頭鏝大小出来仕候間、今日之急使便ニ相頼差上申

候、細工如何御氣ニ入可申哉、手間代ハ賦違候とて歎

候得共、自物ニても無之賦之事も、疾申遣候上之事と

て、やり付置申候、成程金銀代こミニは下直ニ御座候、

参人々御中

当地ハとかく高直、色付杯御国にてハ細工人いたし候得共、爰許ハ別段金具師いたし候事、其上書付之通廿
匆馬鹿敷事候得共、いたし方無御座候、将かるや方系
只今出来候て持参候間、間便ならハ中途水濡等之懸念
も薄候間、草々頼差上申候、代料之儀は、先ニハ北郷氏
頼と心得違申上候半かと今考付申候、書附之通御座候
間、左様思召可被下候、金ものハ豊吉ト申ものへ頼申
候、当月迄ハ出来不申候、青木ハ拾七両之賦候得共、
豊吉方ハ拾壹両之賦ニ御座候、此者細工申分ハ無之候
半と考申候、今日立之飛脚請取式通、外ニ縁頭鐔請取
之通、かる屋方系之書出尅通差上申候、先度被遣置候
切羽式枚分之金地かね返上仕候、鐔縁頭と一緒ニ箱ニ
入付申候、右ハ又焼方杯面働と申候付、いつそ一色ニ
まかせ申候、昨日御用召にて規之通取込、今日は御無
沙汰伺ニ夕刻持出し、例通今御用番江出申事にて、誠
此用事迄匆々之乱筆にて申上候、尚奉期定式便候、以
上、

〔慶応二年九〕

四月廿七日

新納嘉藤二

大久保一蔵様

追て御進発旁之儀先方聞合、書附御家老座へ差出申
候、今日便より下り候間、御覧も可被下候、彼にて
ハ別段密義聞得申訳ニ不参候、しかし御進発ハ弥十
六日とちまり申由被申候、細川侯ハ御先手御願にて
被仰付候由、御内意御申込にて被仰付候事やと考申
候、大坂江御着之上、則長州へ御取掛と申義無覺束、
先

朝廷より御難問等被仰出候て、長州所にてハ有之ま
しくやと愚考仕事ニ御座候、兎角長州ハ運よき事か
と存申候、

中将様御事ハ、亦

朝廷より 御召ニ相成可申哉杯、奉想像候事ニ御座
候、以上、

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

七六六〔伊地知貞馨ヨリ大久保利通へ書翰〕

拜啓仕候、時下無御滞弥御清福奉賀候、随て不肖碌々
消光罷在候間、乍憚御休慮可被下候、不相替御多忙御
配慮之筈奉察候、関東も殊之外早ク折合相付候由、御
油断は不相成事候得共、此ニ至り會社内如何ニ持対へ
(会津)

候ても、格別之事ニハ有之間鋪、何分爲天下奉拜賀候、今般太政官江変革向之御達し、此地改正ニ付、無此上仕合、御頭書相添一同江御布告相成申候、此節こそ十分之所ニいたらせ申度、此度ハ書役も不用、自身筆ヲ執、書吏之仕事迄もいたす事ニ御座候、得能氏存慮之書御廻し、大略愚意とも相合し、半ハ施掛候事も有之候得共、大ニ致発明候ケ条も有之、別て見合ニ相成仕合ニ御座候、折角衆説を容れ、広ク相求考ニ御座候間、御多擾中如何ニ御座候得共、御存寄之儀ハ御示諭奉希候、変更も央ハ相片付、当分地頭并ニ三町ニ相掛、不遠議政所大体之定メ、諸向奉行・筆者・小役人再減少迄も、今一層攻付ル心組ニ御座候、刑法御規定ハ、和漢西洋之刑律調へ未相濟不申候、取究ニ到兼候、海・陸軍所も、操練等は盛ニ有之事ニ候得共、大体ヲ存候人無之、出軍・滞陣・軍律等も御定リ無之、何れ英仏式十分相知候上ならてハ、至備之所ニ参リ兼申候事故、葵慎吾・伊東二兵衛も、英式陸軍ニ相係ル書籍は、一切翻訳被仰付故、終候上海軍式も十分之翻訳爲致、無申分処ニ御定相成度致吟味候、衣服之制度且 本邦之御軍制と申もの無之、此ニ至リ此地吟味ニて相決スル

訳柄ニも無之、此ニケ条施行之処、一旦手ヲ閑候、依之 太政官江上書、御沙汰ヲ蒙度と相考、草稿書調差上置申候間、其通御申立可相成、右は奈良原氏江委曲申含置候間御聞取、可然様御賢考奉願候、御地一日万機内外一時ニ御混拳、御施行之御順序も有之、御催促申上訳ニは無御座候得共、差当り束手いたし候間、無余義御献言之処も申上候間、宜敷御了得可被下候、於朝廷御門流も被爲破候得は、御國も御趣意ヲ被留意、御一門方以下之御格被爲破申候、尤御國諸御格ト申候ても、相糺候得は、大方入道様御以来、太平後之御定メノ由、一所持等散高相円メ居候ては筋合も不宜、都之城も封地大分過、此節こそ機會と存申候、削地之儀も御武断被爲 在度、右ニケ条は國家之重事ニ御座候間、篤と取調之上、 中将様 御内慮ヲ奉伺、 太守様江 御相談、且貴契方御始メ御地要路之御方ニも御打合、至公至平遺憾無之処ヲ以御施し相成度、右は追て御相談可申上候、細事は奈良原氏江談置申候間、御聞取可被下候、右奉得御意度、卒ニ如此御座候、恐惶頓首、

〔明治元年カ〕
又ノ四月七日

大久保一蔵様

伊地知壯之丞

玉座下

〔大久保利謙氏所藏本にて校訂〕

七六七 南大 一郎ヨリ黒田嘉右衛門へ書翰

御手簡拝見仕候、然ハ明曉御発程之御趣、折角御途中
御自重可被成候、孰不遠御出浮之上、御面話奉得候、
平戸藩士兩人罷出候由ニテ、手紙一通被差送、慥ニ落
掌仕候、同入時宜ニヨリ私へ面会仕度由ニ候得ハ、右
宿へ無沙汰ニテ、突然私旅宿迄へ参リ呉候得ハ、何時
ニテモ面会可仕候間、御都合モ御座候ハ、其形其通
被下度奉願候、取急先ハ右貴報迄草々如此御座候、敬
白、

五月八日

南 大 一郎

黒田嘉右衛門様

侍史貴酬

七七八 全上南カ書ニ対シ本澤甚兵衛鞍掛馬十郎

ヨリ黒田へ書翰

拝見仕候、過刻ハ不計推参御高配被成下難有奉謝候、

扱別紙態ト為御持被下、難有慥ニ拝見仕候、何レ相鏡、
万々可申上候得共、一応貴酬迄早卒頓首、

五月八日

肥前平戸藩人

本澤甚兵衛

黒田嘉右衛門様

鞍掛馬十郎

七六九〔近衛忠熙書翰〕

昨日ハ賜

勅書、恐入謹奉拝見候、益御機嫌克被為成、恐悦不
過之奉存上候、扱ハ当職ノ儀、一昨日モ中山大納言・三
條大納言江、以一封又候歎願仕置候儀、定テ被聞食候
御事ニ奉恐察、翠山如何様存候テモ、唯今当職辺蒙御
沙汰候テハ、度々奉言上候通、全ク

朝威御為ニモ却テ不相成、折角ノ

聖慮モ、衆人如何ニ存上候テハ、実ニ此上恐多儀、且
夫而已不成、先年来多病別テ逆上強健忘ニテ、家内ニ
テモ毎々不都合ノ儀在之候事、忠房江

御尋被為在候ハ、可申上、家内ノ儀スラ右ノ次第、急
務ノ御用辺ニ、左様ノ儀モ在之候テハ、忽御不都合ノ

御事ト、実ニ恐懼、旁再三色々ト歎願仕候事ナカラ、
其上是非トモトノ

御沙汰、此上ハ何共進退ノ仕方モ無之、甚以痛心ニ候
得共、其刃不被

聞食候上ハ、何共恐々入御理ノ申上様無之、此上ハ

勅約ニ奉從、恐謹御請申上候、何卒

勅約宸筆ノ御趣、御変革不被為在候様、不顧恐懼奉歎
願候、且又

勅約ノ宸翰、可奉返上筈ノ処、辞職ノ期心慥ニ奉存上
候間、乍恐何卒拝領致置度、宜被

聞食候様偏奉願上候、御請迄奉言上候、誠恐誠惶謹言、

(近衛忠熙)
翠山

五月十日

七七〇〔ジャパンデリーへラルド紙抄訳〕

(明治四年カ)

五月卅日出板

ジャツパンテリーへラルト抄訳

ジャツパンメル新聞ニ、長崎ヨリ左ノ電報到来セル
旨ヲ載セタリ、

(口傳)
ニーポール船ホルモサヨリ着セリ、土蕃日本人ヲ襲

へリ、一体攻撃ノ仕方残忍ニシテ、日本人二三名殺
サレタリ、支邦人ハ日本人ニ対シ甚タ信切ニシテ、
救助ヲ与へタリ、

若シ右電報ノ出処、政府ニアラサル時ハ最モ信ス

へキ説ナリ、

七七一〔臺灣事件關係交渉〕

七七一ノ一

五月八日

(明治六年カ)

布政使司布政司應實時、会審同知陳福勲、当領事

館へ入来、品川病氣ニ付、神代書記生應接ス、揆

搦畢テ、

應問曰 柳原大臣ハ幾時発駕、何日可到乎、

神代答 未曾起程元来先月廿二日頃発程ト承ル故、当

館ニテモ、専ラ相俟罷在レトモ、当便迄着到ナキ

ハ、多分御用未整故歟、併シ程モ有ル間敷ト、孰

レモ相俟チ罷在ル、

應云 此内臺灣之新聞、紛紜未タ確寔ヲ不知、貴館ニ

ハ確タル消息モアラン歟ト、今日御伺旁右為御尋

問罷出、

神代答云 下輩日々新報ヲ読スル而已、未得確信公信

中ニモ記載無シ、料ルニ柳原公使渡航ノ筈ニテ、委細面達ノ積リ欵ト存シ、一入相待候、先頃電報ヲ得タルニ因レハ、穩之事ト存ス、夫ハ既ニ陳同知へ御咄申置所ナリ、追々種々ノ新聞ニ少シ不安ヲ懷キ、頻リニ來翰ヲ望ミ、急キ閱スレトモ、当地新聞如キ事、更ニ不申越、然ルニ昨日長崎ヨリ渡來ノ者アリ、此レニ尋ルニ、軍艦二艘・餉船二艘五日前出帆ス、(中國福建省)厦門へ參リタリト、兵ハ三小隊計リナル由、承ル趣ナリ、

應云 新聞紙上種々掲載アル故、李鴻章其外甚タ心配罷在、撫台ヨリモ詳細問合セル様申來リ、李鴻章モ貴国ヨリ清国へ御掛合ナク、征討ハ有ル間敷事ト存スレトモ、余リ新聞多キ故、御尋申可為報知申來ル、

神代云 下輩愚考スルニ、確定セハ柳原全權公使ヨリ懸合モアランカ、長崎ヨリ渡航人ノ話ニハ、全ク前年我國民生蕃ノ残害ヲ受ケシヨリ、派員シテ懲創スル耳トナリ、兵ハ不慮ノ防禦ナラン、

應云 貴国ノ人残害ヲ受シハ、幾時之事ニテ、又琉球人之事ナル乎、

神代云 一昨年・昨年兩度之事ニテ、一ハ琉球人被殘害、一ハ日本備中ノ人ニテ、船荷其外被奪掠、漸クシテ一命ヲ得、則貴国ヨリ護送ヲ受ケ、到滬^{上海}セリ、

應云 罪ヲ糺スハ可有、併シ一応之御掛合ハ可有事ト存ス、御掛合アレハ、李鴻章モ何カ可申入ト存ス、神代云 如何ニモ柳原公使渡航ノ上、掛合モ有ランカ、一時愚考スルニ、若クハ兵艦長崎ニ待合スル隙ニ、測量旁厦門辺へ罷越タル欵、長崎ニモ未タ兵残り居ルトノミ承ル、外ニ確報ナキ故、唯思想スル而耳、

陳福勳云 新聞紙ニ軍艦十艘長崎ヲ越、既ニ臺灣へ赴ト記載スルハ、間違ナラン、長崎ヨリ被參人ハ如何人哉、

神代答云 右ハ兵艘二隻・餉船二隻ト而已承ル、又來人ハ、長崎縣ヨリ佛租界騷動ノ新聞ヲ聞キ、為見聞一小吏ヲ遣タリ、臺灣ノ事ヲ承リ候へトモ、前陳丈ケノ事ニテ、其余ノ事ハ存不申、

陳云 租界一事ハ、全ク電信ノ新聞ニテ、御承知ナラン、

神代云 然り弟等諸事新聞ノ紛紜ナルヲ見、本国ノ確

信ヲ不得レハ、独り氣ヲ遣ヒ、貴国ヨリ兵ヲ出シ、

我兵ヲ拒ム様ノ新聞アレハ、若クハ我軍艦行タラ

ハ、事端ヲ滋生スル事ハアランカト、是誠ニ愚考

ナラン、又思縦へ出会ストモ、無訳鬭争之事ハア

ル間敷トモ、

應云 左様ノ事ハ無之、通弁ノ人モアレハ、必ス応接

アル可シ、猥リニ事ハ起スコトハ無キ事ナリ、其

儀ハ可以放心、

神代云 弟モ左ハ存スレトモ、確信ヲ不得、唯新報ノ

種々ニ迷ヒ候ナリ、

應云 柳原大臣ハ何日御來滬可相成欵、又暫クハ当地

御滞在欵、

神代答云 若シ此便ニ被參候ハ、貴国ノ來月初旬ニ

着ナラン、当地滞在モ永クトモ不思、速ニ進京ナ

ラン欵、

應云 此節ノ一件ハ、必ス北京へ照会アルコトニ存ス、

弟滞在中ニ御着アラハ、為御知ヲ乞、早速御伺ヒ

可申、

神云 其儀ハ承知致候、暫クハ御滞在欵、

應云 兩三日中ニ動身可致確信モアラハ、為御知ヲ乞

フ、

神代云 若柳原全權公使着到候ハ、速ニ為御知可致、

又確信ヲ得ハ可申入、若シ御出立後ニ候ハ、陳

同知へ可申入、

應陳 御確信アラハ速ニ承り度ト申テ別ル、

七七一

五月十日

神代書記生應實時へ答札トシテ罷越候節ハ、先ツ

陳同知方へ行キ、應公館ヲ尋ヌルニ、

陳福勲云 今晚既ニ出帆、蘇州へ歸リタリ、

神代云 夫レハ失敬セリ、甚タ残念ニ存ス、

陳云 又參り候ハ、直ニ為御知可申、其節御出ニ相

成可然、

神代問 又被參候ヤ、

陳云 柳原殿兩三日中ニ御着候ハ、滞在御待可申答

ニ候へ共、確實相分り不申、因テ一応引取候、御

着ノ儀ヲ為知候ハ、直ニ罷出候ト存候、

右ノ通申聞候ヲ勘考候へハ、河普請見分ハ名目ニテ、

全ク臺灣事件ニ付、柳原殿へ何カ応接致候為メ、撫台

ヨリ差出候事ト存候也、

〔編集さいカ〕

七七二〔新納嘉藤二ヨリ大久保利通へ書翰〕

包紙

江戸

御国許

新納嘉藤二

大久保一藏様

要用

尚々京師には申候ハ、岩下君早く御下向、政府へ御居被成候様御吟味被成下度、主宰無御座候てハ、私共御役場も勤悪き事共御座候、五指かわるゝに
て一拳に成兼申候、以上、

去る廿一日之御状昨日相届、難有拝見仕候、暑中無御障、愈以御壮健被成御勤、恐悦之御儀奉存候、次に私無異連勤仕候間、乍憚御意易思召可被下候、然ハ
大樹公御下坂後一・會・桑下坂、初発之見込相違、関西之諸侯、肥後・久留米之外ハ寂然として不応、さていきほひ込たる輩も仕掛られず、藝州を中に入、小毛利と吉川へ寛典之所置に振向達方も有之模様、且一・會・阿闍上京、去る十八日参

内有共之事細意御示被下、始終如何と案居候処、事ハ兎も角も初て安心仕候、惣て御滞坂中町家迷惑之事共〔宋場伝内〕木傳よりも申来、根から散々なる事に御座候、

禁庭にてハ、御先見も被為在、御丁寧御諭被遊候を不奉、御書取、奉突返杯いたし候て、今更阿闍など面皮なき事候半と、さすがに氣之毒に被存申候、其位之たましにてハ、何事もとめとれ候程無竟束御座候、当地無事水泉州・小栗上野口きけ申候、琉球封王使に付、慶長度吹替え願已に濟掛候処、小栗一人異論にて不相濟趣、去方にて承得候か、泉州侯勝手へさし越、幕府損も余り無之訳、琉球無執事実手扣にいたし、内慮伺さし出候処、得と勤考之上御返詞可被下との事、又小栗へさし越、是ハ殊に手扣書も委敷いたし、恭敬を尽しさし出申候処、御吟味之御趣意ハ不存候へとも、長崎・横濱等相開、世上旧時に不似候間、政慶良にて濟ぬ筈ハなしとの事にてハ有之ましくや、表向御願書御差出候義、善悪差図難致とて、手扣書も突返申候、長崎・横濱とハ珍国別楚弁解、第一季敷出立候を、只右通返詞いたし申候、御内用濟ハケ様之時之為に被下候、かねて物も与有之事に御座候処、不快なから尚又頼と

哀けに申て帰申候、然処兩日いたし、泉州より差向願出候ても、難被為調との返詞御座候間、今ハ可施術尽果申候、最初去方久野へ内々聞繕候処、小栗一人之論高くして難破と申候、其高論と申かね、目段々聞答居候事も可有之、さてハ焼失の製鉄所船之事も願立に相成居候へとも、是も仁恕之吟味ハ致ましくやと心配仕候、彼等今通之氣請にてハ何事も叶申間敷候、奴等利得有之筋ハ致候とて、式拾万両之拝借内意申込御座候、立花へあたえ参候てすゝめ申事にて、十五万濟候得ハ、三兩彼方へあたへ申振合之由、閣老初分取いたす事と被察候、是ハわりよろしき算当御座候間、濟さへいたし候へハ、よろしく御座候、かゝる事にてても濟不申候てハ、御勝手方活計之道無之様子に御座候、

一被下候御状御認掛之所へ、村田新八到着仕候て、列合一人之儀も御都合可相成段被仰聞安心仕候、堀直(堀直太郎)へも御状之趣見せ申候、蘭学生兩人ハ未着に相成不申候由、又木場直(木場直右衛門)へ細呈書も託申候、御下国内にハ上着に相成候筈と考申候、尊君にも七月初旬暫時御下国之御賦御座候由、炎天之砌御苦勞奉存候、暑邪など折角御賦被成度奉祈候、村田杯も蒸氣船へ同御乗せ被成候御賦之由、

丁度よき時宜に御座候、足立梅景義ハ木場直便に委敷申上候通、未仕舞料等も不被下内にて、幸と則御差留之趣相違申候、然処其後内輪之事承候へハ、当分之居家も早脇方へ譲渡候定約いたし、内金さへ取て内仕舞に遣果し、此上ハ御長屋にても拝借可致と心配いたし候由、氣之毒御座候へとも致方無御座候、御国許にて太郎より申上候通、第一言語難聞故、学才とても抜群と申義も無之、人品ハ至てよろしく候へとも、起て推挙にてても致程之人物にハ無御座候、坪井芳州義も其後(肥後七左衛門)肥後七よりも自分同様に諭させ、久木山(行達)も尚又自身面会申論候へとも、すゝみ不申様子に御座候、細事ハ久木山より可申上候間、右筋而已申上候、

右御返事旁申上候、以上、

六月廿九日 新納嘉藤二

大久保一蔵様

七七三〔砲術館造立付砲術稽古被仰付〕

慶應元年六月

此節砲術館御造立ニ付、六組井水軍隊夫々式日相建、砲術手続稽古被 仰付、軍勤等ノ儀

御城於下馬稽古方被 仰付筈ニテ、御梅門前通井、金藏上通通融被差留、

御殿へ罷出候面々ハ、其節ニ限り御里通被通候儀被成御免候条、聊混雜ノ儀共有之間敷候、此旨大番頭・御小与番頭へ可申渡候、

六月 右衛門

七七四 督府江建白写一

今般長防御討入ノ義ニ付、連々申上候通り、条理名分十分御必至ト申ニモ無御座ニ付、却テ彼等カ怒ヲ激セラレ候姿モ有之 何分ニモ御改図被為在度奉存候処、過日来追々致侵入、既ニ近郊迄進來、此勢ニテハ御本陣御在所モ危殆ニ及ヒ可申、最早難捨置ニ付、申上候次第モ御座候ヘトモ、昨今ノ敵情推量仕候ニ、強テ暴進ノ姿モ相見不申、蓄力熟謀ノ儀モ可有之歟、此所ニテ熟ト御遠謀被為在度義ト奉存候、敵ノ来路唯此一道而已ニハ無之海道并石州口等皆敵区ト相成居候間、一旦御手始ニ相成候時ハ、諸道ヨリ百端出没イタシ候ヘハ、御策心ノ程如何可有之哉、且仄ニ承候ヘハ、於坂城ハ乍恐御大事ノ様子、仮令長州夷滅ニ至リ候テモ、

天下ノ勢御挽回可有之トモ難申、天下ノ勢御挽回被為在候ハ、長州ノ事暫被捨置、十分御勝算ノ上、御再討相成候テモ、遅カラヌ御事ニハ有之間敷候哉、御柱石ノ御任ニオイテ、軽重緩急孰ニ可有之哉、御熟慮有之度奉存候、此等ノ儀ハ僭越ノ至ニ候ヘトモ、実ニ天下ノ重事活乱ノ関カル所、且存旨申上候様御垂問モ被為在ニ付、無腹臆鄙見其俣申上候、以上、

七月

七七五 督府江建白写二

長防御討伐ノ義ニ付テハ、連々申上候通り、乍恐名義適當、条理明白ト申ニモ無之ヨリシテ、彼士民等已ノ罪ノ所在ヲ不知シテ、却テ君父ノ仇敵ト相心得、今日ノ次第ニ立至リ申候所、御味方諸藩オイテハ、去年以來久々ノ屯集ニテ、士気国力ハ余程消耗、養力休士ノ間モ無之、其俣必死反噬ノ究冠ニ被向候ハ、御良策トモ不奉存、加之石州口其外攻口ハ更ニ御討入ノ聞モ無之、藝州口本街道而已御行懸リト申ニテ、御猛進有之候テハ、徒ニ人民塗炭ニ苦候迄ニテ、結局御凱旋ノ著モ難計而已ナラス、約リ人心嚮背ニ係リ、不容易御不

都合ト奉存候、兼テ御書達モ有之通り、於坂城御不例ノ御様子、絶言語奉恐入候次第ニテ、弥以人心危疑兵氣沮喪、假令此余嚴重諸藩江出兵御催ニ相成候共、億万ノ兵億万ノ心ニテ、乍恐終ニ不為其用、却テ如何成禍害ヲ引起可申哉ト不堪杞憂、素ヨリ申上候迄ハ無御座候ヘ共、用兵ノ道強テ猛進計ニテモ無之、相時而動度可而行ト申事モ有之、乍慮外時態御熟察、軽重御斟酌被為成、何分此場合御改凶、一ト先坂地迄御班師、列侯諸將被召会熟ト御咨詢、天下人心ノ所帰ヲ以、御明戴被為在候義、今日ノ御急務ト奉存候、弊領ニテモ民庶不一方、疾苦ニ陥リ難堪愁訴候ヘトモ、暫抑制仕人数差出備不虞置候迄ニテ、昨今眼前ノ交戦袖手傍觀、如何ニモ不情ノ取計方ニ当リ、氣ノ毒仕候ヘトモ、全ク私情ヲ忍ヒ、公義ヲ伸申度鄙見御諒察被成下、長繰々モ上文ノ趣御採用ノ程、為天下奉懇願候、此段申上候以上、

八月

鹿児島県史料編さん関係者

顧問

聖心大学 講師 大久保利謙

早稲田大学 教授 竹内理三

学習院大学 学長 兒玉幸多

東洋大学 教授 沼田次郎

前東京大学 教授 小西四郎

東京大学 教授 山口啓二

委員

鹿児島女子短期大学 教授 北川鐵三

鹿児島大学 教授 桃園惠真

全 教授 原口虎雄

全 教授 四本健光

全 教授 五味克夫

全 教授 桑波田興

前鹿児島県立青少年研修センター所長 村野守次

宮之城町教育長 山下千本

前鹿児島県維新史料編さん所編集課長 田島秀隆

所長

芳 即正

総務課

岡本政徳

安田 繁

川口 實

西迫清成

本田親宣

今別府修一

萩原佳代子

編集課

田實 勇

下堂園純治

宮下満郎

大德利男

堂満幸子

久留涼子

坂口香代子

鹿兒島県史料

忠義公史料 第三卷

昭和五十年十二月一日印刷
昭和五十一年一月十日發行

編集 鹿兒島県維新史料編さん所

発行 鹿 児 島 県

印刷 凸版印刷株式会社